

目次

巻頭言			
近くて遠い列島の記憶をつなぐ	北海学園大学教授	手塚 薫	1
《特集》 奥尻島のいま			
奥尻島での研修を終えて	人文学部日本文化学科 1年	中村 美月	3
奥尻島研修での学びと考えたことについて	人文学部日本文化学科 3年	栗原 一華	9
奥尻島におけるコロナ禍前後の例祭	小樽市総合博物館 学芸員	蟬塚 咲衣	15
学生課外活動報告			
斜里町研修での学び	経済学部地域経済学科 2年	伊藤 赴	21
斜里町での研修	人文学部日本文化学科 3年	飯塚 美月	27
斜里町学外研修を終えて	人文学部日本文化学科 3年	柄澤ののは	35
課程科目学生レポート			
ミニミュージアムのねらいと講評	北海学園大学教授	手塚 薫	41
博物館経営論 ミニミュージアム制作を振り返って	人文学部日本文化学科 3年	佐々木円香	43
博物館経営論 ミニミュージアム制作を終えて	人文学部日本文化学科 3年	神野 光	51
博物館経営論にて学芸員課程の集大成を	経営学部経営情報学科 3年	松山陽奈子	61
博物館経営論 ミニミュージアム制作を振り返って	人文学部日本文化学科 3年	宗廣みこと	67
2022年度 博物館資料論 講評	北海学園大学講師	水崎 禎	73
博物館資料ドキュメント 『ミニカー ～ダイハツ Copen LA-L880K デイタッチャブルトップ～』	人文学部日本文化学科 1年	飯田ゆき乃	75
博物館資料ドキュメント 『桜のミラー付きキーホルダー』	人文学部日本文化学科 1年	小本 若奈	81
博物館資料ドキュメント 『アイヌの女性の木彫りのキーホルダー』	人文学部日本文化学科 1年	田口 真帆	86
博物館資料ドキュメント 『卓球ラケット ～VICTAS 社 Koji Matsushita～』	人文学部日本文化学科 1年	遠田 穂香	91
博物館資料ドキュメント 『サンタとリンゴのヒンジボックス』	経営学部経営情報学科 1年	松川 千恵	97
博物館資料ドキュメント 『ブックカバー』	経済学部経済学科 3年	榊原 大輝	102
編集後記			107

*学生レポートの掲載にあたり、体裁を整える必要から表記の統一などの手直しを行っています。

巻頭言

近くて遠い列島の記憶をつなぐ

北海学園大学教授 手塚 薫

毎年2月7日は「北方領土の日」である。この日が来るたびに「近くて遠い島」についてのほろ苦い思い出がよみがえる。2006年の夏、私はアメリカ科学財団が支援する先史時代における千島列島への人の移動と適応を究明する国際的な研究プロジェクトチームの1員として、ウルップ島の南西部に位置する縄文文化の集落遺跡のすぐそばにテントを張って2週間ほど滞在しながら発掘調査を行っていた。天気の良い日には、そこから南西の方向に北方領土の東端に位置する択捉島が見渡せた。アメリカ人とロシア人から成る研究プロジェクトの別働隊は、その択捉島に上陸し、移動しつつ先史時代の遺跡の探索を行っていた。調査を開始する前に、サハリンの州都ユジノサハリンスクでプロジェクトチームの代表が、現地のジャーナリストの取材に応じており、我々が千島列島で調査を開始した直後に、計画の目的や概要が新聞記事として報道されたという。その事実はすぐに日本外務省にも伝わり、職場の上司から、ロシアのビザを取得して北方領土に立ち入った米国人チームに直ちに抗議をするようにとの電話連絡を受けた。北海道知事、北海道総務部北方領土対策本部が協議し、決然とした意志を示すことになったというのがその時の説明であった。行動を共にしていたロシア人については、ロシアが実効支配している現状では抗議の対象ではなかった。当時私は北海道立の歴史博物館の学芸員として勤務しており、イリジウムというグローバル携帯電話を持参し、調査期間中にも職場との間で定期的に連絡を取っていたため、こうした国内の緊迫した受け止め方をリアルタイムに把握できたのである。北方領土に対する日本の主権を主張するためには、一日本国民が日本国を代表してアメリカ側に抗議をするより、日本政府が外交チャンネルを通じて正式に抗議する方がよほど効果的であるはずなのに、困惑したことを覚えている。

今年も2月7日に根室市で元島民や返還運動関係者ら約850人が集う住民大会が3年ぶりに開かれた。こうした活動は多くの人に領土問題を知ってもらう目的があろう。ロシアとの領土交渉は途絶えて返還の道筋は見え、元島民の高齢化が進む。コロナ禍で2020年以降、ビザなし交流は中断し、ウクライナ侵略後の2022年3月にロシアは停止を表明した。元島民らは、コロナで中断したままの故郷への訪問や墓参の再開を願っている。これに先立つ1月14日に札幌市内で北方領土がテーマの高校生弁論大会が開かれ、釧路北陽高校の2年生で、祖母は6歳まで国後島泊村で暮した島民3世が最優秀賞に選ばれたと2023年2月3日付北海道新聞朝刊「ひと」欄で報道された。これによれば、元島民から詳細な情報を聞き取って戦前の島の街並みを3Dで復元することを提案し、「私たち若者は北方領土の記憶をつなぎ、未来を見据えなければならない」と訴えたという。2年前には総合的な学習のなかの平和学習の一環として、高知県の南国市立大篠小学校の6年生が元島民や返還のために奔走する大人の話オンラインで聞き、知識を深める事例なども

あった。このように、領土問題の解決は長期戦になり、元島民は高齢者が多く、返還運動を継承するためには若者の参加が不可欠であることもよく理解できる。

一方で、なぜ北方領土問題が生じ、日ロ間で考え方が異なるのかについて理解しておかなければ、知らないうちに政治的なパフォーマンスを演じる小道具にされてしまう懸念がある。そうした背景を子どもたちが冷静に学ぶ機会を与えることが真に教育的な配慮というものであろう。なぜロシアが北方領土を実効支配したのかについては、高校の日本史の教科書にも載っている「ヤルタ会談」と「サンフランシスコ平和条約」の2つが重要である。前者は1945年2月にクリミア半島のヤルタで、ローズヴェルト、チャーチル、スターリンというアメリカ・イギリス・ソ連3カ国の首脳が会談をして、ドイツ降伏後2～3カ月以内のソ連の対日参戦や、ソ連への南樺太の返還および千島（クリール）列島の譲渡などの秘密協定（ヤルタ協定）が結ばれた。1951年にはサンフランシスコで日本と48カ国とのあいだでサンフランシスコ平和条約が調印され、日本は独立国としての主権を取り戻したが、領土に関して厳しい制限が加えられた。すなわち、朝鮮の独立、台湾・南樺太・千島列島などの放棄が定められた。また、ソ連は講和会議に出席したものの調印せず、日本と平和条約を結ばなかったことが今日にも尾を引く外交問題として残されている。

歯舞、色丹、国後、択捉の北方4島は、日本が放棄した「千島列島」の範囲に含まれるか否かに関しては、いまだに日ロはもちろんのこと、日本人の法学者らの間でも見解の一致はみえていない。日本外務省が主張している千島列島イコール「ウルップ島以北の18島」という解釈、つまり、サンフランシスコ平和条約で日本が放棄した千島列島から国後、択捉両島が除外されるという法律的な解釈は、根拠が薄弱であるとの主張があるからである（木村汎2005『新版日露国境交渉史—北方領土返還への道—』角川書店148頁）。

サンフランシスコ平和条約時にアメリカは、ヤルタ協定を実行に移すべく、千島列島のソ連への引き渡しを認めるつもりであったが、その後態度を一変させ、日本による千島列島の放棄を決めるだけとし、その列島の帰属先をあえて決定しなかった。それは日本とロシアの間の立場の隔たりを大きくし、結果的にいまだ北方領土の帰属が明確になっていないことの要因になっている。

奥尻島での研修を終えて

人文学部日本文化学科1年 中村 美月

1. はじめに

私は、2022年8月11日から15日までの5日間の日程で奥尻島研修に参加した。私が研修に参加した目的は、奥尻島で実際に学芸員をされている稲垣森太さんに会い、実際の学芸員としての仕事を目にするのと、足を踏み入れたことのない奥尻島で島について学び、現地の人々の生活や文化について実際に聞き取り調査を行い、学ぶことである。

本稿では、奥尻島に滞在した時間の長い、11日から14日を中心に場所ごとに順を追って記載していく。

まず、2節では、稲穂ふれあいセンター歴史民俗資料展示室での作業からの学びを中心にまとめ、次いで3節では奥尻島津波館での学びまとめる。4節では、赤石地区で行ったワークショップについてまとめる。これらを踏まえて、奥尻研修での学びや成果を述べる。

2. 稲穂ふれあいセンター歴史民俗資料展示室



写真1 甲板から見えた奥尻島



写真2 稲穂ふれあいセンター

稲穂ふれあいセンター歴史民俗資料展示室での研修1日目と3日目にわたって行われた。

1日目は4:00に学校に集合し、霧が立ちこめる中、バスで江差へと向かった。江差につく頃には、快晴であり、お盆休みで帰省客の多い中、荷物を抱えてフェリーへと乗り込んだ。波が予想よりも高く、少し酔いかけたため甲板へと上がったが、そこではだんだんと近づいてくる青い海に浮かぶ奥尻島の姿が見え、奥尻島研修への期待が高まったことを覚えている。

上陸してからは、海洋センターへ行き、奥尻町教育委員会へ挨拶に伺った。センター内には、海の切り絵や島の写真が飾られており島の生活が垣間見える瞬間であった。その後昼食をとり、稲穂ふれあいセンター歴史民俗資料展示室へ向かった。

稲穂ふれあいセンター歴史民俗資料展示室では、奥尻島唯一の学芸員である稲垣さんと挨拶を交わし、自己紹介と近況報告を受けた。稲垣さんによれば、島の学芸員として手広く研究しており、現在は青苗地区の遺跡発掘で出土した勾玉についての研究と45年間放置されているという発掘調査報告書の執筆活動をおこなっているという。このことから、学芸員として専門外の分野について研究を行うことや、学術書を書くという、学芸員という役割での守備範囲の広さにはとても驚いた。

近況報告後、研修が始まった。研修の内容は、展示パネルの作成と寄付品のデータ作成

である。この作業は、細かな測定や図解もあり時間がかかる作業であった。実習の際2つのチームに分かれて作業をした。奥尻島研修は、先輩2人と私の計3人で行われたため、展示パネルの作成に1人、寄贈品のデータ作成に2人という人数分けとなった。私は、寄贈品のデータ作成を行った。寄贈品のデータ作成は、寄贈された資料のサイズを測り、特徴について書き記す作業である。サイズを測る部分は、縦横奥行、文字の大きさ、淵の幅など多種多様にわたった。データ作成は、「寄贈品ノート」という方眼ノートに手書きで図と共に書き記す作業で、この日は『ワンマン出入口』と書かれたブリキの看板と升2個、窓鋸について書いた。看板は文字の図解が難しかった。ワンマンバスという文字は、文字の絶妙な角度によって読めるようになっているペンキ文字のようで、鉛筆で文字が読めるように図として書くのは至難の業であった。少し点の角度を変えるだけで、『ワソマソ出入口』と見えてしまい苦労した。この苦労と同時に、看板職人の方の一筆書きによる文字の技術の高さを感じた。升は、2つあり、共に文字が焼き印されていたが、損傷が激しく、ガムテープでの仮補修がなされていたため、長年使いこんできたようであった。年季の入った2つの升は、焼き印が同じに見えたため同じ店のものと思われるが、ガムテープで覆われていたり、擦れてかすんでいたりしたため、同じ店の物であると寄贈品のみでは断定できなかった。窓鋸は、とても大きく、測定に苦労したが、前述の2品よりも形状がはっきりしており、図解がしやすかった。この日は、時間が少なかったこともあり、図を描くのが中心になり、詳しい説明を書くには至らなかった。そのため、1日目の稲穂ふれあいセンター歴史民俗資料展示室での作業はここで終わった。寄贈品は他にもあり、図を作成したものの説明が不十分な品も多かったため、これらのデータ作成は研修3日目に持ち越しとなった。

3日目には、1日目に書ききれなかった説明文を追加し、ほかの寄贈品である、平ザル2個、深ザル3個、飾りのデータ作成を行った。今回は似た形の寄贈品が描き分けに苦労した。平ザルは2つ共よく似ていたため、記録の際に違いが分かるように描かなくてはいけなかった。違いが分かるように記録するのは、似たものが2つあるということを知りやすくする為や、不測の事態が発生した時にも、どちらの寄贈品なのか区別できるようにするためである。実際に寄贈品を細かく観察し、測ってみると一見同じサイズに見えても直径に差があったり、よく見てみると前所有者の使用した跡が色濃く残っていたりしていた。他にもザルの編み方が異なっており、淵の編み方の差がもっともわかりやすかった。深ザルも、平ザルと同じく編み方に差があったが、平ザルに比べると使用した跡は少なかったため未使用ではないかと議論した。飾りは、正月飾りのように派手でお祭りのような飾りであった。形は、木のような棒に紐で紙製の鏡餅やおかめ、金一封とかいた紙箱などがくくられていた。飾りのため、紐飾りの一つずつ測定し、図解したがあまりに細かく書きすぎてしまい、最後の方は時間が足らず、稲垣さんからは、わかるように記録してくれば問題ない、と言われ、寄贈品のデータ作成作業は幕を閉じた。この実習から、学芸員をとしてやることはたくさんある中で、このように時間がかかり、一人では難しい測定の作業などをこなしていくのはとても難しいと感じた。また、今回私が行ったのが図に書いてデータ作成をおこなう作業であったこともあり、画力の必要性を感じた。特にザルを描いたときは、自分の絵心の無さに絶句した。しかし、一緒に作業をした栗原先輩からは、

わかれば資料のデータとして十分だよ、と優しく励ましてもらったことを覚えている。一方で、わかりやすい絵で表現することは、読み直した時に必要であると私は感じたため、画力の向上は今後の課題とする。2日に分けておこなわれた稲穂ふれあいセンター歴史民俗資料展示室での研修は、学芸員のビジョンがはっきりとした時間であった。学芸員といえば、資料を管理し、研究して、来館者に説明をおこなうというのが大まかに分けた仕事内容だと考えるが、その細かな工程を実際に体験できた貴重な時間であったと考えている。

3. 奥尻島津波館

奥尻島津波館には、研修2日目に研修生3人で訪れた場所である。ここには、1993年7月12日北海道南西沖地震が発生し、その後島を襲った津波の記憶を伝える施設である。館は、円状の建物で、展示室は1階と地下1階に分かれている。1階では壁に沿って当時の写真が数多く展示されており、中央にあるホールには「198のひかり」という鎮魂と記憶の空間があり、時間が合うと198個ある小窓から日が差すという神秘的な空間となっている。地下1階には、北海道南西沖地震が発生したメカニズムから災害、復興までを描いたドキュメントを映像で見られる映像ホールや、島の遺跡の遺物についての展示もある。他にも、入口正面にある展示ケースには、復興支援で贈られた文具などが飾られている。屋外には、時空翔という鎮魂と自然の恐ろしさを後世に伝えることを目的としたモニュメントと徳洋記念碑という津波で流されなかった記念碑が立っている。

津波館では、希望すると災害を実際に経験した島人の語り部の方から話を聞くことができる。私たちが話を聞くことができた。私たちが話を聞いたのは、災害当時青苗に子供2人の4人家族で暮らしていたという女性の話であった。最初に北海道南西沖地震についての説明を受けた。この地震は、1993年7月12日22時17分に発生した地震で、最大震度は奥尻島と推測されている。島には地震計が無かったことから長年震度5とされていた。しかし、近年では、この地震震度が全地区で見直され、島は震度6になったという。この地震の特徴は、地震の発生からわずか3分で島に津波が到達したことにある。被害は深刻で、浅瀬の広がった島の珍しい地形が影響して、島全体が津波の被害を受けることとなった。彼女の住んでいた青苗は津波の被害もひどく、夜に津波が発生したため津波はみえず、家族を起こして、皆裸足で高台まで逃げたという。車で逃げた人もいたが、高台までの道路で渋滞し、多くの人々が流された。一方で、島での津波災害は流されただけにとどまらず、土砂崩れで観光客が大勢泊まっていたホテルが倒壊したり、土砂で道が寸断されたり、座礁した船3隻によって火災が発生し、町は焼け野原になったりした。火災は、放水を行って食い止めようとしたが放水車が足りなかったこともあり、焼け石に水となり、最後は焼けていない家を崩すことで食い止めたという。翌日は快晴で無残な焼け野原が広がっていたそうである。その後、ボランティアの方やたくさんの方の支援があったおかげで今があると感謝を語っていた。その後、島には多くの避難路ができ津波に備えているという。

実際に写真を見ながら体験者の話を聞き、当時の壮絶な状況に心を痛めた。体験者の話というのは、災害の概要を話しているときでも、どこか重みを感じ、話している最中に何



写真3 時空翔



写真4 徳洋記念碑

度も繰り返し伝えられた「災害の時は靴を履いて走って逃げてください。車は使わないでください」といわれた。災害大国に日本で、災害時の行動として、走って逃げるのは何度も見聞きしてきたが、ここでの話ほど身に染みたものはなかった。現在津波館が建っている場所にも多くの家が建っていたことを知り、避難路がたくさんできたなどの話から津波は島の生活に大きな影響を与えたことを実感した。災害の教訓と人の温かい心を感じることでできた施設であった。

津波館を出た後、徳洋記念碑と時空翔にも訪れた。時空翔は丘の上に石畳の広場と、時期と時間が合えば石のくぼみに夕日が落ちるといふ大きな石を見て、話を聞いた後すぐだったこともあり、自然の雄大さと恐ろしさを感じた。献花台もあり、次訪れるときは花を持参しようと思った。徳洋記念碑は、津波でも流せないことが感じるほど立派であった。

4. ワークショップ

奥尻島研修の目玉ともいえるワークショップは、4日目に行われた。今回のワークショップは、赤石地区で行われ、事前に稲垣さんが回覧板にて勧誘の紙を回してくれていたが、実際に赴くことも必要であると考えたため、午前のうちから声掛けに赤石地区を散策した。

午前の散策では、ごみ箱のペンキ塗りをやっていた方から、潮風でペンキがはがれやすいという話を聞いたり、佐藤義則記念館を教えていただいたりした。窓からお話を伺わせてもらった方からは、家の裏で昔は田んぼをやっていたことを教えてもらったり、最近漁ではイカが取れず代わりにホッケが取れるようになっていたりしているということを教えていただいた。本やインターネットで調べて出てこない貴重な情報を知る貴重な時間であった。

昼ご飯を手短に済ませて、午後からワークショップが開催された。このワークショップには、住民の方2名に来ていただいて、たくさんの情報を教えてもらい、赤石地区について詳しくなることができた。以下に概要を記す。

赤石地区には、赤石漁港と呼ばれる漁港があり、お話によると島内で一番早く漁業が開始される漁港で、春にはホッケ、夏にはウニが取れるという。2022年度のウニ漁は、8月13日に終了したそうだ。以前は、春のホッケと夏のウニの漁期の間くらいにイカが取れていたようだが、ここ2、3年はイカが不漁で、代わりにホッケが取れるようになったという。昔は、「えんどこ」というものが沖で発生して、魚が大量にとれたことや、余った魚は魚かすにして売っていたという話も聞く。また、子供のころ遊んでいた場所は海岸沿いばかりで、山には基本的に立ち入らない話も聞いた。奥尻島の住宅街は海岸沿いばかりだが、家の裏手すぐに山があるため、山にも馴染み深いのだろうと考えていたが、山にはあまり行かないということを知り驚いた。

また、赤石地区ではお祭りで山車が出ていたり、龍神講を行っていたり、赤石漁港で花

火を上げていたり、楽しげな雰囲気を感じた。近年は新型コロナウイルスの影響を受けるなどで、開催出来ていないようなので、いつか見てみたいと思った。山には、昔は馬鈴薯や米を作っていた大規模な畑や田んぼがあったようで、その田んぼでとれたお米は美味しかったという。今現在赤石地区のお米を食べられないことはとても残念だが、奥尻島は水が美味しく、日本酒も名産になっていることから、当時のお米の美味しさは想像に難くない。

興味深いお話は他にもあり、ネズミ送りという駆除したネズミの供養の祭り、昔は薪を作るためにグラウンドいっぱいに切った木を置いていた話や、赤石地区の水道は自分たちで管理しているなどである。ワークショップで聞いた話はどれも新鮮で、その地域を生きる人の知恵や工夫がふんだんに見られ、もっとたくさんのお話を聞きたいと思った。しかし、聞くことに関して、私はあまりにも奥尻島や赤石地区について知らないことが多かったため、うまく質問ができなかった。将来ワークショップを企画する場合は、この反省を生かして、町民の人とたくさんお話ができるようになることが今後の課題である。

5. そのほかの活動



写真5 宮津弁天宮 囲いの腐食



写真6 宮津弁天宮参道

この研修期間に多くの場所を訪れた。奥尻空港であったり、青苗砂丘遺跡であったり、奥尻高校であったり、島内の多種多様な場所を訪れたが、一番記憶に残っているのは、宮津弁天宮である。宮津弁天宮は奥尻島の北東に位置する神社で、宮津にある。大漁祈願を祈って建てられたようだが、その立地はとても険しいところにある。漁港の隣にある切り立った小島のような岬の頂点に建てられており、車で宮津弁天宮まで行く人は、一度急な階段を下りて、岬にある急な階段を上がっていかなければならない。どうやら祭りのときは山車を担いで、駆け下り、また駆け上がったということだが、歩いて下るのも至難の業である階段を走るなど、私には到底考えられなかった。また、苦勞して宮津弁天宮の建物に到着すると鮮やかな赤く塗られたお宮が出迎えてくれる。中にはお祭りの道具やなぜかうミガメの甲羅などがあり驚いた。建物自体は劣化が激しく、柱や宮を囲んでいる木製の部分などは朽ち始めていた。建て替えも難しい場所だと考えられるため、補修工事などができるようになることを祈るばかりである。

奥尻島には北海道沖地震以降、早く高台に避難できるようにと数多くの避難路が設置されている。避難路のある所には、看板で「避難路」と出ている。雨天でも安全に避難できるようにドーム状の避難路があったり、速やかな避難を簡単に、安全におこなえるように工夫が凝らされている。一方で、避難路に簡単には入っても、高台までの階段は、大学生の私でも登るのを躊躇してしまうほど急であったり、階段までの道は草刈りがあまりされず全ての避難路に看板が出ているわけではないため、



写真7 看板のある避難路



写真8 ドーム式避難路



写真9 急な階段

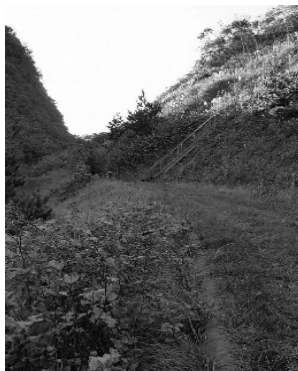


写真10 避難路までの道

避難路があるのか一見わからなかったりする。ワークショップで、避難路についてお話を聞いたが、あまり知らないという雰囲気であった。このことから、島を上げて避難路を多数設置し、津波に備えているが、階段が急な避難路や、場所がわかりにくい避難路も存在し、住民の中でも避難路は浸透していないことが考えられる。今回は、時間がなく数か所しか避難路をみることができなかった。次回は避難路がどこにあるかを調べて、どのような状態になっているのか確認し、近所に住む方に避難路があることを知っているか聞き取り調査を実施したい。

6. おわりに

今回の研修は、フィールドワークならではの貴重な体験が多く、私にとって大きな学びになったといえる。今回、奥尻島のことを全く知らないまま研修に参加した私にとって、すべてが未知の体験で、大きな成長が感じられる5日間であった。一方で、自分の未熟さにも気が付く場面が多かった。

また、奥尻島では島民の優しさに触れる場面が多かった。細い海岸沿いの道を車で通るときは、お互いに道を譲り合うことが多々あり、譲ってもらったらお礼をしてくれたり、赤石地区の人と話したときは親身になってこちらの質問に対して答えようとしてくださったり、些細なことではあるが、人の優しさに触れる瞬間であった。ワークショップの際に美しい海についての話をたくさん聞いたが、優しい島民たちも奥尻島の魅力の1つといえるだろう。

最後になりましたが、研修を受け入れていただいた奥尻島教育委員会の皆様、宿としてお借りした町民センターの管理人さん、おいしい食事を提供くださった各店舗の皆様、滞在中お世話になった稲垣さん、学生を引率下さった手塚先生、ご助言くださった小樽市総合博物館学芸員の蟬塚咲衣さんに深く感謝を申し上げます。

奥尻島研修での学びと考えたことについて

人文学部日本文化学科 3年 栗原一華

1. はじめに

筆者は、2022年の8月11日から15日に行われた、奥尻島研修に参加した。2021年に続き2回目の参加であった。昨年度とは、異なる研修内容、活動拠点での活動であったため、奥尻に関わる、新たなことを知る貴重な機会となった。また、筆者自身が今後どう振る舞うべきなのかを理解する、非常に重要な機会となった。

本稿では、研修で学んだこと、経験したことについて述べる。

2. 奥尻島津波館での学びと周囲の探索について

12日に、奥尻島津波館を訪れた。館内の展示物の説明をお願いし、様々なことをお話していただいた。解説を担当してくださった方は、実際に震災を経験したという事もあり、当時の状況ことだけではなく、自分自身が経験した事も説明していただいた。昨年につき、2回目の来館ではあったが、改めてその悲惨さを知ることになった。館内の中央に震災の順序を表すジオラマが展示されていた。その後、津波館の周囲の探索を行った。解説をしてもらった場所を実際に見ることで、より理解を深めることができた。

後日、別の場所でフィールドワークを行った際に、各地で慰霊碑をはじめとした、震災に関する石碑が置かれているのを発見した。石碑には、犠牲となった方々の名前が書いている事もあり、どの地域でどれくらいの方が、行方不明・死亡したのかということが一目瞭然であった。館内で聞いた、犠牲者の数字ではなく、名前で表記されることで、抱く感情が異なるように感じた。

3. 稲穂ふれあいセンターでの作業

11日と13日に稲穂ふれあい研修センター歴史民俗資料展示室で、奥尻町教育委員会事務局の学芸員である稲垣森太さんのご指導の下、作業を行った。作業工程そのものは、2021年に行ったこととほぼ同様であったが、扱う資料が異なっていたため、新たな発見や学びもあった。

筆者が行った作業は、資料がどのような大きさなのか、どのような素材でできているのか、類似している資料との違いは何か、といったデータをノートにまとめるというものであった。対象の資料の中には、種類が同じで、同等のサイズのものも存在していた。それらにどのような違いがあるのかということを観察し、比較を行った。

このような僅かな違いを見極め、他の人にもその違いを理解できるようにまとめるというのは、非常に重要であり、困難なことであることを実感した。

4. 神事と神社

島の南端にある青苗言代主神社で行われた、神事に参加させていただいた。見学をするのではなく、実際に神事の内容を行うことで、地域住民の方々は、日ごろ神社という場所に対して、どのようなことを行い、どのように思っているのかを知ることができた。

その後に、敷地内にある、社務所内で神社に関する話を聞いた。クラウドファンディングを行ったこと、御朱印の計画を立てていること、現在事務所として利用している仮設住宅を取り壊し、新たな事務所を作る計画を立てていることなど、様々なお話を聞かせていただいた。宮津弁天宮をはじめとした、奥尻島に数多くある神社の多くは、老朽化が進んでおり、木材が折れていることも珍しくはない。青苗言代主神社が、社務所として使用している仮設住宅は、震災にかかわる非常に貴重なものではある。だが老朽化が進み、天井も崩落し安全とは言えない状態であった。

昨年度、2022年では、お祭りを行い、お神輿を担ぎたいとかがっていたが、今年も行うことができなかったという。昨年度話題に上がっていた、財政難に関しては、先述したように、クラウドファンディングを行うことで、少しずつではあるが、改善されているようであった。

奥尻島内に、若者が少ない。そのため、祭りで神輿を担げる人もじゅうぶんではないという状態である。彼らの意思を継ぐ、次世代がいないのであれば、歴史ある神社や祭りは、廃れてしまう可能性が高いのが現状である。



写真1 震災当時の太陽の角度を表現した
モニュメント



写真2 社務所として使用さ
れていた仮設住宅

5. ワークショップの事前準備について

明石に関する様々なことを知るために、ワークショップを開催した。開催日である、14

日の午前中に、赤石地区の民家を歩き回り、明石で生活をしている人々に声を掛け、ワークショップの宣伝を行った。ワークショップを開催するという旨を、稲垣さんがすでに回覧板で宣伝をしてくださっていたため、多くの方が、ワークショップを行うことを知ってくださっていた。宣伝をした際に、わたしたちの質問に回答してくださった方や、お話をしてくださった方もいたため、様々な情報を得ることができた。また、事前準備を通じて、新たな発見や疑問を得た。

また、上記の準備を通じて、筆者が今後身に付けていくべきことも明らかになった。それは、コミュニケーション能力と積極性である。筆者は、自分から行動することが得意ではない。そのため、ワークショップの事前準備の際も、最初の声掛けを後輩に任せてしまったことがあり、それを非常に後悔している。話し始めれば、そのようなためらいもなく質問をすることができたため、まったくできないというわけではないと考える。他にも、事前にお用意してくださった、お話を聞くべき方のリストをもとに、自宅に訪問をした際もインターホンを押すことに対し、非常に躊躇してしまった。今後、社会人として働くのであれば、コミュニケーション能力と積極性は必要不可欠である。そのため、これらを改善していく必要がある。

6. ワークショップ

ワークショップでは、二人の方からお話を聞いた。話の内容は、震災、戦争、漁、自然、昔の生活、現代の生活など様々であった。

それらの中でも、日常生活に関わる話が印象的であった。日常生活にかかわる話というのは、当たり前だと考え、わざわざ記録に残す人は少ない。そのため、そのような情報を入手するのは、実際に経験したことがある人に聞く以外にはほとんど手段がない。彼らの話は、筆者が、経験したことも、聞いたこともないようなものも多く、聞いていて非常に楽しく、多くのことを知ることができた。

そのほかにも、筆者たちが疑問に思った事に対しての説明をして下さった。また、明石地区のことだけでなく、他地区との違いも話をして下さったため、ワークショップの対象地域であった、赤石地区以外の話を聞くことができた。

彼らから聞いた話をもとに、記憶地図というものを作成した。写真3のように、地図に付箋を貼ったものである。付箋は、彼らの話をテーマごとに分類し、書きまとめたものを、対象地域に張り付けた。しかし、彼らの話すスピードに対して、聞き手である筆者たちがまとめきれないほどの情報や、地図の範囲外に関する話というものも多く存在した。また、想像以上に、同じような場所に付箋が密集してしまった。付箋が張られている箇所は、人が家を構え、生活をしている区域であったため、密集してしまうのは当然なことではある。だが、今回は付箋を貼ることができなかった、山岳部に関しても、話を聞きたかったと感じた。筆者は来年度の奥尻島研修に参加することができないが、以降も赤石地区でワークショップなどを行うのであれば、今回聞くことができなかった内容、場所について、聞き、それらをまとめてほしいと思った。

その後、彼らから聞いた内容をもとに、フィールドワークを行った。話を聞いただけで



写真3 記憶地図

は、わからないことも多くあったため、有意義な時間となった。

7. ワークショップに関する問題点

ワークショップに関する、反省点や今後改善していくべき問題点があった。それは、ワークショップに多くの人を集めることができなかったことである。これらについて、複数の原因が考えられる。

まず、私たちが現地の方々によって初対面の見知らぬ人であることである。知らない人間に対して、警戒するのは当然であり、自分の貴重な時間を提供しようと考えの方は、そう多くはないと考えられる。

先輩方は、何度も自分達で行動をし、交流をするなかで、現在の人脈を築いていったという。より深く、さまざまな視点での情報を得るためには、現地の人々との交流が不可欠である。また、コロナウイルスの感染リスクがあるため、関わることを躊躇う方はまだまだ多くいると考えられる。2つ目の原因として、開催日の問題点があったと考えられる。ワークショップ開催日は盆のシーズンであった。それに加え、開催日の前日に、ウニ漁が終わってしまったことから、その場ではお話を伺うことが可能であっても、ウニ漁の直接的なお話をうかがう機会を逃してしまったという問題点が生じてしまったと考えられる。今後、同様のワークショップを行うのであれば、その場に足を運んでもらうための工夫を考えていく必要がある。

8. フィールドワーク

12日と、14日にフィールドワークを行った。前者は、畑や水田をはじめとした、青苗地区まわり、後者は、ワークショップで聞いた話を元に、それらに関する話を聞くために赤石地区をまわった。青苗地区は、畑や水田が多く、農産物を多く作成している地区に相当している。奥尻の水が食品づくりに適していることを実感した。島内では葡萄を育てており、奥尻ワイナリーという奥尻の素材で作ったワインを販売しているワイナリーがあった。奥尻ワイナリーで購入したワインは、じつに飲みやすく、筆者には好みの味であった。奥尻島は、山や海、川といった自然が多く存在する地域である。そのため、周囲には災害に関する看板や、避難路も多く存在していた。これらは、震災の影響も強いと考えられる。また、各地に震災に関する慰霊碑などが設置されていた。写真4の慰霊碑の左右の石碑には、犠牲となった方の名前が記載されている。石碑から、多くの犠牲者が出たことが読み取れた。



写真4 初松前地区の慰霊碑



写真5 青苗の水田



写真6 青苗の農業に関する看板



写真7 赤石の山地災害地区の看板



写真8 赤石の避難路

8. 奥尻島の変化

筆者は、2021年の研修に参加していたため、2022年からの変化を実際に目にすることがあった。昨年、奥尻について際に食事をした、フェリーターミナル付近にあった飲食店が閉店していた。フェリーターミナルから最も近い飲食店であったため、観光客からの需要は高かったはずである。稲垣さんによると、フェリーターミナル付近の飲食店のほかに、もう一つ閉店した店があるとのことだった。だが、ここ数年のコロナウイルスの影響で、そのような観光客は減少している。実際の理由は不明ではあるが、1年間の間に筆者でもわかる変化が起きているとは想像もしていなかった。

9. 研修での生活

研修期間中は、元々高校として使用されていた町民センターという建物で生活を行った。今年は、夕食を自炊したため、普段全く料理をしない筆者は、研修の中で最も難易度が高かったように感じた。

夕食の際は、これまでの研修のことや、研修メンバーのこと、稲垣さんの経験など様々なことを知ることができた。また、昨年度はコロナウイルスの感染対策のため、研修以外の時間は個人の部屋で過ごさざるをえなかったため、今回は非常に楽しい時間を過ごすことができた。

館内は、虫が多く、夜に人生ゲームを行っている際に、大きな蜘蛛が窓から侵入してくるハプニングが起こったり、一時間以上もの時間をかけて虫を掃除したり、予想外の出来事などもあったが、それらも貴重で楽しい体験になったと考えられる。

筆者は、研修メンバーの中で学年が上であることと、昨年度の研修に参加した経験があることから、今研修でのリーダーとなった。しかし、非常に頼りようがない人間であるため、後輩たちに多くの迷惑をかけてしまったと反省している。一連の出来事から、今後社会人になる上で、自身の行動に対する、改善するべき点がおぼろげながら理解できたと考えている。

10. おわりに

今回の研修で、様々なことを知り学び、筆者自身が改善していくべきことがよく見えてくる貴重な時間となった。わたしたち研修メンバーが、このように充実した研修を行えたのは、ご協力して下さった方々のおかげである。

このような機会を下さった稲垣さん、現在の社会状況であるのにも関わらず受け入れて下さった教育委員会の方々、ワークショップの際に、見ず知らずの私たちの声に、応えて下さった赤石地区の皆様と引率の手塚先生に深く感謝申し上げます。

奥尻島におけるコロナ禍前後の例祭

小樽市総合博物館学芸員 蟬塚 咲衣

1. はじめに

1993年7月12日に発生した北海道南西沖地震から、30年を迎えようとしている。学芸員課程では、2018年から5年に亘り、震災前後の奥尻島の例祭の変化に着目した調査研究を行ってきた。

奥尻島は、10の字と31の行政区に分かれている(表1)。本稿では、同名の行政区を合わせたものを地区と呼び、各神社と対応させることとする。16の地区別の人口データを可視化したものが図1であり、青苗地区と奥尻地区に人口が集中していることがわかる。かつて奥尻島では、14地区9神社で神輿渡御や山車(住民らは「ヤマ」と呼ぶ)を用いた巡行が行われていたとされるが、現在行われているのは青苗地区と奥尻地区の2地区のみである。その他の地区は、人口減少や少子高齢化による担い手不足が原因で廃止されている。また、鷗崎神社を除く神社で結成されている「全島氏子総代連合」では、島外から招く宮司の滞在費などを支払うため、各神社で分担して維持費を納めている。しかし、その徴収が人口の減少などを理由に年々難しくなっている現状がある。

本稿では、毎年調査を実施している青苗言代主神社例祭と奥尻地区例祭について、5年間の動きをまとめ、これからの伝承について考察する。

2. 青苗言代主神社例祭の5年間

青苗言代主神社例祭は、毎年8月12～14日に青苗地区の中央に位置する青苗言代主神社で行われている。奥尻島の中で唯一、猿田彦(猿田彦行列とも呼ばれる)、神輿、山車(恵比須山)の3つが連なる巡行が行われており、それぞれ「青苗言代主神社氏子総代(猿田彦)」、「青苗みこし保存会(神輿)」、「恵比須山協賛会(山車)」の各組織が管理している。本例祭の5年間をまとめたものが表2である。

表1 字・行政区等対応表¹⁾

字	行政区	地区	神社
稲穂	野名前	野名前地区	鷗崎神社
	稲穂	稲穂地区	
宮津	勤太浜	勤太浜地区	稲荷神社
	宮津	宮津地区	中津島神社
球浦	東風泊	東風泊地区	海洋神社
	球浦1区	球浦地区	奥津神社
球浦2区			
奥尻	仏沢	仏沢地区	
	奥尻1区	奥尻地区	
	奥尻2区		
	奥尻3区		
	奥尻4区		
	奥尻5区		
谷地	谷地地区		
赤石	赤石1区	赤石地区	
	赤石2区		
松江	松江1区	松江地区	少彦名神社
	松江2区		
富里	富里	富里地区	四ツ山稲荷神社
青苗	青苗1区	青苗地区	青苗言代主神社 室津島神社
	青苗2区		
	青苗3区		
	青苗4区		
	青苗5区		
	青苗6区		
	青苗7区		
米岡	青苗1区	米岡地区	齊明神社
	青苗7区		
	青苗8区		
湯浜	米岡	米岡地区	齊明神社
	湯浜	神威脇地区	少名彦神社
	自衛隊 営内	—	—

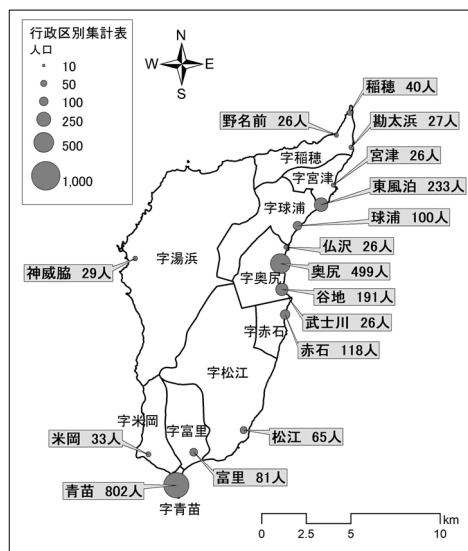


図1 奥尻町各地区の人口²⁾

表 2 青苗言代主神社例祭の 5 年間

北海道南西沖地震から25年

コロナ禍

	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
神 事	○	○	○	○	○
猿田彦	○	×	×	×	×
神 輿	○	×	×	×	×
山 車	○	△	×	×	×
特 記 事 項		・氏子総代の世代交代による巡行中止 ・恵比須山協賛会による催し(ねまり)			・神社がクラウドファンディングを実施

神事に関しては毎年行われているが、その他は年によって変動している。2018年は、巡行を構成する要素(猿田彦、神輿、山車)全てが実施され青苗地区を練り歩いた。しかし、2019年は、氏子総代(例祭時に巡行を行うか否かの決定権を持つ神社組織)の世代交代が行われ、その結果、氏子総代の人数不足によって巡行が中止された。それ以前の巡行が中止になる理由は、氏子総代の身内の不幸や、悪天候、不景気、不漁などであった。「猿田彦が出ないなら、神輿は出せない」³⁾という証言があるように、猿田彦と神輿はセットであり、どちらか片方のみが出るという認識はない。一方で、山車に関しては「山車は神社の許可なしで出せる。夏祭りのために出したりできる」⁴⁾ことから、毎年8月12日に浜風公園で行われる「夏祭り(盆踊り)」では、15年ほど前から山車を公園まで運んでいる⁵⁾。そのような背景もあり、巡行が中止になった2019年8月13日(本来であれば巡行1日目に当たる日)には、浜風公園で「ねまり」が行われた。「ねまり」とは、「ねまる(座る)」という意味であり、神社で神事は行うが、神輿や山車は地域を練り歩かず、特定の場所に設置し、その周囲で飲み食いや催しを行うことを指す。他地区では、赤石地区の保食神社の例祭が該当する。その日は浜風公園に恵比須山が置かれ、太鼓の囃しが奏でられるなかで、住民やお盆で帰省した島民などが集った。しかし、例年行われている「夏祭り」と2019年の「ねまり」の違いとして、2018年の「夏祭り」では公園の中央に盆踊りのための櫓が建ち、山車は公園の脇に置かれていたが、2019年の「ねまり」では公園中央に山車が置かれていたことから、「ねまり」は山車を中心とした集いであることがわかる。

2019年の巡行中止を受け、「組織がしっかりすれば、来年はできると思う」⁶⁾、「今年は「ねまり」祭りだが、来年は新体制になった神社で神輿も出したい」⁷⁾という声もあったが、2020～2022年はコロナ禍のため巡行および「ねまり」は行われず、神社での神事の実施であった。そのなかで大きな動きを見せたのが、青苗言代主神社氏子総代によるクラウドファンディングである。クラウドファンディングとは、特定の目標実現のためにインターネットを通して資金を募るしくみで、青苗言代主神社では2度行われた。クラウドファンディングを実施した意図については、「伊勢神宮の月讀宮が奥尻にあるので、お伊勢参りを奥尻から初めて欲しい」⁸⁾とうかがった。1度目は、2022年2月頃から4月20日までの期間で、クラウドファンディングサイト「READYFOR」においてAll or Nothing(目標達成時のみ支援金を受け取れる)方式で実施された⁹⁾。支援金の用途は、①社務所の解体および建設、②神殿の扉の補修、③神事儀式部屋の窓枠のサッシと木窓の補修であ

ったが、目標金額 20,000,000 円、支援金額 251,000 円（支援者 27 人）で不成立となった。2 度目は、2022 年 5 月 12 日から 7 月 30 日までの期間で、クラウドファンディングサイト「CAMPFIRE」において、All In（目標未達成でも支援金を受け取れる）方式で実施された¹⁰⁾。支援金の使途は、①社務所（事務所）の解体と建設、②神社の修繕であり、目標金額 9,800,000 円、支援金額 1,373,000 円（支援者 148 人）で成立した。プロジェクトの進捗状況を伝える「活動報告」は、2023 年 2 月 28 日 15 時時点で 2083 件である。「いっぱい書いた方が宣伝の効果がある」¹¹⁾との思いから、神社の社殿や神輿に関する情報のほか、島の病院や防潮堤についてなど、奥尻島の現状を様々な角度から発信している。また、青苗言代主神社初の御朱印も作成された（写真 1）。デザインは、ゆるキャラクリエイターの琥珀アンダーソン氏によるもので、神社の祭神である恵比須、大海龍命、天照大神と、奥尻島の名産品にちなんだキャラクターが描かれている。「こんなに応援してくれると思っていなかった」¹²⁾、「神社の環境整備をして、伊勢神宮の月讀宮の素晴らしさを日本に伝えていく」¹³⁾といった声があり、地域を盛り上げようとする気運の高まりがうかがえた。

青苗言代主神社例祭の 5 年間を振り返ると、神事、猿田彦、神輿、山車の全てが実施されたのは、2018 年が最後である。2019～2021 年にかけては、氏子総代の世代交代、それによる巡行中止、そのまま突入したコロナ禍、島内神社の維持費問題など、暗い話題が相次いだ。まさに、住民らが対応策を模索した 3 年間であった。しかし、2022 年は、クラウドファンディングを通じた全国からの支援に、青苗言代主神社が大いに励まされ、前向きに伝承に取り組む姿を目の当たりにした。今後について、「神輿などを丸 4 年出せていない。若い人が減り担ぎ手も少なく、どうなるか不安。2 日間ではなく 1 日で全軒回ることも考えている」¹⁴⁾との声もある。しかし、多くの応援の声に勇気づけられながら、2023 年は新調された社務所の前で、神輿や山車が練り歩く姿が見られることを願わざるを得ない。

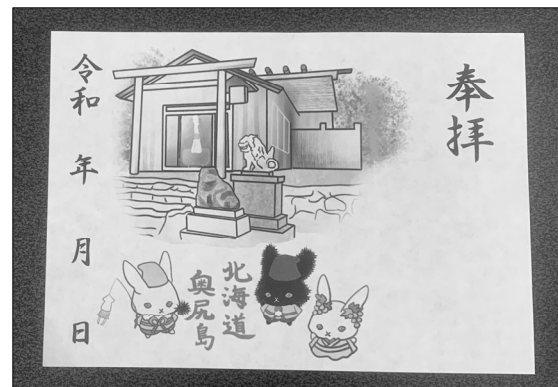


写真 1 青苗言代主神社の御朱印
(2023 年 8 月 13 日 筆者撮影)

3. 澳津神社例祭の 5 年間と四箇散米舞行列の伝承

澳津神社例祭は、毎年 8 月 14～16 日に奥尻地区の澳津神社で行われている。倉庫に神輿が保管されているが、2000 年頃から渡御していない。山車の子宝山（谷地地区）が 2014 年に担い手不足で廃止となり、現在は神威山（奥尻地区）のみで巡行している。猿田彦と神輿は「澳津神社氏子総代」、山車（神威山）は「神威山巡行実行委員会」が管理している。本例祭の 5 年間をまとめたものが表 3 である。

青苗言代主神社例祭と同様に、神事に関しては毎年行われているが、その他は年によって変動している。猿田彦と神輿は、かつて行われていたが、猿田彦は 2005 年頃、神輿は 2000 年頃に実施されなくなった。2018 年と 2019 年は、2014 年以降定着している山車（神

威山) のみの巡行が行われた。しかし、2018年は大雨のため2日目の途中で巡行が中止になり、2019年は住民の不幸と台風による悪天候が予想されたため、日程が1日のみとなり、ルートも短縮された。2020～2022年の巡行は、コロナ禍のため実施されていない。

表3 澳津神社例祭の5年間
北海道南西沖地震から25年 コロナ禍 →

	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
神事	○	○	○	○	○
猿田彦	×	×	×	×	×
四ヶ散米行列	×	△	×	×	×
神輿	×	×	×	×	×
山車	○	○	×	×	×
特記事項		・ 寿都松前神楽保存会が松前神楽を奉奏 ・ 四箇散米舞行列を急遽実施		・ 神社参道の御神燈と御神燈立てを新調	

また、2019年は、澳津神社の先代宮司との縁をきっかけに「寿都松前神楽保存会」が奥尻島を訪れ、澳津神社で松前神楽が奉奏された。また、それを見た奥尻地区住民の熱い要望により、2002年頃に廃止された四箇散米舞行列（住民は「四箇散米」、「四箇散米舞」と呼ぶ）が、約20年ぶりに実施された。この交流について、奥尻側も寿都側も継続を希望しているが、コロナ禍のため2020～2022年の3年間は行われていない。奥尻では、「寿都から、また実施したいという声が挙がっている」¹⁵⁾という話が澳津神社の神事の際にされており、もう一方の寿都では、「2019年は青苗の巡行が急に中止になってしまったが、もし行われていたらそちらも行く予定だった。奥尻とは2022年現在もやりとりがある」¹⁶⁾という証言を得た。恒常的な行事となるか定かではないが、今後の動向に注目していきたい。

2021年には、腐食などの老朽化を理由に御神燈と御神燈立てが新調された¹⁷⁾。また、御神燈の寄贈者の名前が記載された看板も2021年に新たに作られ、参道の脇に立てられていた。看板を作成する資材を提供したのは、青苗地区の製材所だという。

澳津神社例祭の5年間を振り返ると、2018年と2019年は、悪天候や不幸といった要因への対応がされながらも、山車曳きは行われていた。2020年以降は、コロナ禍のため巡行は実施されていないが、2019年に交流のあった「寿都松前神楽保存会」との関わりは続いている。「コロナ撃退ということで、四箇散米をやりたい」¹⁸⁾といった、再開の気運もうかがえた。コロナ禍で巡行が行われていなくても、御神燈や看板が新調されており、神社の環境整備が行われている。密を避ける感染対策の中で、奥尻島の例祭の特徴である、大勢が集まり楽しく盛り上がることはできなくても、着々と前に進んでいる印象を受けた。

4. 奥尻島におけるこれからの伝承

青苗言代主神社例祭と澳津神社例祭について5年間調査を行うなかで、これからの伝承について考えたことを述べる。まず、両例祭に共通しているのは、これまで地域の状況に

合わせた無理のない工夫をしながら、巡行を行ってきたことである。そして、コロナ禍以降の例祭では両神社とも神事の実施で巡行は行っていないが、その期間は神社の環境整備に力を入れていた。山車曳きや神輿渡御を盛大に行えるような状況ではなくても、歩みを止めることなく、できることをやっという意志が感じられる。また、島の外との交流から影響と刺激を受けている点も共通している。青苗言代主神社では、クラウドファンディングによって外から注目を集めたことが、神社組織である氏子総代に大きな勇気を与え、活動の励みになっている。澳津神社では、「寿都松前神楽保存会」の来訪が、20年近く途絶えていた四箇散米舞行列への情熱に再び火を付けている。少子高齢化などによって人手不足になった民俗芸能が、地域と地縁・血縁のない外部者と連携することによって継承される事例に見られるように（松岡 2022）、奥尻島の例祭も、島の中だけでなく他地域との交流を行う中で活路を見出すことができるだろう。

また、筆者が 2022 年 6 月に小樽市内の神社例祭を調査していたところ、2019 年に「寿都松前神楽保存会」の一員として澳津神社に来ていた、松前神楽の舞い手の方と出会った。その際に、研究のためになればと、1989 年 8 月に奥尻島で撮影された映像資料をご提供いただいた。そこには、現在は行われていない奥尻島の獅子舞や、かつて行われていた子どもたちによる四箇散米舞行列の様子が記録されていた。当時の例祭の様子を知ることができる、大変貴重な資料である。提供者によると、小樽市の潮見ヶ岡神社が所有しているものだという。潮見ヶ岡神社の神職が、澳津神社例祭を手伝いに行った際に、撮影されたものと思われる。このように、奥尻島に関する資料が周辺地域から見つかることもあるため、他地域との繋がりに着目した調査を行っていきたい。

青苗言代主神社で行われたクラウドファンディングについては、今後、宮津地区の中津島神社でも行われる可能性があるという。実施目的は、神社社殿の修繕である。青苗言代主神社と中津島神社の相違点は、青苗言代主神社は文化財指定を受けていない一方で、中津島神社は宮津弁天宮とも呼ばれ、奥尻町指定有形文化財となっている。また、図 1 で示したように、宮津地区と青苗地区では人口も大きく異なることから、青苗言代主神社とは違った動きとなることが考えられる。今後の動向に注目したい。

5. おわりに

最後に、筆者が担当することになった、2023 年 4 月 29 日から 8 月 31 日まで開催される、小樽市総合博物館運河館トピック展について述べる。本展示が、筆者が学芸員になって初めて担当する展示となる。展示タイトルは「小樽の四ヶ散米行列—まちゆく歩みに想いをのせて」で、現在、小樽市の潮見ヶ岡神社で伝承されている四ヶ散米行列（潮見ヶ岡神社の表記）について紹介する。筆者がこの民俗芸能を知ったのは、奥尻島の澳津神社での調査がきっかけである。澳津神社以外の伝承地を調べたところ、小樽でも伝承されていることが明らかになり、その伝承過程を追うなかで、奥尻と小樽の繋がりが判明した（蟬塚 2022）。そこで、初めて小樽で聞き取り調査を行った直後、小樽市で学芸員の募集があり現在に至っている。筆者と小樽を結びつけてくれたのは、奥尻の四箇散米舞行列と言っ

ても過言ではない。また、本展示の関連イベントも計画中だが、神社関係者や文化財行政の職員と関わる中で、地域の民俗芸能のこれからについて考えさせられることが多い。祭礼や民俗芸能について伝承継続の困難性が叫ばれるこの時代に、博物館の学芸員としてどのようなことができるのか、今後も展示やイベントなどの実践を通して模索していきたい。

※証言者に関する情報は、仮名／性別／年齢／取材市町村名／職業／例祭での役割不明箇所については、一で記す。

注

- 1) 字は e-Stat の「奥尻郡奥尻町（2018年5月14日公開）」、行政区は奥尻町役場提供の「行政区別集計表（2021年10月29日作成）」、地区は「ふるさと奥尻通信第125号（2019年）」を参考に作成した。
- 2) 奥尻町役場提供の「行政区別集計表（2021年10月29日作成）」をもとに作成した。
- 3) A氏／男性／一／奥尻町／小売業／青苗みこし保存会
- 4) B氏／男性／60代／奥尻町／一／青苗みこし保存会・氏子総代
- 5) C氏／男性／60代／奥尻町／元特別職公務員／氏子総代・恵比須山協賛会
- 6) B氏／男性／60代／奥尻町／一／青苗みこし保存会・氏子総代
- 7) A氏／男性／一／奥尻町／小売業／青苗みこし保存会
- 8) D氏／男性／70代／奥尻町／小売業／氏子総代・青苗みこし保存会
- 9) 「北海道奥尻島の伊勢神宮より頂いた内宮別宮月讀宮を再建」<https://readyfor.jp/projects/85163>（2023年2月28日閲覧）
- 10) 「助けてください。神社存続に希望を載せ、奥尻島の伊勢神宮よりの内宮別宮月讀宮を復活」<https://camp-fire.jp/projects/view/585596>（2023年2月28日閲覧）
- 11) D氏／男性／70代／奥尻町／小売業／氏子総代・青苗みこし保存会
- 12) B氏／男性／60代／奥尻町／一／青苗みこし保存会・氏子総代
- 13) D氏／男性／70代／奥尻町／小売業／氏子総代・青苗みこし保存会
- 14) B氏／男性／60代／奥尻町／一／青苗みこし保存会・氏子総代
- 15) E氏／女性／60代／奥尻町／神職／神社関係者
- 16) F氏／男性／一／小樽市／地方公務員／松前神楽関係者
- 17) G氏／男性／70代／奥尻町／元サービス業／氏子総代
- 18) G氏／男性／70代／奥尻町／元サービス業／氏子総代

参考文献

- ・蟬塚咲衣（2022）「博物館展示における民俗芸能—北海道の四ヶ散米行列を事例に—」『年報新人文』19：166-205.
- ・松岡薫（2022）「持続可能な民俗芸能の継承に向けて—担い手の視点から—」『日本民俗学』312：192-206.

斜里町研修での学び

経済学部地域経済学科 2年 伊藤 赴

1. はじめに

私は、8月23日から斜里町で行われた5泊6日の研修に参加した。この研修は2021年に札幌で行われた全国博物館大会にボランティアとして参加した北海学園大学生の活動を見た東京農業大学の宇仁義和さんのご提案から実現したものである。

6日間の研修において、1日目は斜里町への移動と研修の打ち合わせ、2日目は知床博物館の見学と写真の整理、3日目も2日目と同様に写真の整理を行い、4日目は写真の整理と川端家座談会の見学、5日目は朱円やウトロを見学し、6日目は網走市内の博物館を見学した。資料整理などの学芸員の仕事を体験した他、博物館や葦の芸術原野祭の見学などもでき、とても貴重な体験となった。本稿では今回の研修で学んだことや感じたことについて述べる。

2. 斜里町知床博物館の見学

24日の午前中は斜里町知床博物館を見学した。

知床博物館の敷地内には博物館以外にも様々な施設や展示があった。博物館の隣には小さな建物があるのだが、これは斜里町民俗歴史資料館という施設で、現在は除湿器を備えた資料の保存室として使用されている。敷地内で展示されているストーンサークルは斜里町の朱円で見つかったものを移転、復元したもので、実際に朱円で見つかった石を使っているという。記念館からやや離れた場所には驚などを飼育する小屋も設置されている。かつては鹿も飼育されていたが、野生の鹿が増え、飼育する必要も無くなったため撤去されたという。

知床博物館館内には売店も設置されており、ここではかつて開催された企画展の図録も販売されていた。図録以外にも知床博物館が独自で出版している書籍なども販売されており、とても充実していた。案内をしてくださった宇仁さんのお話によると、企画展の図録は学芸員としての実績を証明するものでもあるため重要だという。

博物館の1階では朱円周堤墓やアイヌ文化、産業や生活の歴史に関する展示がされている。私が特に興味を持ったのは鉄道の歴史に関する展示である。ここでは比較的早い時期に廃止された国鉄根北線や殖民軌道などに関する興味深い資料が展示されていた。2階では自然に関する展示がされている。ここには野生動物の生息地をイメージした展示があるのだが、この展示の背景画は壁に直接描かれており、描かれている風景も知床に実在するものではなく、架空のものである。宇仁さんの話によると、通常は壁に直接背景画を描くことはないという。

博物館に隣接する姉妹町友好都市交流記念館では、姉妹町などに関する展示がされており、実際に祭りで使用する山車も保管されている。また、博物館の事務所もこの建物内にあり、研修での写真整理などの活動はこちらの建物で行った。



写真1 鉄道に関する展示



写真2 自然に関する展示

3. 資料整理

24日の午後から26日の午前中まで資料整理を行った。資料目録の作成などいくつかの作業があったのだが、作業をしながら斜里町の産業や交通の変遷を学ぶことに加え、私は古文書の解読ができないことから、写真の整理という作業を選択した。

24日午後は「斜里・わが町の戦後50年」という企画展で使用された写真の整理を行った。この企画展で使用され、図録に掲載されているものうち、合計21枚の写真を特定することができた。

25日と26日には「斜里 下町の歴史散歩」「斜里・知床の文化遺産」「斜里町産業発達史」「斜里町史」で掲載されている写真を特定する作業を行った。特定できた枚数は「斜里 下町の歴史散歩」で4枚、「斜里・知床の文化遺産」で1枚、「斜里町産業発達史」では3枚と非常に少なく、「斜里町史」については1枚も特定することができなかった。「斜里町史」ではこうした出典が不明なものが多く、信頼性が高いとは言い難いという。しかし、これは「斜里町史」に限ったことではなく、こうした郷土史には出典が不明なものが多いようだ。

絵葉書や写真から当時の斜里町の様子を知ることができた点は非常に面白かった。しかし、ほとんどの写真を特定することができず、写真の特定という作業は非常に骨の折れる作業だと感じると同時に、出典を明記することの必要性を痛感した。また、郷土史はその地域の歴史について詳しく記されており、信頼性の高いものだと思っていたのだが、中には出典が不明で信頼性の低いものもあることに驚いた。

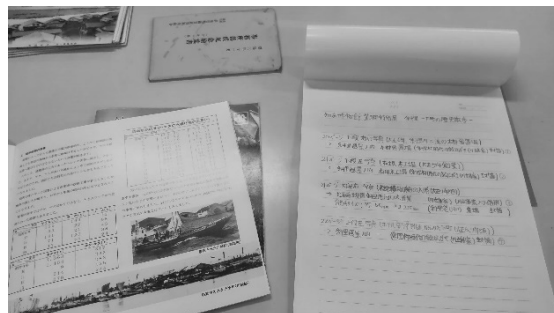


写真3 写真整理の作業風景

4. 川端家座談会

私たち実習生は26日の15時から川端家で行われる座談会を見学させていただいた。川端家とは地主経営などを展開していた斜里町市街地有数の旧家である。このイベントは川端邸の再生と活用を目指して企画されたものであり、かつての斜里町の様子が記録された映像を見ながら、昔の斜里町の様子について参加者に語ってもらうというものである。参加者は川端和子氏をはじめとする斜里町に所縁のある3名である。

ここでは、特に興味深いと感じた当時の遊びについて取り上げたいと思う。当時は手作りスキーやパッチ(メンコ)などの他に「ゲロリン」というもので遊んでいたという。「ゲロリン」とは氷上を滑るための道具のことで、下駄の底に滑るための器具を取り付けたものである。この「ゲロリン」は今回の研修の最終日に訪れた網走市立郷土博物館に展示されていたのだが、キャプションには「下駄スケート(ゲロリ)」と書かれていた。地域によって呼び方に若干の違いがあるのかもしれない。

映像を見ながら、その映像について語ってもらうという方法はおもしろいと思ったのだが、話が終わらないまま次の映像に移ってしまうことや、映像とは無関係な話に逸れていってしまうこともあり、この方法の難しさも感じた。



写真4 下駄スケート(ゲロリ)

5. 葦の芸術原野祭

26日の夕方と27日の午前中に「葦の芸術原野祭」というイベントを見学した。「葦の芸術原野祭」とは2022年8月6日から27日まで開催されていたイベントで、東京藝術大学の卒業者などが中心となって運営されている。会場は川端家の向かいにある斜里町旧役場庁舎である。

「葦の芸術原野祭」の目玉ともいえるのが参加型プロジェクトである。私が特に興味を持った展示は「おもいでうろうろプロジェクト」と『マッチのまち』feat. 地図にない場所(Airda)である。「おもいでうろうろプロジェクト」は斜里や知床にまつわる思い出の品などを人々が持ち寄り、それらを展示するというものである。展示されている思い出の品は、水没したカメラや、昔遊んでいた人形など多種多様である。『マッチのまち』feat. 地図に

ない場所 (Airda)」は、かつて斜里町内の店や企業が配布していたマッチを町の人から募り、これを地図上に並べ、見学した人はマッチを配布していた店や企業にまつわる思い出を付箋に書き込んでいくというものである。マッチ箱には店や企業の特徴がよく表れており、これを使って昔の町の様子を再現するという取り組みは面白いと思った。

『葦の波』 part 1」は音や身体、映像などを用いて知床の暮らしや環境を表現しているパフォーマンス作品である。作品内では、ミシンを用いて紙をつなぎ合わせる動作や、実際に土を掘って貝殻を埋める動作などの独特な表現が多く、舞台も屋外、「斜里町旧役場庁舎」の1階、2階の三か所を順番に移動しながら展開されていた。こうした演出は斬新で面白いと思った。

普段使われていない歴史的な建造物をイベント会場として活用する取り組みは素晴らしいと思った。国内には老朽化が進み、活用策がないために取り壊されている歴史的な建造物は数多くあるようだが、こうした取り組みを行うことで、少しでも取り壊される建造物を減らせるのではないかと思う。



写真5 役場庁舎内の作品展示



写真6 『葦の波』 part1

6. 朱円、ウトロでの研修

27日は朱円にある斜里朱円周堤墓や斜里町農業資料等収蔵施設、知床を見学した。この日は知床博物館の職員である阿部公男さんに案内していただいた。

斜里朱円周堤墓は縄文時代後期の遺跡である。こちらでは黒曜石が見つまっているのだが、黒曜石の産地として有名な場所は置戸や白滝であり、見つかった黒曜石はこれらの地域から交易によってもたらされたものとされる。

次に訪れた斜里町農業資料等収蔵施設では主に農業器具などの資料が展示されていた。阿部さんの話によると昭和30年代まで農業では人力が主流であったが、昭和40年代に入るとガラリと変わり、機械が導入されていったのだという。これは首都高速道路や新幹線の開通とほぼ同時期であり、農業における変化の背景には中央政府（東京）の変化があったのだという。私は農業で機械が導入されるのはもう少し後の時代だと思っていたので、首都高速道路や新幹線の開業とほぼ同時期に農業の機械化が進んでいたというのは意外だった。

午後からは知床やウトロを案内していただいた。知床では、1977年に乱開発される危機

にあった開拓跡地を買い取り、森を再生することを目指して「しれとこ 100 平方メートル運動」の開始が斜里町によって発表された。この運動は「100 平方メートル運動の森・トラスト」へと名称を変えながら現在まで続いている。「しれとこ 100 平方メートル運動」によって開拓跡地は森へと再生しているが、まだ十分に再生されていない土地もあるという話を聞いて、一度失われた自然を元に戻すことは簡単ではないのだと思った。

7. 網走市内での見学

最終日は網走市内の 3 つの博物館を宇仁さんに案内していただいた。

はじめに訪れたのは網走市立郷土博物館民俗収蔵展示施設という場所である。こちらは旧丸万小学校の校舎を活用した施設で、かつて使用されていた農業器具から生活道具、アーケードゲームに至るまであらゆる資料が収蔵されており、とても見応えがあった。館内に展示されていた業務用冷凍庫の中には、学芸員の瀬尾なつみさんがつくったアイスキャンディーの模型が入っていたのだが、模型と言われるまで気づかないくらい完成度の高いものであった。

次に訪れたのは網走市立郷土博物館である。この博物館の建物はとても特徴的な外観となっているのだが、この建物を設計したのは北海道との関わりが深い建築家、田上義也という人物である。本館、新館ともに田上義也による設計であり、彼の変遷を辿ることができる貴重な建物として令和元年には国の登録有形文化財に指定されている。田上義也が設計した建物はこれまでに何度か見たことがあったのだが、実際に建物の中に入ったのはこれが初めてであったため、非常に嬉しかった。館内には開館当時の展示がそのまま残されており、展示品もさることながら展示方法や展示ケースなども重要な資料だと思った。

最後に訪れたのはモヨロ貝塚とモヨロ貝塚館である。モヨロ貝塚はオホーツク文化期の遺跡であり、貝塚や竪穴住居址などが見つかっている。モヨロ貝塚館では当時の暮らしやモ



写真7 アイスキャンディーの模型



写真8 網走市立郷土博物館

ヨロ人の埋葬などに関する展示がされていた。

8. おわりに

今回の研修では、資料整理などの他にも川端家座談会や葦の芸術原野祭、博物館の見学など活動は多岐にわたり、学芸員の仕事だけではなく、斜里町や網走市の歴史、自然などについても学ぶことができた。また、知床ワイルドライフセンターでは大学院生の船木大資さんに知床やご自身が研究されていることなどについて教えていただいた。多くの学びや発見があったこの研修は私にとって貴重な体験になったと思う。

この研修の最大の目的である卒論のテーマについても見つけることもできた。私は今回の研修を通して、主要な交通手段が変化したことによる街の変化や、鉄道が開通したことによる駅前旅館の登場など、交通網の変化による影響について興味を持った。これは私が所属する経済学部ゼミで扱う交通や観光というテーマにも関係しているため、卒論に活用することができると思う。今回の研修を通して興味を持ったことや学んだことについても卒論のテーマの候補として考えていきたいと考えている。

この研修を提案してくださった宇仁さん、私たち研修生を受け入れてくださった知床博物館関係者の皆様、船木さん、そして、この研修を私に紹介してくださった手塚先生には心より感謝申し上げます。



写真9 姉妹町友好都市交流記念館



写真10 網走市立郷土博物館の展示

斜里町での研修

人文学部日本文化学科 3年 飯塚 美月

1. はじめに

筆者は、2022年8月23日から28日までの6日間、斜里町での研修に参加した。参加を決めた最大の理由は、道内で学芸員を目指したいと考えているからである。現地の学芸員の方々とお会いでき、さらに博物館での業務を一部手伝わせていただけるまたとない機会だと思い参加した。また、昭和以前の生活についての聞き取りに参加させていただけるとい話があったことも決め手の1つである。声を掛けていただいた当初は、現地で開催されていた「葦の芸術原野祭」の一環である「おもいでうろうろプロジェクト」への参加が予定されていたが、最終的にそれとは別の座談会に同席させていただく形で実現した。

本レポートでは、研修で体験させていただいたこと、教わったことなどの中から、特に印象に残ったことについて感想と共に述べる。

2. 斜里町立知床博物館

1日目は移動と挨拶で終わってしまったために、実質的に研修は2日目から始まった。作業に入る前に、東京農業大学オホーツクキャンパスの宇仁義和さんが、博物館とその周辺を案内して下さった。そこで、まずは研修先である斜里町立知床博物館について紹介し、その日に学んだことをまとめてみようと思う。

この博物館は、斜里町の開基100年の記念で作られた。開基とは行政府(斜里村役場)が置かれることだと宇仁さんに教えていただいた。考古学者の高桑華夷治さんが博物館設立の立役者なのだそうである。展示内容は斜里町の歴史と自然にまつわる物で、具体的には「朱円周堤墓群出土の遺物」や「斜里神社本殿」の他、熊やオジロワシなど動物の剥製があった。館内には通常展示室の他に収蔵展示室や標本庫があり、前者は手前の方だけ入って見られるようになっていて、後者は窓から中を覗けるようになっていた。他にも映写機のある映像展示室があり、そこは普段、講演会や室内楽コンサートなどで使われているとのことだった。

隣に建つ斜里町民俗歴史資料館は、知床博物館よりも先の1970年代中頃に出来た建物である。国の補助事業によって鉄筋コンクリートで出来ており、また入り口には網戸が取り付けられていて虫が入ってこないため、収蔵庫として有用である。しかし、反対に換気口から砂が入ってきてしまうのだという。換気口を閉めると湿気が上がってカビが生えてしまうので、対策として除湿器を設置したそうである。しかし、掃除を怠ると除湿器自体にカビが生えて胞子をまき散らすことになってしまうため、注意が必要だと教えていただいた。換気口から砂が入ってくる可能性や、除湿器も設置だけでは逆効果になってしまう可能性があることを初めて知った。

他にも、特に小さい博物館においては、受付事務とほかの作業を並行して行えるように受付と事務所は一体化しておいた方がいいこと、行政関連の本に比べて大衆本は保存されにくいこと、民俗学には体系だっていない部分もあるため、雑多になってしまう資料を学芸員が工夫しつつ整理する必要があること、特別展などの図録は、学芸員として自分が何をしてきたかを示す名刺代わりに配ることができるので積極的に作るべきであることなど、多くを学ぶことができた。



写真1 朱円周堤墓群出土の遺物の展示



写真2 標本庫の様子

3. 資料の整理

2日目の午後以降、特別な予定がない時間は各々で選択した作業を行うこととなった。筆者が行ったのは、知床博物館所蔵の『明治二十年以降古文書目録』（以下『古文書目録』）と『朱円西部落史草稿』本文のデータベース化、『斜里町史』の地名解説部分と、文章の元になったとされる『アイヌ語地名解』の細かい違いの書き出し、そして町史関係資料の目録作成の4つである。

まず1つ目の『古文書目録』は、知床博物館が所蔵している明治期の資料の目録を、昭和に入ってから作ったものである。ただし、表紙に書いてある日付と最初のページに書いてある日付が一致せず、またどちらも何の日付なのか記載が無かったため、目録が作られた正確な時期は分からなかった。また、途中から紙や筆記具が変わっているため、後半部分は後に付け足したのではないかと推測された。内容としては、出勤簿など何らかの記録にまつわる物が多かったように記憶している。全体的に読めない字が多く、宇仁さんや手塚先生に助けを求めながら作業を進めた。

2つ目の『朱円西部落史草稿』に関しては、表紙にこう書いてあるだけで、あとは殴り書きの本文があるばかりであった。そのため詳しいことは分からないが、宇仁さん曰く、文章そのものを直した形跡が少ないため、草稿というよりは、ある程度推敲を重ねて作られた文章を書き写したものなのではないかとのことだった。4つの作業の中で、最も読めない字が多かった。

3つ目の『斜里町史』と『アイヌ語地名解』については、前者2つとは比べ物にならないほど読みやすかった。『斜里町史』は印刷物なので別として、『アイヌ語地名解』につ

いては字が整っていたこともそうだが、略字も少なく、また現在使われている字が多かったことも理由と考えられる。文章そのものはほとんど一致しており、書き出した相違点は、内容よりも表記に関するものや見出しの内容の方が多かった。

最後に4つ目について、1～数点の資料を束ねて白い厚紙でまとめられた文書群の目録を、その厚紙に書かれたタイトルを基に作成した。それらは町史に関連する資料であることは分かっていたが、具体的にどこに何があるかまでは整理しきれていなかったのだそうである。

どれ1つとして完遂はできなかったが、色々な作業を少しずつやらせていただいたことで気付けたことが3つあった。1つ目は、当たり前だが人によって字の癖が違うということである。これをなぜ「気付けたこと」として挙げたのかというと、当たり前であるはずなのに作業を進めていくまで思い至らなかったからである。特に『古文書目録』の初めの方は、書いた人の年齢故か、くずし字に近いものが多かった。そのため、どうしても読めなかった字については宇仁さんからくずし字辞典をお借りして調べたのだが、自分の中でなんとなく、古文書に出てくるくずし字と現在使われている文字を全く別のものとして捉えていた節があった。それを今回、複数人の肉筆を間近に見たことで、見た目の形が違っただけで同じものだと思うようになった。我ながらあまりに当然すぎるが、辞書を始めとする印刷物だけでは実感できなかったと思う。

2つ目は、漢字の知識はもちろん、語彙力が必須だということである。それ1字では読めなくても、前後の字から判断してあたりを付けることができれば読める部分も増えるし、辞書を引くのも早くなる。宇仁さんや手塚先生に読めない字を聞くと、知ってはいても自分では思いつかなかった単語が返ってくるがあった。語彙だけの問題ではないにせよ、引き出しが多いに越したことはないと感じた。

3つ目は完全に自分の事になるが、読めない字の読み方を考え、辞書を引いて探すのが割と好きだということだ。今回の作業内容でいくと、1つ目と2つ目の作業を行っている時が一番楽しかった。もともと歴史学や考古学、古生物学など、分からないことの多いものに惹かれやすいタイプではあるし、何より今後のことを考えた時、これが苦でないと感じたことは収穫の1つではないかと思う。

4. 川端家座談会

4日目には、斜里郡各村の初代戸長を務めた川端又三郎氏の子孫の家である、旧川端邸で開催された座談会に参加させていただくことができた。話者は川端氏の子孫である女性を始め斜里町にゆかりのある方が5人で、そのうち戦後生まれのお2人が進行役を務められた。座談会の方法は、まず斜里町開基90年(昭和43年)の記念に作られた映像を見ながら、思い出したことを思いつくまま話してもらおう。そして映像を見終わった後、話し足りなかったことを話してもらおう、というものである。

話を聞いていて真っ先に思ったことは、斜里の町をよく知る人にはとても興味深い話ばかりだろうということである。筆者も以前、実家近くに住むおばあさん2人から「この住宅街の辺りは昔沢だった」という話を聞いたことがあり、もっと詳しく話を聞いてみたい

と感じたことがあった。今回の座談会ではそのような話ばかりだったため、ここが地元であればと何度も思った。それでも、今自分のいる町がどのように発展し、どのような生活が営まれてきたのかを知ることができる、とても貴重な経験だった。例えば、斜里町には私営の美術館があるが、そこは元々バター工場だったそうである。町民大運動会や海辺で行われていた「ミナトまつり」、農業協同組合の周年記念などの催し物の他、収穫した土付き人参をネットに入れて木箱に詰める際、堅い板だと人参が割れてしまったという農作業でのエピソード、町を流れる川は元々真っ直ぐでなく、後の工事によって今の形になったという話、お風呂が無かったために市内の別の地域まで足を運んだ話など、町全体に関わることから個人個人の生活に関することまで、様々なお話を聞くことができた。

中でも印象に残ったのが、戦前生まれの方々の子どもの頃に関するお話である。とにかく「食べること」と「遊ぶこと」にばかり興味を持っていたそうである。食べ物が無かったため、おやつは木に生っているブドウなどを採って食べていた他、でんぷん粉に熱湯をかけてふくらませたものに、砂糖をかけて食べるのがご馳走だったと教えていただいた。斜里町ではジャガイモの生産が盛んで、でんぷんは沢山あったとのお話もあったから、ご馳走は砂糖だったのかもしれない。また、通常はお米で作るドブロクをでんぷんで作っていたとのお話もあり、斜里町に生きる人たちにとってジャガイモがとても重要な生産物であったことが分かった。

「遊ぶこと」に関しては、パッチや凧、紙飛行機、おはじきやお手玉など、筆者が祖母からよく聞いた単語が飛び交った。冬には竹ざりやスキーなどを手作りして遊んでいたようで、「昔はなんでも手作りした」と話してくださった。この他、戦時中に疎開してきた人から歌を習ったという話や、「ゲロリン」と呼ばれるスケート靴のようなものの話を聞くことができた。「ゲロリン」は、雪下駄のようなものの裏が逆三角形になっていて、そこに先端が上向きに曲がった細い竹が付けられていたのだそうである。

また、戦時中に農家の芋掘りを手伝いに行ったという話や、小学6年生くらいになると冬に石炭ストーブのための小枝を拾う手伝いに行った話、戦後の食糧難の中、中斜里の小学校ででんぷん飴をオブラートにくるんで釧路へ出荷していたというお話もあり、戦争や冬の厳しさを感じると共に、現在の物の多さや便利さがいかにありがたいものであるかを改めて認識できた。

この他、斜里の町に関するお話もいくつか聞くことができた。例えば施設に関して、動画内に北海道銀行の店舗が映っていたが、これは斜里町内で2店目であったそうである。1店目は駅の近くにあったそうだが、その2つの店舗と、現在知床斜里駅から徒歩5分程度の所にある店舗との関連までは聞くことができなかった。また、昭和40年頃の神社が映った際には、鳥居が今のものと違うのではないかという話が出た。ただし、その後すぐに次の話題になってしまったため、その場で結論は出なかった。この他、開校から僅か17年で閉校となった真鯉小学校や、かつて市内にあった駅通所も話題に上がった。

より生活に近い話題として、先に挙げたように昭和初期の斜里にはお風呂の無い地域があった他、下水もなかったのだと教えていただいた。そのため排水はサラサラの砂地に捨てていたようで、衛生的な問題から、入ったら死ぬと言われるほどだったそうである。具体的にいつまでこのような状況であったのかまでは聞くことができなかった。

産業に関しては、先にも挙げたジャガイモを始めとする農業の他に、牛・豚・鶏などの畜産業が盛んだったそうである。体感的に豚肉が多いと感じていた方がいらっしゃった他、昭和 41 年頃に、道路に沢山の牛が出てきてしまっていて通ることができないほどだったことがある、というお話もあった。加えて、昭和 40 年頃には町内に炭坑もあったそうである。また漁業に関して、クジラを食べていたというお話もあった。その際に流氷に乗って撮った写真があるという声が上がり、宇仁さんのパソコンでその写真を見せてくださった。氷が割れる心配はなかったのかと宇仁さんに訊ねたところ、恐らく浅瀬で流氷も岸について、浮いていなかったのではないかとのことだった。農業に漁業、石炭産業、畜産業と、第一次産業が活発な町であったことが分かった。

5. 旧朱田小学校(農業資料等収蔵施設)

5 日目には、知床博物館の阿部公男さんに連れられて、朱田の周堤墓群と旧朱田小学校、そしてウトロを見学した。本章では特に旧朱田小学校でのことについてまとめてみようと思う。

旧朱田小学校は現在、知床博物館の農業資料等収蔵施設として利用されている。閉校前に児童が描いた絵などが廊下の壁に残る中、教室や体育館などを利用して昔の農具が数多く展示されていた。斜里の農業は「小麦」「イモ」「ビート」の 3 種が主で、農具の中にも種芋を撒くための道具や小麦を粉にするための臼などが展示されていた。

中でも特に印象に残った道具は、体育館に展示されていた「プラウ」と呼ばれる農具と、体育館の前に置いてあった餅つき用の木製の臼の 2 つだ。1 つ目に関して、まずプラウとは畑を耕す際に用いる道具のことで、洋犁とも言われる。昭和 10~20 年代時点で使われていた、馬で曳いて畑を耕す農具はあるかと阿部さんに質問したところ、その頃ならこれだろうと教えていただいた。時間の関係で写真が撮れなかったため文字だけになってしまうが、どのような道具であるかを簡単に説明してみようと思う。まず、この道具は使用者から見て進行方向に馬を繋いで使う。前から馬、プラウ、使用者の順に並ぶことになる。そしてプラウ本体の下には土をおこすための刃が、使用者から見て進行方向を向いているものが 1 枚と、使用者の方を向いているものが 1 枚の計 2 枚ついていた。刃や馬を繋ぐ金具部分以外はすべて木で出来ており、高さも横幅もさほど大きくはないが、縦幅は人の身長よりも大きかった。

この道具が印象に残った理由は、筆者の祖父がよくこの話をしていたからだ。兄たちが戦争に行く間、1 人で馬 2 頭を曳いて畑を耕したという話をするのが、酔った祖父の常だった。明治期に北海道に伝わった道具として遠目から見たことはあったが、近くで見るのは初めてで、また昭和初期にも使われていたことを今回初めて知った。

2つ目の臼は複数個あったが、全て各家庭で使う分を手作りしたものだそうで、現在市場で売られているもののような整形はされておらず、形や大きさもバラバラだった。これが印象に残った理由は、前日の座談会で聞いた「昔の人は必要なものがあれば何でも手作りした」という話を思い出したからだ。中にはくびれが彫られているものもあり、彫る場所が多いとその分時間がかかって大変なはずなのに、なぜわざわざくびれが作られているのか不思議に思った。阿部さんに質問したところ、軽量化のためだとのことだった。製作者と使用者が同じだからこそ、ごく自然に自分たちの使いやすいような工夫がされているのだと納得した。前日にお話を聞いたことと合わせて、改めて実際に聞くこと・見ることの重要性を感じた。



写真3 旧朱円小学校(農業資料等収蔵施設)

6. 歴史学について

斜里町に限らず、歴史学を学ぶこと・研究することについても教えていただいたことがあるのでまとめておこうと思う。

まず、戦前・戦後史の場合に限るが、当時のことを深く知るには、文書に当たるよりも口頭で話してもらう方がいいのだと宇仁さんに教えていただいた。理由は、当時の教育の問題で文章を上手く書ける人が少ないためである。その代わり、お話はとても上手な方が多いのだそうである。

文書に当たる場合には、2つの方向性が考えられる。1つ目は、高齢者が通う大学の文集を手掛かりにして聞き取りに行くこと。2つ目は、聞き取り内容を文字に起こした文章に、学生視点で注釈をつけることだ。これは祖父母世代の話を親世代が聞いて文章化したものの中に、子どもや孫世代には注釈が無いと理解の難しい言葉が何の説明も無く使われていたりするためだそうである。このお話を聞いて、戦前生まれだった祖父の話の中に、自分には分からないが父には通じているらしい単語があったのを思い出した。その時の話に出てきたのは「じょっぴん」で、父から昔は玄関の扉に鍵ではなく棒を掛けていたこと、父が子どもの頃にはまだ「じょっぴん」だったことなどを教えてもらうまで、一切何のこ

とだか分からなかった。宇仁さんの仰ったように、まさに祖父母世代と親世代には通じて子ども世代には通じない言葉だと、とても納得した。

更にもう1つ、行政区ごとに分かれている情報を1つにまとめることも有効だと教えていただいた。例えば「知床」の場合、町史の上では「斜里町」と「羅臼町」に分かれてしまう。このような場合に近隣の自治体の情報と合わせることで、片方だけでは足りない情報が補完されるということだろうと理解した。

また、阿部さんからは視野を広く持つことが重要だと教えていただいた。具体的には、文書だけでなく実際にその場所に足を運ぶことも大切であること、近現代史の場合でも、もっと遡って見る必要があること、歴史分野だけでなく、他の分野のことも調べるべきであることの3点であった。1点目は、今の学生はあまりフィールドワークをしないのか、と阿部さんに訊かれたことから始まった話である。「文字からの自分の想像だけで歴史を語っても、他の人にとってそれは面白くない」と仰っていたのが強く印象に残っている。

2点目、3点目とも関連するが、朱円の周堤墓群に連れて行っていただいた時、阿部さんから「周堤墓の辺りと、すぐ近くの斜里農業発祥の地とは地形的に何が違うと思うか」と投げかけられた。答えは「周堤墓の辺りは当時から陸地だったが、畑になっている所は元々沼地だった」というものである。そしてその付近が畑として利用されたのは、沼地であったが故に土地が平らだったからだとのことだった。その場所が沼地であったのは縄文時代に今よりも水位が高かったことの名残だという話だったから、これに気付くためには、近現代の歴史だけでなく縄文時代の知識も頭に入れておかなければならない、ということがとてもよく分かる。また、事前の予習で斜里町の開拓に関する本を読んでいただけでは、こんなに近くに周堤墓群があることは分からなかった。阿部さんが我々学生に問いかけた「ここに入植した人たちは、どうしてここ(周堤墓群のある場所)でなくあちら(畑)に鋤を入れようと思ったのか」という疑問とその答えは、近現代史の本だけ読んでいても出てこないものだと納得できた。

最後に、社会が大きく変化する契機となった出来事については特に知っておくべきだということを、宇仁さんも阿部さんも仰っていた。昭和39年の東京オリンピックや昭和45年の大阪万国博覧会は、その出来事を境に様々なことが大きく変化したのだと教えていただいた。

7. さいごに

これまでに書いたこと以外にも、冒頭にも書いた「葦の芸術原野祭」で劇を鑑賞したり、最終日には宇仁さんに網走郷土博物館の本館と民俗収蔵展示施設、モヨロ貝塚館に連れて行っていただいたりと、本当に色々な経験をさせていただいた。そして得るものが多かった分、自分の至らない点に気付かされることも多かった。今後の課題としては、まず読書量を増やさなければと感じた。全日程を通して、お会いした方々と自分の知識量の差に愕然とした場面が多かったからである。もちろん現時点では並べようはずもないのだが、自分が同じ年齢になった時に同じだけの知識を持てているだろうかと考えると、今のままで

は到底無理だと感じた。そこで、今後自分にできることは何だろうかと考えた時、真っ先に思いついたのが読書である。歴史は文書だけでは分からない、とはいえ、知識の蓄積には有用だと思う。特に歴史分野だけに止まらず、色々な分野の本を読んでもみようと思った。

最後になりましたが、今回の研修で大変お世話になった宇仁さん、佐々木館長と阿部さんを始めとする知床博物館の皆さん、宿泊先であるワイルドライフセンターの船木さん、座談会で沢山のお話を聞かせてくださった皆さん、そして声を掛けてくださった手塚先生に、深く感謝申し上げます。一緒に参加した学生2人にも、感謝したい。

斜里町学外研修を終えて

人文学部日本文化学科 3年 柄澤 ののは

1. はじめに

私は2022年8月23日から28日にかけて行われた斜里町での学外研修に参加した。この研修の目的は、斜里町立知床博物館に所蔵されている民俗資料や文書の整理をさせていただくこと、研修の中で卒論のテーマを見つけることであった。博物館実習では経験することができなかった実務をお手伝いさせていただくことができ、また、リーダーとしての経験も積ませていただけたことを嬉しく思う。

今回の研修の5泊6日のうち初日は移動と打ち合わせ、2日目は知床博物館とその周辺を見学し斜里町史に関わる文書の整理作業を行った。3日目は2日目に行っていた文書の整理作業の続きを行い、4日も文書の整理作業を行ったのち、旧川端家住宅で行われた座談会を見学した。5日目は朱円とウトロ地区を見学し、6日目は網走市の博物館を見学することができた。本稿ではこの6日間の研修で学んだこと、感じたことを述べていく。

2. 斜里町立知床博物館について

2日目と3日目は主に知床博物館で活動した。2日目の午前中は知床博物館の敷地内にある施設や博物館内の展示を見学した。敷地内には斜里町民俗資料館があり、この資料館は知床博物館より先にできた資料館で、国の補助事業として建てられた建物である。博物館内では知床博物館の学芸員でもある東京農業大学教授の宇仁義和さんに案内していただきながら知床博物館の歴史や博物館の一般的なこと、民俗資料の扱いの難しさなどを教えていただいた。博物館内の展示は土器や石器などの遺物、生活用具、鉄道に関する民俗資料が展示されていた。2階には野生動物の剥製やツチクジラの頭骨などが展示されている。これまで私は民俗資料を多く扱っている博物館をあまり訪れたことがなかったため展示内容はどれも興味深いものであった。

3. 文書の整理作業

2日目の午後と3日目、4日目の午前中は知床博物館に隣接している姉妹都市友好都市記念館にある事務所で斜里町立知床博物館に所蔵されている文書の整理作業を行った。さまざまな文書や写真が所蔵されていた中で私は文書の整理作業をしてみたいと考えていたことと、先史時代の斜里町に関心があったため、斜里町史の先史時代の部分の下書きである斜里町史先史時代と斜里町史を照らし合わせ異なっている箇所を探し、Word に書き出して

いく文書の整理作業を選択した。『斜里町史先史時代』と『斜里町史』を照らし合わせ内容を見ていくと異なっている箇所が多く、同じ箇所は少なかったように感じた。『斜里町史先史時代』は160頁ほどある文書であったが、そのうちの120頁分を『斜里町史』と照らし合わせることができた。作業初日は異なっている部分を探すことに苦勞し、時間を要してしまっていたが、2日目には作業にも慣れ、スムーズに進めることができるようになりその日目標としていた頁数まで終わらせられるようになっていた。3日間の作業ですべて探し終わらせることはできなかったが『斜里町史先史時代』と『斜里町史』では先史時代の部分だけでも下書きの段階と実際の町史の記述は多くの部分で異なっていることが分かり面白く感じた。文書を照らし合わせ異なっている部分を探すのは楽しい作業であった。

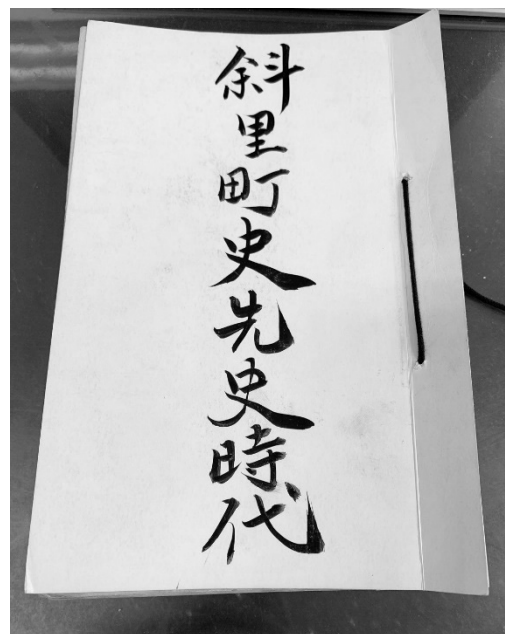


写真1 斜里町史先史時代

4. 旧川端家住宅での座談会見学

研修4日目の26日には15時から17時まで旧川端家住宅で行われた座談会を見学させていただいた。座談会は斜里町の初代戸長を務めた川端家の旧邸宅に川端家末代の川端和子氏をはじめとした斜里町に所縁のある3名のお年寄りに戦前から昭和30年代頃の斜里の様子を映した映像を見てもらいながら当時の様子を語ってもらうものであった。旧川端家住宅は大正12年築であり、この座談会は古民家再生プロジェクトの一環として行われたイベントである。

座談会では昔の斜里町についてさまざまな話を伺うことができた。話の中で昔の斜里町ではお祭りで大名行列のようなものが行われていたと聞き、北海道で大名行列のようなものが行われているお祭りはあまり聞いたことがなかったためどのようなものだったのか興味深かった。また、斜里の地形はへの字型であったこと、湿地であるということも聞き、私たちが宿泊していた「知床ワイルドセンター」が湿地に建てられた一軒家であったこともあり斜里の地形にも興味が湧いた。

座談会は2時間の予定であったが時間が足りなくなるほど3名の参加者の方々が昔の様子を語っていたのが印象的であった。

5. 葦の芸術原野祭について

葦の芸術原野祭とは2021年から行われている芸術祭である。この芸術祭は東京藝術大学の卒業生などによって企画・運営されており、川端家住宅の向かいにある斜里町旧役場庁舎にて8月6日から27日まで開催されていた。私たちは26日に新作公演『葦の波』を鑑賞し、27日に『おもいでうろうろプロジェクト』、『マッチのまち』などの参加型プロジェクトの展示を見学した。東京藝術大学の卒業生などによる公演でのパフォーマンスは独特で貝殻や水、ミシン、楽器、音や光などあらゆるものを使用した表現は見ていて引き込まれるものがあった。また、屋外から1階、2階へと演者と観客が一緒に移動するスタイルも斬新で面白かった。公演は非常に満足度が高く、他の公演も観てみたいと感じた。



写真2 「葦の波」公演で使われた旧役場庁舎の1階

6. 朱円・ウトロの見学

研修5日目の27日は知床博物館学芸員の阿部公男さんに案内していただき、午前中に斜里朱円周堤墓と旧斜里町立朱円小学校、午後からはウトロ、知床を見学した。

斜里朱円周堤墓は朱円環状土籬とも呼ばれる縄文時代後期の遺跡で、周堤墓は2つある。この遺跡は堅穴を掘り、その土で周りに堤が築かれているため周堤墓と呼ばれている。「斜里町史先史時代」と「斜里町史」を照らし合わせる作業中に朱円周堤墓についての記述があり、大学でもストーンサークルについて学んだことがあったことから一度実際に訪れてみたいと思っていたため実際に見ることができて満足であった。

旧斜里町立朱円小学校は廃校となった小学校で現在は斜里町農業資料等収蔵施設となっている。ここでは農業器具が収蔵されており、昭和10年代から40年代頃までの農業器具の変遷の様子を学ぶことができた。農業器具や農業に使っていた機械をあまり間近で見た

ことがなかったため見学できたことは良い経験になった。

午後からはウトロ地区を案内していただき、「しれとこ 100 平方メートル運動」が行われている場所まで車で見学した。「しれとこ 100 平方メートル運動」とは知床の開拓地跡を原生の森に返す運動である。斜里町では開拓地跡を乱開発の危機から救うために寄付を全国に募り、土地を買い取った。この運動によってほぼ全ての開拓地跡を買い取り、守ることができたという。現在も運動で守られた開拓地跡を原生の自然へと戻せるように木を植え、森を育てているそうである。しかし、まだ完全に再生されていない土地もあるということを阿部さんに教えていただいた。実際に運動によって木が植えられ、森として再生されている場所を見学した際、まだ木が成長していない場所や森として育っていない場所もあった。自然は一度壊れてしまうと完全に元通りにするためには多くの時間を要してしまうのだということに改めて感じ、自然は絶対に破壊してはならないものだと思った。また、森を守るだけでなく育てているこの運動の取り組みは素敵な取り組みだと思った。

知床自然センターでは「しれとこ 100 平方メートル運動」についての分かりやすい展示があったほか、クマの剥製も置かれていた。知床自然センターを出て車に乗り込もうとした時、野生の鹿が駐車場近くに出てきていた。私は肉眼で野生の鹿を見たのは初めてであったため感動した。さらに鳴き声も聞くことができたのだが、非常に特徴的な鳴き声で面白かった。

知床世界遺産センターも訪れた。ここには世界自然遺産としての知床についての展示解説があり、知床の自然について詳しく知ることができる施設になっている。

ウトロまでの道中、阿部さんからウトロや知床について多くのお話を伺うことができた。興味深い話が多く、勉強になる話も伺いながら、朱円、ウトロの見学をできたことは良い経験になったと思う。



写真3 朱円周堤墓



写真4 知床で見た野生の鹿

7. 網走市の博物館見学

研修最終日は宇仁さんに斜里町から網走市まで送っていただき、網走市立郷土資料館、モヨロ貝塚、モヨロ貝塚館を見学することができた。斜里町から網走市までの移動は釧網本線を使う予定だったが、運休となってしまったため宇仁さんに送っていただけることとなった。釧網線は乗ってみたい電車であったため残念だったが、今後機会があれば乗ってみたいと思う。

はじめに網走市立郷土資料館の民俗収蔵展示施設を訪れた。ここは廃校となった丸万小学校の校舎を利用した網走市立郷土博物館の収蔵庫である。昭和30年代までの農具、漁具、林業用具が中心に収蔵されており、昭和50～60年代の生活用具の資料も収蔵されていた。民俗収蔵展示施設では網走市立郷土博物館で学芸員として働いている大学の先輩である瀬尾なつみさんにお会いすることもでき、学芸員としての業務を詳細に教えていただくことができ勉強になった。瀬尾さんは手先が器用で、動画を見ながら明治時代の食事をレプリカで再現したという。実際に網走市立郷土博物館でそのレプリカの展示を見ることができたのだが再現度が高く、非常に上手く作られていた。民俗収蔵展示施設の出入り口には棒アイスのレプリカが置いてあったが、これも瀬尾さんの作である。本物の棒アイスにそっくりのため本物だと勘違いしてしまうくらい完成度が高いレプリカだった。

郷土資料館では他にも、旧川端家住宅で行われた座談会でお年寄りの方々がお話していた下駄スケート(ゲロリ)の実物が展示されており、実物を見ることができて座談会で聞いた話の理解が深まった。また、川端家文書の実物も展示されており今回の研修で触れたこと、学んだことを復習しながら展示を楽しんで見た。

最後にモヨロ貝塚とモヨロ貝塚館を見学した。モヨロ貝塚は考古学の授業で学んだオホーツク文化の遺跡で、近くに行く機会があれば訪れたいと考えていた遺跡であった。そのため見学することができると思った時は嬉しかった。実際にモヨロ貝塚の史跡、モヨロ貝塚館の展示を見たことで、授業で学んだことの理解をより深めることができた。



写真5 民俗収蔵展示施設の展示



写真6 明治時代の食事 レプリカ

8. 斜里町について

今回の研修で初めて訪れた斜里町は静かな町だったこと、明かりが少ないためか夜空を見上げると星が非常に綺麗で感動したことが印象に残っている。また、葦の芸術原野祭に東京藝術大学の卒業生が関わっていること、その「葦芸」を見に東京からお客さんが来ているということを知ってこの自然豊かで静かな田舎の風景があることは都会にはない魅力で、そのようなところが東京などから人が来る所以なのではないかと思った。

知床に見学した際にはまだ8月であったが紅葉している木があり、一足早く紅葉を見ることができ驚いたとともに札幌との気候の差を実感した。

9. おわりに

今回の研修では文書の整理という実務だけでなく、旧川端家住宅での座談会见学、朱円やウトロ地区の見学、葦の芸術原野祭の観覧など多くの経験をさせていただくことができ、非常に充実した研修だったと感じる。研修中宇仁さんや阿部さんには斜里町の歴史やフィールドワークの大切さや実際に調査・研究して検証してみることの大切さ、卒論のテーマ選びのアドバイスなど様々なことを教えていただいた。この研修に参加しなければ得られない学びが多くあり、この6日間で得たものは大きかったと思う。目的であった卒論テーマを見つけることについては、フィールドワークを行って地域の歴史を調べること、葦の芸術原野祭についても興味を湧いたためそれらをテーマにして卒論を執筆するのも面白いのではないかと考えている。

最後にこの研修の提案をしてくださった宇仁さん、朱円やウトロまで案内してくださった阿部さん、私たちに声をかけ、引率してくださった手塚先生にこの場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。

ミニミュージアムのねらいと講評

北海学園大学教授 手塚 薫

3年生以上に開講されている「博物館経営論」では、他科目も含め今までに学んだ知識を活用し、ミニミュージアムの展示計画を練り、ミニチュア模型、図録、ポスターを実際に作成してもらおう試みである。完成した作品をディスプレイし、学生同士で互いに作品評価も担当する。制作はレポート作成や試験前の多忙なスケジュールの合間を縫って、新型コロナ禍が完全に収束していないなか、自宅を中心に行われる。ファンタジーや既存展示の模倣で済ませることはできない。制作することで、現実のミュージアムでも生じがちな諸問題を、評論家のように論評するのではなく、自己反省的に体感することができる。ミュージアムは、現代人が直面する様々な社会的課題に対して、収蔵資料やミュージアム活動を通じて向き合い、地域社会に生きる人々の生活をさらに豊かにしていく使命がある。そのためには、日頃から現実のミュージアムとそれを取り巻く社会的課題に関心を持ち、世代間の相互行為的な文化伝達を実践することが求められる。

文化庁のHP「博物館数、入館者数、学芸員数の推移」によれば、1987年に2,311館だった国内の博物館総数は、その後順調に増加し、2008年には5,775館と約2.5倍の伸びを示したが、2018年には5,738館と近年は横ばいで推移している。入館者数では、2001年に269,503人であったが、2017年には303,069人とやはり増加している。博物館数の増設にともない、1993年に3,711人だった学芸員数も2018年には8,403人と倍増している。しかし、博物館の類型のなかで圧倒的多数を誇る「類似博物館」は、「登録博物館」と「相当博物館」に比べ、1館当たりの学芸員数が少数であることが話題に上ることは少ない。2018年時点の1館当たりの学芸員数は、「登録博物館」と「相当博物館」でそれぞれ、3.93人と3.85人であり、ほぼ拮抗しているのに対し、「類似博物館」では0.76人と1名を切っている。1名以下という人員では、運営費の削減、市場原理の導入などの荒波にさらされ、学校との連携、教育普及行事、集客のための多種多様な企画を数多く実施せざるを得ない現代のミュージアムにおいて、基本的な収蔵資料にかかわる日常的・根幹的な業務が滞るのは必然の成り行きである。こうした現状に危機感を抱き、近代の制度としてのミュージアムが本来持っていたはずの社会的役割を回復し、「陶冶施設」に立ち戻るべきだとする議論が注目されている。「陶冶」という言葉は、教養のない者にミュージアム側が知識やモノの見方、感じ方を一方通行的に教えるという意味ではもちろんない。近代ミュージアムは、その理念に従って自文化や異文化のモノの鑑賞と解釈を通して、どんな人も臆することなく感じたことを議論し、自己反省的な活動が行われる場所、すなわち「アゴラ」や「常設会議」の場へと回帰すべきという観方である（ミヒャエル・パーモンティエ 2012『ミュージアム・エデュケーションー感性と知性を拓く想起空間ー』慶応義塾大学出版会、262-263頁）。

マッキンゼー&カンパニー社が提唱するソフトの4S（経営スタイル、スキル、スタッフ、シェア・共有された価値観）とハードの3S（戦略、組織、システム）は互

いに補い合って組織の価値を高める。ソフト要素は人の感情や価値観がかかわり、変更が容易ではない。一方、ハード要素は経営者の意思や企業努力で改革がしやすい。マ社では、組織に所属する全メンバーの行動の規範になる考えかたとして「シェア・共有された価値観」を最重要視しており、それは「ビジョン」と「基本理念」から成る。ミニミュージアムでは、現代社会が直面している諸課題の解決に資するため、なによりも新たな価値の創造を重視している。「ビジョン」はゴール達成のために目指すべき短期目標とし、「基本理念」はそれよりやや抽象的で長期的な展望としている。この2つが複合・融合して「展示趣旨」（シェア・共有された価値観）になることを学生たちに認識してもらった。「現状分析」することで、出発点の明確化を促し、現時点での課題とその解決を意識させた。優れた経営者は夢や思いを語り、そうでない経営者は数字ばかりを追い求める。人間形成空間としてのミュージアムの再興をも可能にする組織変革のフレームワークといえるだろう。

本稿では、作品のプレゼンテーション後に実施した学生たちによる投票の結果、ポスター・図録・展示部門をあわせた総合評価で最高得点を獲得した学生4人の作品を紹介する。これからミニミュージアム制作に挑戦する学生は、本講評の後に掲載されたこれら優秀作品の作者4人によるレポートを熟読して参考にしてもらいたい。

「ピアノの歴史展」を制作した佐々木円香さんは、小学時代に習っていたピアノを題材にし、ピアノという楽器の歴史に焦点を当てた。制作に当たり俯瞰図を書くことで仕上がりイメージできたことが、その後の作業をスムーズにしている。図録の作成には一般的な word ではなく、専用のペイントソフトを使用したことで手の込んだデザインを実現できたという。来館者の立場で何をしてほしいかという視点を重視した結果の判断である。

「にうぶをめぐる冒険」を制作した神野光さんは、過疎化が進行中の出身地でもある美深町をテーマに選んだ。展示を通じて町の姿がどのように変化してほしいかを考えることを長期展望に据えている。圧巻は、展示中央に配置された美幸線仁宇布駅通所客室の再現である。資料が乏しいため、ここをよく知る人物に取材をし、現地に足を運ぶなどしながら苦労して制作した駅通所の客室がメイン展示となっている。ここまではなかなかできないが、その成果は再現性の高さに反映している。

「すし そば 屋台」を制作した松山陽奈子さんは、江戸時代の屋台文化は今日の日本食の根幹をなすという事実を認知させることをコンセプトに掲げた。壁と展示物が同じ高さでは実際の雰囲気が出づらいと判断し、工作を容易にするためよく用いられる展示床面の底上げという手法はとらなかった。箱の壁・床にリメイクシートを貼った点と共に展示空間のリアルさを向上させている。ポスターは、Nパターンという人の視線の動きを考慮して制作されただけあり、人目を惹き中身がとても理解しやすい。

「妖怪と住む日本の暮らし」を制作した宗廣みことさんは、古い日本の家屋の減少により、そこを住処にしていた妖怪たちも姿を消していることの関係性に着目した。妖怪への理解を深め、日本人の伝統的な生活様式の衰退をも来館者に考えてもらうという点で、ビジョン・コンセプトの設定が巧みである。自宅には妖怪に関する書籍が多数あるという環境にも恵まれ、製作には追い風となった。妖怪の魅力をより深く理解したことで、卒業論文執筆のためのよい準備にもなったという。

博物館経営論 ミニミュージアム制作を振り返って

人文学部日本文化学科 3年 佐々木 円香

はじめに

博物館経営論では、ミニミュージアムの制作という大きな課題が課せられる。博物館実習などのグループワークで行っていた、企画の立案や展示室のレイアウト構想といった一連の流れをすべて一人でいき、そのほか展示室の模型をはじめ、実際の博物館で開催される企画展と同様、図録とポスターも作成するという課題である。過去の学事報告書や先輩との会話から、この課題のことを履修前からなんとなく知ってはいたものの、実際に初回講義で説明を受け、先輩方の作品を目にして、これだけの完成度の高い作品を期限内に制作できるのか、単位を取得できるのか、改めて不安を感じたことを覚えている。

本稿では、私のミニミュージアム制作についてその過程を振り返り、この講義を通して得た学びや改善の余地などについて述べていきたい。

1. ミニミュージアムの構想

ミニミュージアムの制作にあたり、まずはどのようなミュージアムを構想し、どのような企画展にするかを決定する必要があった。作品の提出に先立ち、「ミニミュージアムで検討すべきこと」として、具体的な企画展の内容や展示タイトル、展示室の俯瞰図、材料などをまとめたプリントの提出が求められた。初回講義から約1か月半の間で、構想を練り上げる必要があり、私はこの構想段階が最も苦労した。

テーマを決める際、自分が好きなもの、興味・関心を持っているものなどを選ぶとよい、と先輩方の助言で何度も目にしてきた。中には卒業研究のテーマに関連するもので制作を行ったという事例も見られた。制作期間中のモチベーション低下を考えると、少なくとも興味を持っているものの方がやりやすい、というのは間違いないと思われる。

私は、この構想の際、何をテーマに選べばよいのかを1か月近く考え続けていた。歴史や文学、地理や美術といった学術的な分野に関する深い知識は持っていなかったうえ、興味・関心を持っているものはいわゆるサブカルチャー系や、著作権的にテーマとして選べないものばかりであり、テーマ決めは他の受講生と比べてかなり遅れをとってしまっていた。結果として、小学時代に習っていたピアノに焦点を当て、ピアノという楽器の歴史をテーマとした企画展の構想を練ることにした。この課題で制作するミニミュージアムは、決して非現実的な空想ではなく、実際にどこかの博物館で行われているような課題設定や展望が求められる。企画展がどのような意義を持つものかという軸が、模型などの制作前に定まっていることから、後の作業を比較的ぶれずに進めることができた。この段階で俯瞰図を書いたことで、制作する模型をイメージすることができたため、制作作業をスムーズに進められた。また、限られた期間内で私にどこまでの作業ができるかをここで判断できたことで、「良い意味で」妥協できたことが私の中で非常に大きなメリットとなった。

2. 現状分析・ビジョン・コンセプト

「ミニミュージアムで検討すべきこと」を提出し、いよいよミニミュージアムの制作が本格的に始まった。この段階で図録の書式やレイアウトは一切考えていなかったものの、テキストとして予め作っておきたいと考えていたため、展示解説や目録などを除いたテキストの作成に取りかかった。先に提出したプリントで、現状分析・ビジョン（短期目標）・コンセプト（長期展望）については大まかに書いていたため、その内容に具体的に肉付けを行い、企画展の趣旨の方向性を改めて確定させた。

ミニミュージアムの課題を構成している図録・模型・ポスターの3点について、その着手順・完成順は個人に委ねられているものの、この現状分析・ビジョン・コンセプトは先に決定させた方が後々楽になるように思われる。これらはそもそも構想の提出段階である程度固まっているものであるため、凡例などの他のテキストと比べて作成しやすいうえに、軸を見失わずに以降の制作作業を行えるからである。

以下、図録に掲載した現状分析・ビジョン・コンセプトをそれぞれ原文のまま掲載する。

現状分析

18世紀初頭にその原形が誕生し、以来改良と進化が続いて来た鍵盤楽器：ピアノは、21世紀現在、私たちの生活の中で最も身近な楽器のひとつになっている。伴奏のために学校の音楽室に置かれたりクラシックやジャズ、ロックやJ-POPをはじめとするあらゆるジャンルの曲の構成楽器として用いられたりしており、誰もその音色を聞いたことがあるだろう。両手を使って演奏することで脳の発達を促すことができるという理由や、音感あるいはリズム感を身に着けることができるという理由から、親が子供にさせる習い事の定番になっており、大人でも音楽教室に通うという人は多い。また、家にあるピアノを趣味として演奏する人もいれば、プロとして演奏するという人も数多くいる。演奏をしない人でも、お店のBGMや音楽アプリなどで音色を聴く機会は多く、音源の中にも原曲やピアノアレンジなど様々なものが存在している。

このように、ピアノへのかかわり方は人それぞれであるものの、ピアノと生活はもはや切っても切れない関係になりつつある。しかしそのような立ち位置にあるピアノがどのような歴史を歩んで今に至っているのかについては、まだまだ認知が薄いのではないかと思われる。

現状分析では、テーマとしたピアノに関して、現在の私たち人間とピアノの関係を述べている。その中でピアノがどのような楽器であり、音楽の中でどのような立場にあるのかについても言及している。ピアノの歴史というテーマに着地する前に、同じピアノの中でも異なるテーマを考えており、その際にメモに残していた現状分析を一部使い回す形でテキストを作成したため、改めてテキストを見返し、ピアノの歴史というテーマに対する現状分析というよりはピアノ自体の現状分析に寄ってしまったように感じている。

ビジョン

本展を通して、

- ・ ピアノがどのような歴史を歩んできたのかを知ってもらう。

ピアノはいつ生まれ、どのように変化していったのかについて、写真を用いて視覚的に学び、その変遷を見ていただきたい。

- ・ 現在のピアノはどのように進化しているのかを感じてもらう。

科学技術の進歩はピアノにも影響を与え、ピアノは現在も進化し続けている。そんなピアノを視覚や聴覚、そして触覚でも感じていただきたい。

ビジョンおよび下記のコンセプトでは、箇条書きの部分に下線を引いた（レポート上では二本線を用いたが、実際の図録上では、ピアノの五線譜を下線に見立てて用いている）。ビジョン＝短期目標ということで、来館者の方に企画展を通して何をしたり感じたりしてもらいたいのかを考えて作成した。博物館の展示では五感を用いるものの方が良いということを経験した。これまでの学芸員課程科目で学んでおり、視覚・聴覚はもちろんのこと、触覚も使える展示にしたいと考えていたため、それらを含めてテキストの作成を行った。また、企画展の構想段階で、展示室内に防音の部屋をつくり、そこに自動演奏機能付きのピアノを配置したいと考えていたため、2つ目のビジョンを上記のように設定した。

コンセプト

本展を通して、

- ・ 音楽という文化的活動へ積極的に関わってもらう。

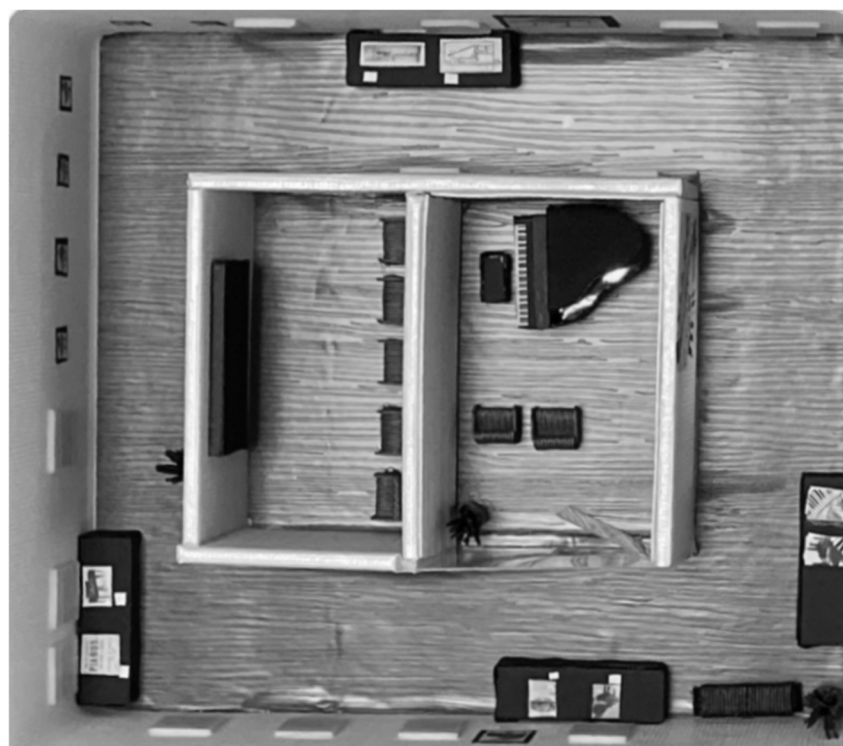
ピアノは音楽という音によるコミュニケーションを形成する楽器の一つであり、他の楽器とも密接に関わりながら音楽史を形成してきた。ピアノの歴史を通して、ピアノと共に演奏される他の楽器や音楽自体にも関心を持っていただきたい。そして、音楽という文化的活動へ積極的に関わり、これからの音楽文化を担う一員として、音楽をより楽しんでいただきたい。

コンセプト＝長期展望ということで、ここでは来館者の方に企画展を通して、最終的に何をしたいのかを考えて作成した。ビジョンからの繋がりを意識して、ピアノを通して楽器や音楽自体への興味・関心を持ってもらい、音楽と楽しく関わってほしいということをまとめた。

現状分析・ビジョン・コンセプトの設定を改めて振り返り、この3点の中でも統一性がかなりぶれてしまったように感じている。歴史をテーマにしたため、コンセプトで未来のピアノ文化および音楽文化への期待についてもっと記述しても良かったのではないかと考えている。また、現状分析とコンセプトを見比べて「ひとつ」「一つ」の表記揺れが確認できたため、表記の統一性にも気を配ってテキストの作成を行うべきだったと反省している。

3. 模型の制作

現状分析・ビジョン・コンセプトが完成し、続いて模型の制作に着手した。「ミニミュージアムで検討すべきこと」でまとめていた俯瞰図をもとに、発泡スチロールの箱に出入口用の穴を空け、壁と床にシートを貼る作業を行った。構想段階から着手が遅れていたこともあり、作業を進めていた他の受講生から「箱に穴を空ける時にくずがたくさん出て処理に困った」という声を聞いていた。そのため穴開け作業の際はベランダで行い、部屋を汚さずに済んだ。穴開けには段ボールカッターを使用した。壁と床の貼り作業にあたり、どちらも100円均一で売られていたリメイクシートを使用した。壁にはシートをそのまま貼り付けし、床は底上げをしたかったため、厚さ1センチのエチレンボードを購入し、床の大きさにカットしてシートを貼り付けた。この際、展示室の中央部にシアターと防音室を作りたかったため、中央部をボードからくり抜いた。残りの□の部分の部分を先に箱の底に入れ、そこにシアタールームと防音室用の壁を挿し込み、最後にくり抜いたボードを壁の厚さ分カットして床の隙間に押し込んだ。床面は当初、テープ等で接着させる予定だったが、カットしたボードの大きさが箱の底にフィットしたため、その手間が省けた。防音室の壁は一面だけガラス風にしたと考えていたため、余っていたCDケースをハサミでカットし、扉の切り込みを入れて床に接着させた。このようにして、壁と床の貼り付け作業を行った。中央部の壁を箱の底面に挿し込んだことで、この壁を掴んで箱全体を持ち上げてもびくともしないほど頑丈なつくりにすることができた。



【画像1】完成した模型

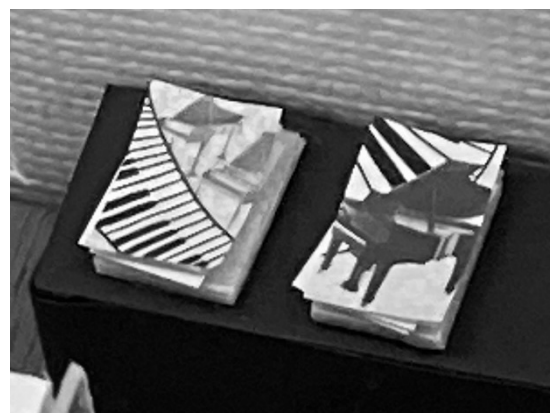
続いて展示資料のうち、唯一の実物を考えていたグランドピアノの制作を行った。インターネット上に、紙で組み立てる簡易的なピアノの作り方と台紙が載っていたため、一度コピー用紙で試作品を作り、それをもとに黒い厚紙で制作した。屋根を支える突上棒と3本の脚柱は、ポスターカラーで黒く塗った棒付きキャンディの棒を使用した。響板の部分は金色の折り紙をカットして貼り付け、鍵盤はインターネット上の画像を縮小コピーして貼り付けた。

以上の作業まで進めた後は図録との並行作業となった（「4. 図録とポスターの制作」を参照）。図録の制作にあたり、時間的猶予の関係から展示室内の解説パネルを別で制作することが困難になり、図録の解説を転用させることとした。図録の解説の制作、展示室内の壁に配置する解説パネルの数の計算、どの画像を展示台に配置するかを同時に行っていたため、かなり頭を使う作業であった。壁に配置する解説パネルとして、図録を縮小コピーした紙を直貼りすると立体感がなくなってしまうように感じたため、納豆のパックをカットして解説パネルの台紙とした。図録の解説部分が完成したのち、Wordファイルに挿入して縮小印刷を行い、カットしてパックに貼り付け、壁に配置した。展示台上の資料も同様に、縮小印刷をかけた画像を貼り付けした（【画像2】を参照）。通路に配置した植物や椅子はエコクラフトで作成し、シアタールームのモニターと展示台はエチレンボードと厚紙で作成した。展示室に入ってすぐの壁にポスターを配置したいと思い、縮小コピーしたものを貼り付けた。その際に縮尺を誤ってコピーしてしまったものも、捨てずに有効利用できないか検討した結果、展示室の出口付近に追加で作成した展示台にポスターをカットして貼り付け、パンフレットにリメイクして使用した（【画像3】を参照）。

模型制作全体を振り返り、ある程度の妥協を行ったものの、私の中でかなり満足のいくものを作成できたように感じている。CDケースや棒付きキャンディの棒、納豆のパックなど、身の回りにあるものを利用して費用を安く抑えることができたうえ（今更ながら制作費はすべて自己負担）、失敗してごみになる寸前のものを再利用したことで、より完成度の高い模型を作ることができたことは何よりの収穫となった。



【画像2】壁に貼り付けた解説パネル

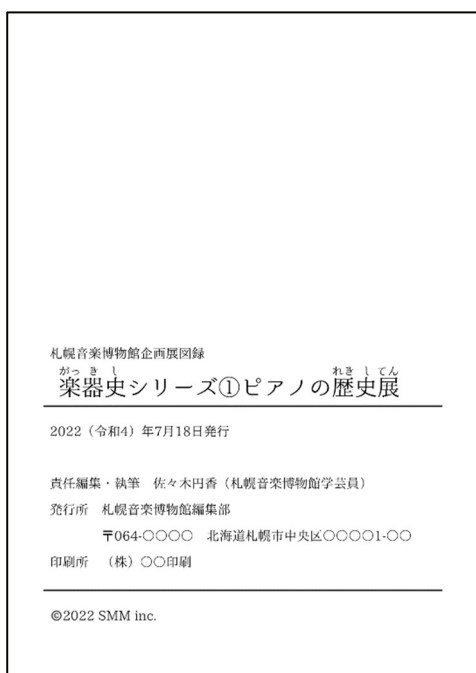


【画像3】パンフレット

4. 図録とポスターの制作

先輩方の図録を拝見した際、ほとんどの方がWordなどで作成しているように見受けられた。限られたフォントやアートの中ではどうしても「素人が作った感」が否めないクオリティになるように感じ、現実性が求められるこの課題において、私が博物館の来館者の立場になって考えた時に「読みたい」と思える図録を作成したいと思い、より手の込んだデザインが可能なペイントソフトでの作成を決意した。背景デザインに文字を挿入したテンプレートを作成し、複製してテキストを埋め込んでいった。背景デザインはパステルカラーを使用し、明るい印象をもたせた。また、それぞれの見出しの下には五線譜を引き、フォントはピアノのクラシック感や美しさを表現できるものを選んだ(【画像5】を参照)。なお、展示解説のページは章ごとに背景の色を変更している。

展示解説の文章を作成するにあたり、大学の図書館で5冊ほど参考文献を借り、文献中の画像も拝借した。また、実際に行われた企画展の図録を見て体裁の参考にしたかったため、学芸員課程実習室で先生から見せていただいた図録のほか、図書館閉架の図録も参照し、凡例や奥付などの体裁を確定させた。実際の企画展の図録を参考にすることで、構成や体裁をより本物に近づけることができるため、図録制作の際はぜひ実物を参照していただきたい。私も実際に図録を参照したことで、奥付にコピーライトの表記を追加し、より本物らしくすることができた(【画像4】を参照)。また、図録のみでもどのような展示が行われていたのかがわかるようにしたいと考え、模型完成後にスマートフォンを箱の中に入れて撮影を行い、展示室内から撮った写真風にして「本展のようす」と題したページを追加した(【画像5】を参照)。



【画像4】奥付



【画像5】「本展のようす」のページ

ポスターは参考文献の内容をまとめた図録用のメモが全ページ分完成したのちにすぐ取り掛かった。企画展の構想当初から、ピアノの鍵盤を描いて時系列順にピアノの画像を入れたと考えていたため、こちらも図録同様ペイントソフトで作成した。企画展の会期や博物館の名称などの設定は予め考えていたため、鍵盤の輪郭を描き、展示タイトルの文字を挿入したのち、企画展の情報を載せるスペースを下部に確保して文字をすべて挿入した。インターネット上の企画展ポスターを参考にして、博物館をはじめ各種SNSのURLとQRコードを作成し、それから背景に色を乗せ(図録の章ごとの背景色とリンクさせ、グラデーションにした)、鍵盤をひとつひとつ描いたのちにピアノの画像を挿入して配置した。QRコードはインターネット上で架空のURLでも作成できるサイトがあり、よりリアリティが出るためお勧めしたい。ピアノの画像は、ソフトに取り込んだのちに余分な箇所を手動で削除した。元々ペイントソフトは使い慣れていたが、文字のレイアウトの微調整に時間をとられ、ポスターの制作には3時間を要した(【画像6】を参照)。

楽器史シリーズ
ピアノの
歴史展

2022
7月23日(土) ▶ 9月18日(日)
※会期は予告なく変更になる場合がございます。

会場 札幌音楽博物館特別展示室
時間 9:30~17:30 (最終入場17:00)
休館日 毎週水曜日
入館料 一般500円 大学生400円
高校生以下無料
主催 札幌音楽博物館

札幌音楽博物館 〒064-0000
北海道札幌市中央区〇〇〇〇1-〇〇
TEL 011-〇〇〇-〇〇42
FAX 011-〇〇〇-〇〇49

Twitter
https://twitter.com/smmuseum
Facebook
https://www.facebook.com/smmuseum/

URL <https://www.smm.go.jp>

【画像6】実際に制作した企画展のポスター

図録とポスターの制作を改めて振り返り、デザイン自体には私の中で非常に満足のものに仕上げることができたように思う。私は元々手先が器用ではなかったため、ミニミュージアムの制作当初から、3次元で制作する模型は妥協を考えつつ、その分2次元のペイントソフトで制作する図録とポスターは納得のいく出来にしようと考えていた。結果として、当初予想していたものよりも良いクオリティのデザインにすることができたが、内容面ではまだまだ改善の余地があったように思う。特に図録では、最大40ページまで認められていたものの、ページを余した状態での提出になってしまい、また解説自体も充実した内容ではなかったため、見かけ倒しで物理的にも内容的にも薄っぺらいものになってしまったことが心残りである。ポスターでは博物館のロゴを作成して左下に挿入したり、会期を記載した箇所の背景に五線譜と音符を描いて載せたりと様々な工夫をしていたが、細かなデザインを凝る前にまずキャッチコピーを入れるべきだったと反省している。設定を考えすぎて肝心の部分が抜け落ちてしまうことが私自身よくあり、この課題の中でもその失敗が表れてしまった。また、TELとFAXにそれぞれ対応する番号の横揃えができていない状態になっており、確認を怠っていたと後悔している。

5. おわりに

ミニミュージアムの制作を終え、その過程を改めて振り返り、様々なことに気が付くことができた。

この課題は最初から最後まで自分ひとりで行うものであるため、当たり前だが計画性やクオリティなどはすべて自分ひとりの技量によって決まる。これは博物館経営論の課題であるが、それと同時に自分自身と向き合う課題でもあるように強く感じた。自分でテーマを設定し、どのような目標を立てたらよいか、どのようなレイアウトだとより誘導しやすいかを構想することは、他に意見を聞ける人がいない中で考えが偏らないかが非常に不安な作業であった。しかし、今まで学芸員課程の講義で学んできた知識と、私自身が来館者の立場になって考える視野を最大限生かしながら、おおむね納得のいく出来に仕上げることができた。構想段階で遅れはとってしまったが、模型・図録・ポスターの制作は比較的スムーズに進めることができたように感じている。むろん、時間をかければかけるほど更に内容を詰めることができたことは否めないが、自分の技量と時間を考慮し、「良い意味で」妥協することができたという点においては良かったように思う。また、この課題は自分の頭の中で考えていることを第三者にわかりやすく簡潔に説明することを鍛える機会にもなったと感じている。私はゼミの一環や趣味として文芸創作を行っているため、第三者に伝えることを意識した文章を考えることができて非常に良かったと強く感じている。

ミニミュージアムの制作は文字通り「集大成」の課題であり、これまで以上の知識と作業量が要求される。しかし、この課題を乗り越えた時の達成感や成長はそれ相応のレベルであった。非常に貴重で有意義な経験をさせていただき、制作を終えてかなり自信がついたように思う。これらの収穫を胸に、今後の学生生活や社会人生活、また人生に活かしていきたい。

博物館経営論 ミニミュージアム制作を終えて

人文学部日本文化学科 3年 神野 光

1. はじめに

学芸員課程全体を通じて博物館経営論におけるミニミュージアム制作というのは、ビッグイベントの1つである。というのも展示内容の構想・構成、発泡スチロールを使った模型の製作、そして図録やポスターの製作を全て自分だけでこなすためであり、まさに学芸員課程で学んだことの集大成の場と言っても過言ではない。

製作に取り掛かる前に諸先輩方の作品を見る機会があるのだが、後輩へのアドバイスのように最も多く上がっていたのが、時間的制約に関するものである。そのため正直なところ、わずか1学期の間に完成させることは可能なのだろうか、という一抹の不安もあった。そのため私は出来る限り早い段階から取り掛かることを強く意識した。

当レポートではミニミュージアム制作にあたって工夫した点、反省点を踏まえながら私自身が学び得たことを述べたい。

2. ミニミュージアムの構想

私が制作したミュージアムは、美深町仁宇布地区を題材としたものである。折角これだけのものをやるなら卒業論文と絡ませた方がいいものが出来上がるのではないかという思いが私の中であり、テーマは私が卒業論文として考えていた「美深町の郷土史」に関するものにしようと考えた。

このテーマで行こうという確信を得たのは、先輩方のアドバイスが大きい。ミニミュージアムの構想を練るにあたり、「趣味に走った方が楽しく作業できる」「ミュージアムのテーマは自分がもともと興味や知識のある分野にするべき」といったアドバイスは私のなかで大きな参考になった。実際問題、製作は長期戦であり、興味のあるものでないとモチベーションが続かないという問題点もある。

特に決定打となったのは手塚先生の助言である。ミニミュージアムは私の地元である美深町の郷土史で考えているといった旨の話を手塚先生に話したところ、仁宇布地区は村上春樹を代表する作品「羊をめぐる冒険」の舞台であると言われている、といった話に発展し、美深町と文学をテーマとした博物館がいいのではないかと、といった助言を頂いた。この助言は私の背中を押す大きな材料となった。実際村上春樹ファンの中で仁宇布地区は「羊をめぐる冒険」の舞台ではないかとささやかれているほか、トロッコ王国のような豊かな自然環境を生かしたスポットなどがあり、大変魅力のある地区である。その結果、文学、歴史、自然の3つの観点から仁宇布地区を掘り下げることを強く決意した。

3. 現状分析・ビジョン・コンセプトの設定

以下実際に図録に記載したことを基に述べていきたい。

現状分析

美深町は稚内市と旭川市のほぼ中間に位置し、町内には道内屈指の大河天塩川が流れており、周囲を山々に囲われた農業のまちである。ジャガイモやカボチャ、アスパラなどの農産物が特産物として挙げられ、その美味しさには定評がある。さらに同町は村上春樹の著書「羊をめぐる冒険」の舞台なのではないかと言われており、“ハルキスト”にとっては聖地として知られている。また町内には平成の水百選に選ばれた「仁宇布の冷水と十六滝」があるほか、生きた化石とも呼ばれるチョウザメを飼育している「チョウザメ館」、晴れた日にはオホーツク海や利尻富士を見渡せる標高 1,129m の「函岳」など名所が数多くある。

そんな美深町であるが、例にもれず少子高齢化、過疎化が顕著に進行している。人口は昭和 30 年代に 14,000 人台が続いたものの、そこから減少の一途を辿り、2022 年 4 月末現在で 3,928 人となっている。美深町過疎地域持続的発展市町村計画（令和 3 年～令和 7 年）によれば「出生率の低下や若年層の減少が高齢化率を押し上げ、農村地域の高齢化はより一層深刻化してきている」。加えて町内の商店街も年々閉店する店舗が増え、かつてのような賑わいが失われつつあるのが現状問題として挙げられる。

さらに美深町という知名度について、全道的にみるとお世辞にも高いとは言えないという現状がある。当企画展の立案者で同町出身である神野光によれば「隣町の名寄という地名を知っている人は多いが、美深という地名を知らない人が多い」という。仮に美深という地名を分かってくれても、美瑛町と勘違いしてる人も少なくない。本当は美深町出身と答えたいが、なかなか分かってくれる人がいないという現状がある。

少子高齢化、過疎化という問題に加え、見どころが多いにも関わらず知名度が低いという問題を抱えた美深町において、その町の持つ魅力のアピールの場を設けることは大変に重要なことであるように思われる。

現状分析では美深町の現状について触れ、その際に町が策定した美深町過疎地域持続的発展市町村計画を参考にした。加えて美深町の知名度に関して、私の実体験として知名度がお世辞にも高いとは言えないというのがあり、この展示を通じて少しでも美深町に興味・関心を抱いてもらいたいという思いも相俟って、何時しかこのような長文となってしまった。

ビジョン（短期目標）

- ・美深についての理解を深めてもらう。
- ・美深に関して全く知らない人は、美深という地名だけでも知ってもらい、具体的にどのような土地柄なのか理解してもらう。
- ・既に美深知っている人に関して、美深は魅力にあふれた土地柄であることを再認識、もしくは気付いてもらう。
- ・この展示を通じて、仁宇布地区に秘められた魅力を多くの人に知ってもらう。

上記の現状分析を踏まえて、短期目標では美深町について理解を深めてもらえるようなビジョンを設定した。

コンセプト（長期展望）

- ・実際に美深町（当博物館以外）に足を運んでもらう。
- ・美深を好きになってもらう。
- ・美深に移住・定住してもらう。
- ・美深と美瑛を勘違いする人を減らす。
- ・環境問題、少子高齢化、過疎化など、地域の現状とその問題点について認識してもらい、どうすればよいか具体的解決策を見出す。
- ・地域活性化の材料として、美深の魅力の情報発信基地としての役割を期待する。
- ・博物館を核としたまちづくりの契機と捉え、全国に数ある郷土資料館の中でもモデルとなるような事例とする。

コンセプトを設定する際に意識したのは、町がどう変化するかである。長い目で見たときに博物館での展示を通じて町の姿がどう変わるか、どのように変化して欲しいかを考慮に入れ、長期展望を策定した。

4. 図録・ポスター

図録は5月のゴールデンウィークごろから製作を始めた。これを初めの方に行ったのは、何を展示するのかを明確にするためである。私にとって特に困難だったのは、資料が多岐に及ぶことである。展示は大きく自然、歴史、文学の3つの分野に分かれて構成されているのだが、そこからさらに細分化されているため、扱う資料数がかなり多くなってしまった。そのため目録には記載されているがスペースの都合上、やむを得ず模型製作をあきらめた資料も一定数存在する。以下にその展示構成を示したい。

プロローグ
第1章 Nature ～「にうぶの自然」～
第1節 「～全身で感じよう～ にうぶの冷水と十六滝」
第2節 「～目で見て～松山湿原の植物たち」
第3節 「～触って比べて～ にうぶの木々たち」
第2章 History ～「にうぶ歴史物語」～
第1節 「明治以前のにうぶ」
第2節 「明治・大正・昭和（戦前）のにうぶ」
第3節 「昭和（戦後）のにうぶ」
第4節 「現在（平成・令和）のにうぶ」
第3章 Literature ～「にうぶと“ハルキスト”」～
第1節 「村上春樹とにうぶ」
第2節 「羊とにうぶ」
第3節 「ハルキストとにうぶ」
エピローグ

第1章では、松山湿原や仁宇布の冷水など、仁宇布地区の自然について図版やパネルなどを用いて紹介を行った。見どころはプロジェクションマッピングを駆使して再現される雨霧の滝や、仁宇布の森に生息する特定外来生物のアメリカザリガニやウチダザリガニの水槽、エゾサンショウウオの水槽である。仁宇布の自然に興味を持ってもらうことだけでなく、外来生物という社会問題にも関心を抱いてもらうことを企図してこのような水槽を設置した。自然に関する資料は北海道における植物、動物に関する本あるいは北海道立総合研究機構森林研究本部林産試験場のwebサイトなどを基に収集を行った。

第2章では仁宇布地区の歴史について、美幸線にまつわるモノを展示したほか、図や写真などを用いて紹介した。特に見どころは仁宇布駅通所の再現である。しかしながら歴史に関する資料の収集は特に困難を極めた。展示パネルや解説文の多くは、美深町史や美深町郷土研究会編纂の「美深ふるさと散歩」といった資料に依拠したものである。今は無き仁宇布駅通所の内部を模型で再現したかったのだが、これに関する資料は乏しく大いに苦慮した。そのため私は仁宇布駅通所を知る人物である蓮沼優裕氏に取材をし、尚且つ実際に仁宇布地区に足を運ぶことを企図した。実際の現地での取材に関しては、項目を改めてその詳細を述べたい。

第3章では村上春樹と縁があるという点から、仁宇布地区と“ハルキスト”のつながりについて、村上春樹作品「羊をめぐる冒険」の視点より紹介を行った。

またこのような展示構成を組んだ意図として、仁宇布地区の秘めるポテンシャルが高い

ことを少しでも町内外の人に伝えるためである。自然は勿論のこと、歴史や村上春樹という観点からも語れる地区は道内を探しても多くはないことから、このような構成となった。

目録を製作するにあたり、博物館展示論や博物館実習Ⅲで培い、得た知識が非常に役に立った。特に実習Ⅲでは展示品リストを作成する機会があり、そこで得たスキルを活かすことが出来たため、スムーズに取り組むことが可能であった。

また図録の印刷に関して、印刷の設定を上手く活用した。図録は見開き印刷にすることによって、そのまま半分に折りたたんでクリアファイルに収納することが出来る。

またポスターは主にデザインソフトを活用して製作した。完成したものが、この【画像0 ポスター】である。ポスターに挿入されている写真は、私が実際に現地で取材を行った際にたまたま上手く撮れたものである。太陽が雲の隙間から縫うようにして現れ、その光が大地に降り注ぐ様子がとても神々しいと感じており、個人的にはとても気に入っている。また開催日時や入場料、開催場所といった情報は盛り込むよう強く意識し、特に重要な情報ほど文字を大きくするようにして、ポスターを見た人に一目で伝わるような工夫を凝らした。しかしその一方で、この写真からは具体的に何が展示されているかを想起することが困難だったのではないかと反省している。



【画像0 ポスター】

5. 現地調査

実際に仁宇布地区で現地調査を行ったのは6月下旬のことである。現地で取材を行うにあたって、本来は事前に当日は何を質問するのか、具体的なリストを用意して先方に連絡を入れておくべきであった。しかし私は仁宇布駅通所についての話を聞きたい、と軽い気持ちで連絡したぐらいであり、肝心なリストを全く用意していなかった。そのためこれはミニミュージアム制作における私の大きな反省点であった。

当日はおよそ1時間から1時間半程度取材を行った。その際に用意したのはボイスレコーダー、筆記用具、カメラである。ボイスレコーダーはインタビューの内容を音声記録として残すためであり、了承を得たうえで使用した。

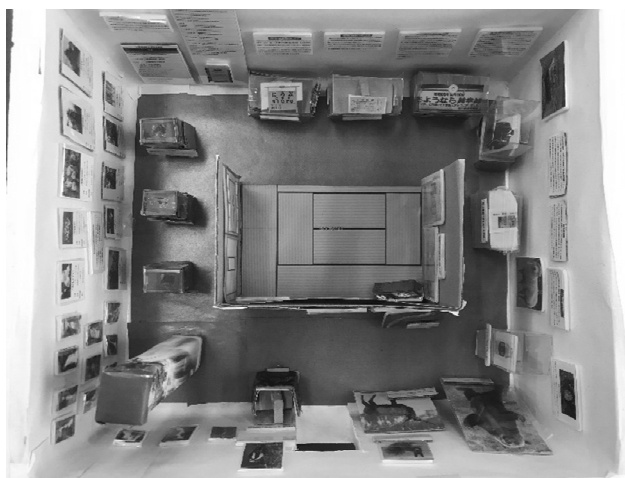
蓮沼氏から聞き取った内容は主に以下に記す3点のことである。1点目は仁宇布駅通所に関すること、2点目は仁宇布駅通所があったころの生活・暮らし、3点目は仁宇布小中学校の山村留学制度である。特に仁宇布駅通所に関して、貴重なお話だけでなく、現存し

ていた当時の写真をはじめ見取図や外観図といった資料も提供頂いた。聞き取った内容はコラムとして図録内に反映させたほか、展示内にも見取図の一部をコピーしたものを展示物として組み込ませた。

この現地調査から私が学んだのは事前準備の重要性である。先にも述べたように、本来は何を質問するのか、事前に相手に連絡を入れておく必要がある。当日いきなり質問されても準備ができていなかったりすることもあるため、事前に何を質問するのか通知しておけば間違いなくスムーズに事が進む。こちらの不手際にも関わらず幸いにも当日は蓮沼氏に上手く対応して頂いた。そのため蓮沼氏には全く頭が上がらない。

6. 模型製作

模型製作は図録が仮完成した6月の下旬ごろから取り掛かった。どうも本来は底上げというものを模型に取り掛かる前に行うべきであるようだが、私は知らずにそのまま発泡スチロールを使用した。また底上げをしなかったことによる影響は特別無かったため、底上げは任意で行うべきという認識で良いと考える。また完成した模型の全容は【画像1】のとおりである。



【画像1 模型の全容】

私は最初に壁紙を貼る作業を行った。壁紙は、背景フリー素材として頒布されているものを印刷して使用した。貼り付けには両面テープを多く使用したのだが、一部のりを使用した箇所があり、そうした箇所は時間の経過とともに浮いてしまった。そのため可能な限り両面テープを使用することを推奨したい。壁紙を一通り貼り終えたその次は、入り口兼出口となる場所を定規等で定め、カッターナイフでくり抜いた。

続いて今回のメイン展示となる駅通所内部となる箱を作成した。その箱には段ボールを使用した。素材としては、薄手の段ボールだと加工が非常に容易である。



【画像2 アンバランスな切符】

最も困難だったのは縮尺である。【画像2】を見てもらうと分かるように、中央に展示されている切符のサイズが左に展示されている駅名標とほぼ同じぐらいのサイズになってしまっている。切符の左右の展示物のサイズ感からすると、切符はそれらよりも小さくするべきであったが、計算を怠ったために非常にアンバランスな印象を与えてしまった。

このようなことを未然に防ぐためには同じようなサイズ感のものを揃えること、もしくは事前に縮尺を計算しておくことが必要である。また私がこうなってしまった要因として、先にショーケースを作ってしまったことが挙げられる。そのショーケースありきで展示品を用意してしまったために、このように不釣り合いな恰好となってしまった。

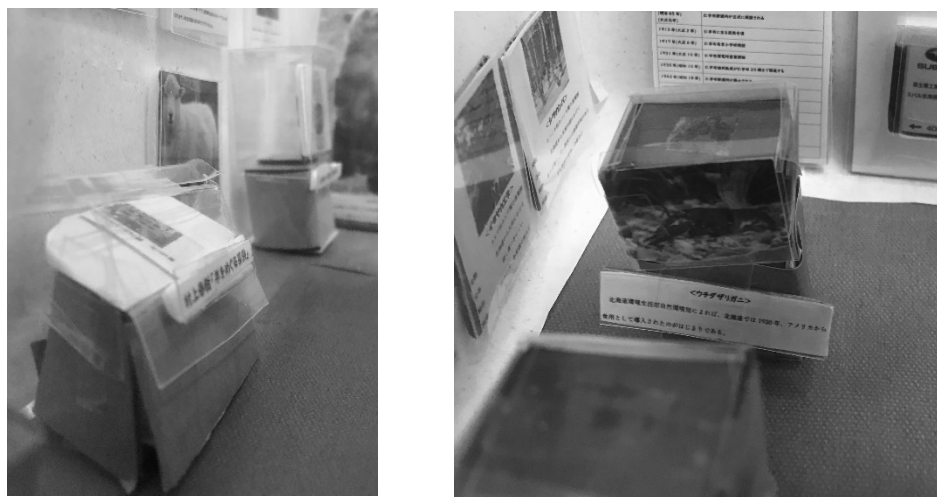
またこの展示模型で私が特に力を入れたのは展示パネルと解説文、ショーケース、仁宇布駅通所内部の3点である。



【画像3 パネルと解説文】

まず展示パネルと解説文について詳細に述べたい。私はワードを利用し作成した【画像3 パネルと解説文】。印刷する際に「16 ページ/枚」に設定するとちょうど良いサイズ感になる。印刷したものは納豆のパックの蓋に貼り合わせることで、実際の展示パネルのよ

うな質感が出た。また反省点は大きく2点ある。1つ目は展示パネルが多すぎるとかえって雑多な印象を与えるため、数を絞って展示を行うべきであったという点である。2つ目はパネルの上辺の位置がバラバラになってしまったという点が挙げられる。本来はパネルを設置する前に位置を定める必要がある。しかしそこまで配慮が至らず、見栄えの美しさも考慮して横一線に統一して並べるべきであった。



【画像4 ショーケースと水槽】

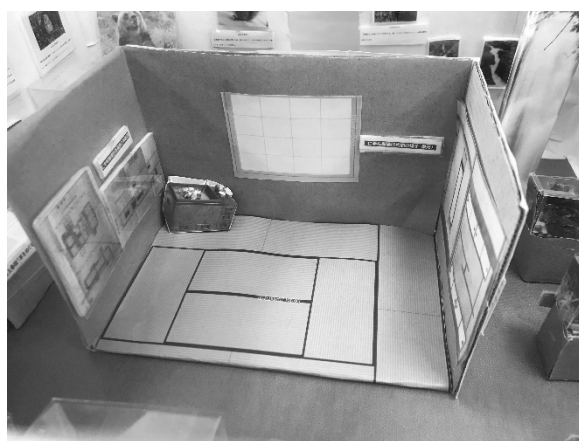
続いてショーケースと水槽について述べたい【画像4 ショーケースと水槽】。ショーケースは主に美幸線に関する資料、水槽は特定外来生物であるザリガニを展示するために使用した。ショーケースの土台部分には段ボール、ケースの透明な部分にはコンビニ弁当の蓋の部分を使用した。蓋は薄いプラスチックの素材のため、加工が容易である。特に苦労したのはケースの面と面の部分をつなぎ合わせることである。1つのショーケースを作成するために、約3×4cm四方のパネル4枚と約3×2cm四方のパネル2枚を段ボール、プラスチックの素材でそれぞれ用意した。それらを箱になるようにつなぎ合わせるのだが、その作業のためにテープを多く使用した。その際のテープの跡が顕著に出てきてしまったことが反省点として挙げられる。

最後に仁宇布駅通所内部について述べたい。実際に取材して得た駅通所の平面図を基に、数ある客室のうちの一室を再現した【画像5 仁宇布駅通所の客室】。完全再現とはいかないまでも畳や床の間といった空間を通して、かつての客室の雰囲気だけでも醸し出すことが出来たのではないかと自負している。

模型製作全体を通じて私が学んだことは、展示の工夫についてである。ただモノを陳列するだけではあまりにも芸が無く、来館者がいてはじめて博物館が成り立つと考える。そのためどうしたら博物館に興味関心を抱いてもらえるか、また、来たいと思わせるか

という観点に基づき、展示の構成や展示物の見せ方など、展示に工夫を入れることを意識した。特に私の場合、強く意識したのはどうしたら郷土に興味を持ってもらえるかについてである。展示を工夫することで少しでも郷土に対して関心を持ってもらうことを狙った。その表れとして、自然、歴史、文学の三段構成、メイン展示の仁宇布駅通所がある。

7. おわりに



【画像5 仁宇布駅通所の客室】

模型製作全体を通じた学んだことは様々あるが、特に痛感した計画性の重要性について詳しく述べたい。3年生になると普通の授業に加え、就活も始まってくるのでどうしても忙しくなる。またミニミュージアムの提出時期と他教科のレポートの提出時期が重なることもあるため、精神的にも余裕を持たせるために今月はここまで進めるというスケジュールを立てて、なるべく早いうちに取り掛かることを強く勧めたい。私自身の場合、かなり早い時期に取り掛かり、比較的周囲に比べて余裕があったという自負がある。そのため私が実践したスケジュールをもとに理想的な案を示してみたい。4月の段階で何を題材とした博物館とするかということを構想として練り固め、5月のゴールデンウィーク期間から参考文献を漁って少しずつでもいいので図録の作成に取り掛かる。そして具体的な展示物のリストとともに5月末までに完成まで進めることができれば、6月はいよいよ本体の製作に取り掛かる時期となる。本体製作は6月末をめどに完成まで持ち込めるとよい。そして7月にはポスター制作、残った時間は最終調整ぐらいのつもりであれば、他の科目のテストやレポートに追われることなく精神的余裕が生まれると思う。

またなるべく自分自身が興味・関心のあることをテーマとして取り上げるべきである。というのも、やる気のモチベーションが大きく異なるからである。ミニミュージアム製作は長期戦であるため、取り組んでいて楽しいと思えた先に個性あふれる作品が完成するはずである。その際に注意したいのが独善的なモノにならないようにすることである。基本

は独りで作業するため、没頭して自分の世界に入ってしまったときに制止してくれるブレーキ的な役割が存在しない。作業時には常にこのことを心に留めて頂きたい。

最後になってしまったが、ここまで仕上げる事ができたのは蓮沼裕優氏のお力添えのおかげである。そのため蓮沼氏には多大なる感謝を申し上げたい。この作品について記述した本レポートが刊行されたら、真っ先に蓮沼氏に献呈するつもりである。

博物館経営論にて学芸員課程の集大成を

経営学部経営情報学科 3年 松山 陽奈子

1. はじめに

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、高校の卒業式や大学の入学式が中止、説明会も延期、講義は全てオンラインになるなど、同級生の顔も校舎の中も知らないまま、何もかもが曖昧にスタートした一年生。そのような中唯一、学芸員課程の講義のみ対面であったことが、課程へのモチベーションを上げていたように思う。学芸員を目指していたわけではないため、なぜ履修したのか尋ねられた際は、きまって開拓の村に行きたかったからと答えたが（もちろん本音である）、課程の経験を重ねるに伴い、自分は大学でコレをやり遂げたというコトが欲しかったのだと気づいた。学芸員課程の課題は得意を十分に活かせる機会が多く、自信がついたり、自分の好きなことを発見したり、幾度かのレポート制作が他の講義課題で役立つなど、思いのほか充実した期間になった。

本課題は、オリジナルの展示企画を基に図録とポスター、展示模型であるミニミュージアムを制作することによって実際に形にすることである。提出日が他の試験やレポートと重なるので、いかに計画的なスケジュールを組むかということも完成度と同様、重要ポイントである。

2. ミニミュージアムの構想

展示テーマ選びにおいて最も優先したのは、小さな箱の中で上手く表現できるのか、見栄えが良いかということであった。写真や書籍が展示物のメインであるものは、ミニミュージアムにすると小さすぎて映えないと考え、大きなものをキーワードに案をめぐらす日々。また長期の課題であるため、自身のテンションが上がるものであることも優先事項であった。

そうして辿りついた展示テーマは「江戸時代の屋台」。大好きな江戸の町民の暮らしと食を掛け合わせた、現代にもつながる内容である。企画展名は「すし そば 屋台～外食産業と日本食の誕生」。副題の前に単語を三連発したのは、人の目を引き、興味を持ってもらうための仕掛けである。現代の感覚からすると豪勢に感じられるすしや天ぷらも、江戸時代では庶民の味であった。この企画展は、外食における食事について深く関心を持ってもらうことを目的として、屋台文化が発展し、現在の日本料理のおおもとができた 260 年続いたこの時代をたどる展示会とする。

3. 展示趣旨～コンセプトの設定

展示趣旨

本企画展「夏の企画展 すし そば 屋台～外食産業と日本食の誕生」は、江戸の屋台における食空間にヒントや面白さを発見して、幸せな食事とは何かを考えてもらうことを目的としている。そのため、展示品である屋台や料理の模型は、実際のサイズであることにこだわり、当時の生活を体感できる仕様とした。本展示を開催することで、当時の様子を視覚化するとともに、現代において江戸を知ることの意味を考える場を提供できればと思っている。

現状分析

ハンバーガーや牛丼、フライドチキンなど、現代の日本にはファストフードがあふれている。提供が速く安価で短時間で食することができる手軽さが魅力であるが、一方で多くが冷凍で且つ使用されている添加物や食材の詳細が分からず、足枷な要素を含んでいることは否めない。食文化はその時代の状況を踏まえて生み出されるものであり、現代のファストフード文化が支持・消費されているのに理由があることは想像できる。しかし、これだけ豊富な食材が身の回りに出回っている飽食の時代であるからこそ、現代人は本当に幸せな食事について考える必要があるのではないか。

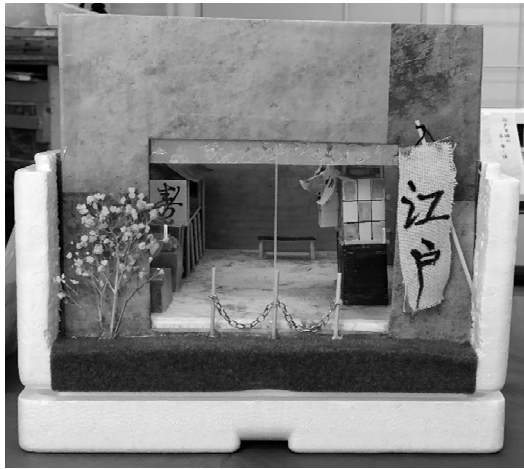
ビジョン（理想）

- ・「本当に幸せな食事とは何か」考えてもらうことを目指す。
- ・「知って食べる」「楽しく食べる」という欲求の向上に貢献。
- ・江戸の屋台における食空間に、学ぶべきヒントや驚愕、共感できる面白さを発見してほしい。

コンセプト（実現の仕方）

- ・日本の外食産業の起源でもある江戸時代のファストフード文化の理解を通じて、前者と現代のファストフード文化が似て非なるものであることを認識してもらう。
- ・外食産業と同時に、寿司や蕎麦といった日本食は、江戸時代の屋台文化から発展していったという歴史を把握してもらい、江戸時代の屋台文化は今日の日本食の根幹をなすものであることを常識化する。

4. 模型製作



出入口正面図



全体の上面図(左出入口)

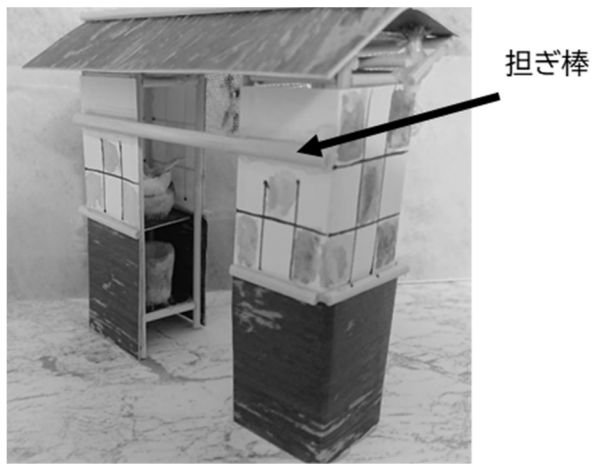
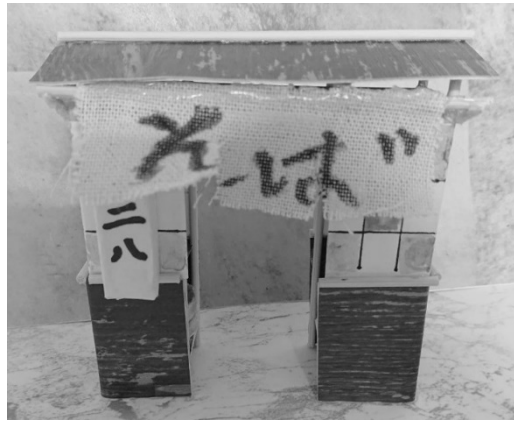
ミニミュージアム製作では、はじめに達成すべき点を設定した。実際の雰囲気や気配を感じられるリアルさと、ミニミュージアムの中の小道具まで細かく観察できることの二点である。模型をおさめる発泡スチロールの箱の高さは低い。壁と展示物が同じ高さでは実際の雰囲気を感じづらく、箱の高さとのバランスを見て展示物を小さくすると見づらくなり、ミニチュア模型の意味を成せない。また、発泡スチロールの面は凹凸が激しく、色のをせれば汚く見えてしまう。ならば、箱の面を利用しないと決めた。100均で購入したスチロールの板を壁、床として、箱の中に入れた。壁のサイズ合わせや床の水平の取り方(底上げで解消)が困難だった。また、現実世界では壁と床は同じ柄ではないことを思い出し、ミニミュージアムの壁と床に貼る100均のリメイクシートも柄を変えた。そして、出入口は大きくカットすることで中を見やすくし、プラ板をはめることで自動ドアを演出した。他の側面に作った窓も横長にすることで、上からだけでない視点を確保した。

展示物においては、まず担ぎ屋台のバランスを図るため、段ボールでシュミレーション模型を製作した。その効果は大きく、実際模型はシュミレーションの半分の大きさにしたり、素材を段ボールから厚紙に変更するなど、完成度を高める大事なステップとなった。また、屋根には真新しい木目調ではなく古い木目調のシートを、窓には和紙を採用することで、江戸当時の気配を演出した。さらに、屋台の中の小物にもリアルさを求めて紙粘土を駆使し、米やネタといった食べ物は美味しそうに見えるよう、絵の具の色作りに注力した。

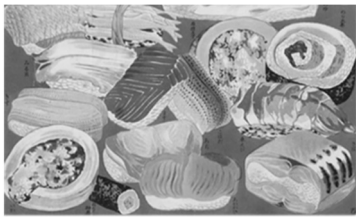
江戸時代のすし屋台



江戸時代のそば屋台



江戸時代のすしはゲンコツ大



再↓現



出入口の上にも浮世絵を展示



横窓から見た景色

5. ポスター・図録

ポスター

ポスターという印刷物は、そこに存在すること自体で不特定多数の人の目に触れ、情報を伝えられる視覚媒体である。そのため、事細やかに文章で説明するのは不要であり、文字ではなくビジュアルで伝えることをメインとする。本課題のポスターでは縦書きを採用したので、人の視線は右上から左下と上下に読んでいくNパターンという法則が当てはまる。見てほしい情報ほど右上に配置して、目線の動きに文章の流れを合わせることで、理解を促す意図である。情報をスムーズに伝えることに加え、重要視したのが印象に残るデザイン、即ち絵でイメージを持ってもらい、概要を把握してもらうこと。タイトルの「すし そば 屋台」は江戸時代の雰囲気に合わせて筆文字風にし、副題はタイトルと字体は異なるが、次に目立つように赤背景の白文字とした。赤色も、原色ではなく和の伝統色を使用した。メインには、ミニミュージアム内にも展示されている浮世絵『縞揃女弁慶 松の鮎』を構え、遠くからでもわかり、且つ一瞬でどのような分野の展示かがわかるようにした。

大江戸博物館 桜小ホール

夏の企画展

すし そば 屋台

外食産業の誕生

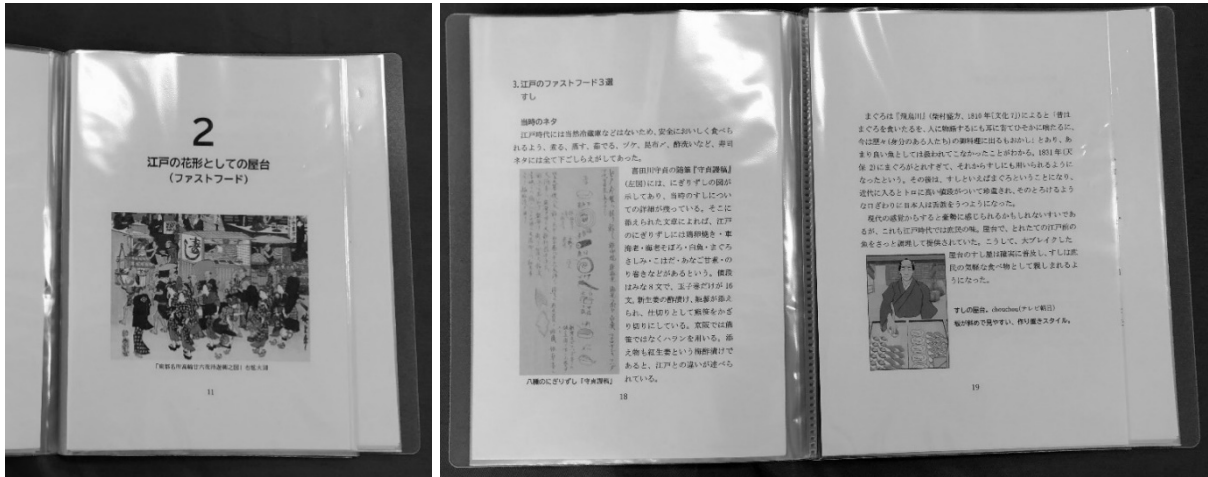
休館日
Closing day
1.8.15

2022 7/21 thu. → 2022 9/18 sun.
午前9時30分～午後5時30分(最終入館:午後5時)

本企画展ポスター

図録

図録作成では、とにかく見やすさにこだわり、読んでもらうための工夫を施した。タイトルや文字の大きさ、色使い等、本物の本のように見えることを目標とした。章と前後の区別が分かりやすいよう、章ごとに表紙を挿入した点もポイントである。また、いくつかの図には、キャプションだけでなく一言コメントのような短い説明を入れた。



本図録の中身一部

6. おわりに

本課題は、模型、ポスター、図録作成とウエイトの高いものであったが、完成してみれば非常に面白く、学芸員課程を履修していなければしていなかった経験であったと言える。大学入学前から歴史に興味があり、文章を書くことも好きだったが、好きなことではなく就活、ビジネスに直結する経営学部を選択した。結果、経営学部に入ったことに満足しているし、さらに課程で好きなことを極められたと思っている。博物館経営論では経営視点も必要なので、関係ないと思っていた本業と課程が融合しており、非常にやる気がわいたのを覚えている。といっても、図録が完成したのは提出日の前日深夜であったが（ミニミュージアムとポスターは余裕をもって完成させていた）、将来仕事をする時にも、三点納得のいく仕上がりにできたこと、良い評価をもらえたことは、自信につながるはずである。卒業後も、大学で頑張ったこととして忘れることなく、社会人になった際の頑張りが効く原動力になるだろう。博物館経営論が、学芸員課程の集大成、ゴールを実感できる機会を与えてくれたと思っている。

後輩の皆さん。大学で何を経験したかの中身を大切にしながら、自信をもって何か成果を出すつもりで、制作に本気であたってみてください。本課題のテーマは自由なので、自分の好きなことに対して向上心を持って取り組む経験ができると思います。

1. はじめに

博物館経営論の授業では、最終課題として「ミニミュージアム」の作成を行った。これは学芸員課程の集大成ともいえる課題である。自由に企画展を考案した上で、展示会場を発泡スチロールの中に作成した模型、ポスター、図録の提出を求められた。

私はクリエイティブなことが好きなので楽しく作業を行うことができた一方で、毎日の授業や課題、サークルやアルバイト等をこなしながらこの課題を完成させることは楽ではなかった。何人もの先輩からアドバイスとして「早く作業を始めるべき」との声を受けたが、そのためには「構想を練っておくこと」が大事であると思う。

反省点を振り返るとともに、そこで得られた学びを述べていく。

2. ミニミュージアムの構想

テーマを考える際に重視したことは、自分が興味を持つことのできるテーマであるということと、博物館のテーマとして意味のあるものであるということであった。

父が妖怪オタクのため自宅に図鑑等の資料があることや、幼少期から妖怪の話をよく聞いてきたことから、まず妖怪の博物館を思いついた。構想を練っているうちに、妖怪の中にも日本人の生活が西洋化していくと現れようのないものがあることに気が付き、昔の日本人の日常生活と妖怪の密接な関係や、妖怪のありかたの変化を実感した。

私は日本文化の中でも特に民俗学や昔ながらの日本人の暮らし方にも興味があるので、キャラクター化して現在も親しまれる妖怪の力を借りて、忘れられようとしている昔ながらの日本人の生活を知ってもらいきっかけとなるミュージアムにしようと考え、「妖怪と住む日本の暮らし」というテーマを設定した。

また、私は「水木しげるの世界観」を大きなテーマとして卒業論文を制作することを考えている。彼がラバウルで兵隊として戦った壮絶な経験を経て、どのように「ゲゲゲの鬼太郎」をはじめとした作品の世界観を確立していったのかを明らかにしたい。卒業論文を書く上で、テーマの周辺知識が無ければいけないが、今回の制作によって日本人の生活と妖怪の関係や、鳥山石燕、水木しげるらのことを調べ、簡単な知識を得られたことは良い機会となった。私が妖怪のミニチュア作成の際参考にしたのは鳥山石燕の絵なのだが、水木しげるもまた石燕の絵を参考に妖怪のデザインをした。石燕は水木しげるの世界観に大きく影響を与えたといえるだろう。このミュージアム制作課題を通して、制作者である私自身も妖怪の世界の面白さをより感じる事ができたので、今後の卒論の資料集めがはかどるように思う。

3. 現状分析・ビジョン・コンセプトの設定

日本人は、生活の中の怪奇な現象を妖怪の仕業と考えてきた。また、生活の中のさまざまな教訓や戒めとなる妖怪もたくさん産み出した。妖怪は日本人の生活に密着しているものだったのである。

しかし、それらが住み着く昔ながらの日本家屋は時代の変化とともに減少していった。現在の日本の住宅全体で古民家と呼ぶことのできる建物の割合は今やたったの5%にも満たず、それらの約半分は空き家となっているという。(古民家は築50年以上の家屋を指すことが多いが、明確な定義はない。ここでは昭和25年以前に建てられた住宅を古民家としている)日本人が長い間営んできた暮らし方や、そこから生まれた妖怪という立派な日本文化が日本人に忘れられようとしているのである。

【ビジョン(短期目標)】

この展示を見ることで、まずは妖怪のおもしろさに興味をもってもらおう。そこを糸口として、古きよき日本家屋の素敵さや機能性、昔の日本人の生活や考え方、場所はどんなものだったのか、などを知ってもらおう。

ビジョンでは、妖怪のキャラクターとしての愛嬌や親しみやすさをきっかけに、それらが住み着いた日本の家の特徴や機能性を知り、親しみを持ってもらうことを展示の目標とした。

【コンセプト(長期目標)】

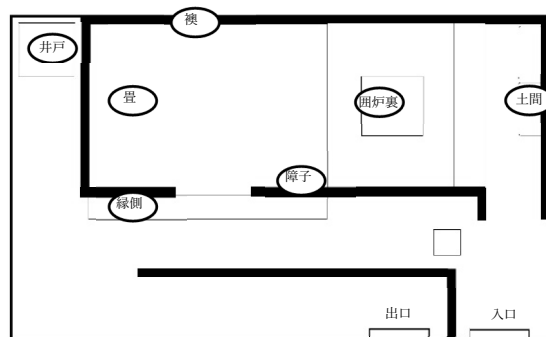
日本家屋、特に古民家の特徴を活かした建物を増やす。また、古民家の需要を上げ、空き家となっている古民家を減らす。

コンセプトでは、古民家の中につまった日本人の知恵や工夫を活かした建物を増やしたり、古民家の需要を上げて空き家となってしまう古民家を減らしたりすることを展示の目標とした。

4. 模型制作



【画像1：完成した展示模型全体】



【画像2：会場平面図】

妖怪が登場する企画展なので、壁の色は夕暮れの薄暗くなってきた時間をイメージしたものになっている。このような時間帯は、「逢魔ヶ時」(おうまがとき)と呼ばれ、妖怪が最も出現しやすい時間なのだという。

まず最初に人の大きさを決め、それを基準として展示物の大きさの縮尺におかしな部分がないように、気をつけて制作した。また、日本家屋の大きさと妖怪の大きさ、どちらの目安にもなるであろう「目目連」(もくもくれん)【画像3】を最初に作成し、それにあわせて家屋を作ってから妖怪を配置した。

畳をどのように作るか悩んだが、100均で売っていたいぐさの座布団を分解し、表面のいぐさを段ボールに張り付け、周りを同座布団に使用されていた布で囲む形で完成させた。畳に限らず、障子を木の枠に和紙を貼って作ったり、土間を粘土で作ったりと、展示物の多くを本物と同じような素材で制作できたのは良かった点である。

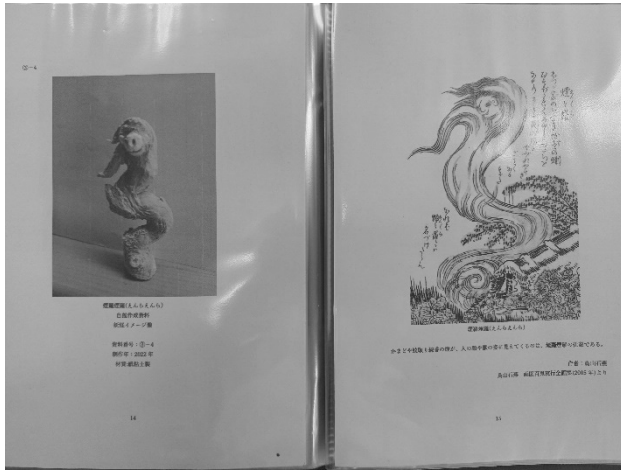
材料に関して、日本家屋は木でできている部分が多いため、割り箸を多用した。少し黒っぽく着色することで年季を感じさせる雰囲気になったと思う。しかし、割り箸は切断するのが思いのほか大変で、そのうえ場所によって太さが若干変わるため完成品に歪みが生じるので、素材としてはあまりお勧めしない。発泡スチロールなどに木目柄のテープ等を張り付けたほうが楽だったかもしれない。段ボールは加工しやすい上に強度があり、丸めて立てて支柱にしたり、表面だけを剥がして妖怪の腰巻に使ったりと、とても使い勝手が良かったので用意しておくとう便利である。

色むらや接着不足の部分もあるが、そういった作業の雑な部分も味になっており、結果的にこのテーマの雰囲気がでたと思う。とはいえ、左右で高さの異なる襖や接着剤のはみ出た障子、歪んだ畳などからは、雑な作業が見て取れる。作業行程をよく考えて、丁寧に作業を行えばもう少しミニミュージアムのクオリティを高めることができただろうと反省している。

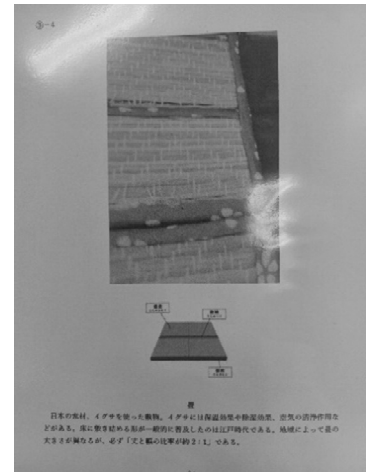


【画像3：本展示中の目目連】

模型作業の中盤で、ポスター【画像4】を作った。ポスターデザインが完成したとき、全課題の半分以上が形になったということで気持ちに余裕が生まれたように思う。



【画像5：実際の図録、煙羅煙羅(えんらえんら)】



【画像6：実際の図録、畳】

ロウソクの灯る薄暗い部屋の障子を背景に、どんな内容の展示なのか一目でわかる写真を配置した。宣伝材料なので、展示の雰囲気分かる暗い色合いながらも読みやすく楽しいデザインにした。ポスター左上には「畳、障子、襖…かつて日本人の生活には妖怪が密着していた。日本家屋に住み着くもののけたちが、あなたの帰りを待っている—」というメッセージが書かれている。これは少ない文章量でいかに展示に興味を持ってもらうか、インパクトを残すかという点を重要視して配置したもので、このポスターを見た人が不気味な展示の雰囲気を想像しながら惹きつけられることを狙いとした。

図録【画像5】【画像6】はミニミュージアムが完成してから、最後に取り組んだ。展示品の画像を載せるのだが、私の場合先にその展示品を作る必要があったからである。ミニチュア制作では、開始当初の計画どおりに作ろうとしても作業中に思いついたり、工夫したりして変更点が出てくることもあるので、最後につくるべきである。

あくまでもこのテーマの目的は、日本家屋を知ってもらうこと、思い出してもらうことなので、展示も解説も妖怪に注力しがちにならないよう常に気をつけながら伝えたいことを端的に文章にすることを心がけた。また、主に子どもが読みやすいように読みにくい漢字の名称にふりがなをふるだけでなく、日本の歴史に興味をもつ外国人もこの展示を楽しんでもらえるように、日本語での解説文の下に英語の翻訳を記載した。

畳や障子などについて調べると、それらの高い機能性に感心するとともに、電気やガスがない時代の昔の日本人の生活が見えてきて面白かった。

6. おわりに

ミニミュージアムの課題で学んだことは、作業を進める際には細かい行程に分けて進めるのがよいということである。細分化された行程の中で、すぐできそうなものから手を付けて少しでも作業が進めば、気が乗らない作業も終わらせる気力が湧いてくるかもしれない。私は模型制作が一番楽しくできそうだったので模型制作から始めたが、ポスターからでも図録からでも、イメージが固まったところから始めればよいし、気分に合わせて平行して作業を進めてもいいと思う。やり方は人それぞれだが、作業の楽しさがなによりの原動力になる。

そのためにも興味のあるテーマを設定することはとても大事だと感じたので、構想を練ることだけでも早く始めるべきである。ここが何も決まっていなかつても制作のやる気はおきない。反対に、テーマが具体的に見えてくればくるほど作業に取りかかりやすくなると思う。この課題の量に対して与えられる制作期間は十分であると思うが、忙しい大学生は毎日作業ができるわけではない上に、期間の長さゆえに後回しにしがちである。手をつけるころには提出期限までに十分な時間がとれないということにならないように、この課題を今後行うであろう学生には自分の好きなこと、面白いと思うことを明確化し、できればテーマの設定をしておくことを勧める。少なくとも私はこのテーマが決まると完成イメージがわき、早く形にしたいと思うことができた。構想を練るだけであれば道具はいらないし場所も選ばないので、忙しい毎日の中でも退屈な時間を有効に使って考えておくべきである。

私はこの課題の成果によって、自分の創造力、スケジュール管理能力、集中力などに自信を持つことができたと同時に、要領の悪さや大雑把さといった改善していくべき点も見えた。卒業までの学業や就職後の仕事の中でもこの経験を活かしていきたい。

2022 年度 博物館資料論 講評 『博物館資料としてのデジタル・アーカイブと活用』

北海学園大学講師 水崎 禎

博物館資料論で教えるべき/学ぶべきこと

日本の学芸員課程にて、初めて『博物館資料論』を担当したのが 2006 年度であるから、2022 年度は 17 年目となる。

2006 年度に授業計画を作成する際には、まず日本の学芸員課程省令科目と各科目間の関係を自分なりに整理した。その中で、『博物館資料論』という枠組みの中で私が教えるべきこと（学生の立場からすると学ぶべきこと）を検討し、日本の学芸員課程で必須とされている事項と、私自身がそれまでに学び、経験してきた事項を合わせた授業計画を作成した。私の経験からは、主にアメリカ合衆国での大学院の博物館学部で学んだこと、特に『Management of Cultural Collections (文化的所蔵品の管理)』および『Introduction to Preventive Conservation (予防的保存のイントロダクション)』*、米国内の博物館の実務に携わった経験を講義に取り入れた。

以後、学芸員課程および博物館を取り巻く状況を鑑み修正を施してきた。しかし、当初からの実感として持ち続けていることは、学生に伝えたいことが沢山あり、一学期間の講義では足りないという思いである。そんな中、必ず伝えなければならないこと、強調すべきことを思考し続けてきた。

その時々旬なトピックを取り入れることはしばしばであるが、『博物館資料論』の授業計画に大きな修正を施したのは 2012 年度の授業である。この年は学芸員課程の新課程が施行された年であり、新たに『博物館資料保存論』が加わった。それまでは、『博物館資料論』の中で如何に博物館資料の保存について盛り込むかに四苦八苦していた。先にも述べたが、ただでさえ一学期間の講義では足りないという思いの中、『博物館資料論』の中で資料保存の深いところまで言及するのは非常に困難であり、資料保存の何をどの様に簡潔に伝えるかは悩みの種でもあった。しかし、『博物館資料保存論』が加わったことにより、『博物館資料論』では、資料保存の最低限の考え方を伝え、『博物館資料保存論』の受講のための心構えを形成することを目的とした。

*『Introduction to Preventive Conservation (予防的保存のイントロダクション)』; コース名に「イントロダクション」とあるが、米国のコース・ナンバーの基準による 900 番台 (博士課程レベル) の科目である

デジタル・アーカイブの変化 ～「情報という資料」から「実物資料」へ～

「博物館資料は、その資料に関する情報が備わって、はじめて一人前の資料となる」ということを講義では常々述べてきた。その際、「資料」と「情報」の捉え方として、これま

での「資料」と「資料についての情報」という考え方から、「実物資料」と「情報という資料」という考え方へシフトすることを進めてきた。この件については学芸員課程の導入的科目である『博物館概論』でも、アメリカでの博物館資料の扱いに関する考え方の基本である、資料の「Physical Aspect（物理的側面）」と「Intellectual Aspect（情報＝知的側面）」で捉えることに言及している。

アーカイブ（文献資料）、は主に実物資料についての理解を助長するための情報として活用されてきた。しかし、近年ではアナログのアーカイブがデジタル化されるようになり、「デジタル・アーカイブ」という言葉が強調されるようになってきた。以前のアーカイブは公文書的な性質が強かったが、デジタル化により活用の可能性が急速に広がった。文献資料のみならず、画像、音声、映像等もデジタル化され、公文書の性質から歴史資料としての性質を強めていった。今日ではこれらのデジタル・アーカイブは文化情報アーカイブとして捉えられ、デジタル化された文化情報自体が実物資料的な特徴を持ち合わせるようになった。

美術資料においては、完成した作品だけではなく、パフォーマンス的な表現も含めて作品とする場合は、パフォーマンスを収めた映像資料が実物資料であるとの解釈もなされる。歴史的出来事は、その出来事自体が実物であるが、その本物はタイムマシーンで過去を訪れて見なければならない。この場合、この歴史的事実を収めた映像資料が実物資料としての役割を担う。

さらには、デジタル技術の発達により高度な再現が可能となり、実物に代わりデジタル化した資料を活用する試みも頻繁になされるようになってきた。この最大の利点は、実物ではできなかった活用をデジタル・アーカイブ資料が可能とし、さらには実物資料の劣化/損傷のリスクを軽減できるということである。

博物館資料論での試み

このようにデジタル・アーカイブの活用により、資料の活用の可能性が多様化してきた。これらを踏まえ、『博物館資料論』でデジタル・アーカイブおよび文化情報アーカイブについて扱うことが必要であると考え、それに伴い授業計画に大幅な修正を施すことも検討している。学芸員課程に『博物館資料保存論』が加えられた時以来の大きな修正になるかもしれない。しかし、限られた授業時間と授業回数の中で、そのまま新たな事項を加えるというわけにはいかない。まず、今年度は授業内で以下の事項を取り入れることから始めた。

- 映像資料が展示のメインとなる博物館の事例
- 美術資料の「鑑賞」から「体験」へ事例
- 視覚/聴覚の体感
- 文字での解説にデジタル・アーカイブを取り入れる事例

今後は『博物館概論』とのつながり、そして他の学芸員課程の科目とのバランスを考えつつ、『博物館資料論』の一学期間の授業構成をアップデートしていきたい。

博物館資料ドキュメント

『ミニカー ～ダイハツ Copen LA-L880K デイタッチャブルトップ～』

人文学部日本文化学科 1年 飯田 ゆき乃

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

※注 本資料は実在する製品の模型のため、その実在する製品の説明も併せております。

《実在する車両の情報》

- 車種名： コペン (Copen)
- メーカー： ダイハツ
- 生産国： 日本
- サイズ： 3395×1475×1245mm
- 発売： 2002年～2012年(初代)
- 型番： LA-L880K
- 乗車定員： 2人
- ボディ： 2ドア オープンクーペ
- 駆動方式： FF(前輪駆動)
- 排気量： 659cc(軽スポーツカー)



実在する車両の情報の紹介に続いて、本題の今回の資料の情報に移る。この資料は上記の実在車両を模した、アイピーフォー株式会社発売の「Copen LA-L880K デイタッチャブルトップ」という販売名のガチャガチャである。価格は税込400円。カラー展開は5色(ブライトシルバーメタリック、ジョーヌイエロー、ホワイト、シャイニングレッド、ダークグリーンマイカ)。所有する資料の色はジョーヌイエロー。材質はABS、生産国は中国、対象年齢15歳以上。購入時はカプセルに入った状態。カプセルを開けると、車両本体と、後付けのルーフトップ(屋根。以下略)・サイドミラー・前後ナンバープレートが付属品として封入されている。実車ではドアは開閉可能だがこの資料では開閉不可。また、実車のルーフトップは電動格納式(アクティブトップ)と、自分で着脱できる軽量の樹脂ルーフ(デイタッチャブルトップ)があるが、この資料は販売名からもわかるように後者のデイタッチャブルトップが採用されている。タイヤは前輪、後輪それぞれの左右がドライブシャフトで繋がっており、実際に平らな面で走らせることが可能。ホイールはダイハツ純正を再現。資料の内装はマニュアルトランスミッションのインテリア。また、同梱の説明書には写真付きの製品イメージ図、対象年齢、販売会社のホームページリンク、お客様サービスセンターの案内、バーコード、警告と注意がそれぞれ記されている。＜警告＞には小部品の誤飲、窒息の危険があるため3歳未満の子どもには絶対に与えてはならないこと、また＜注

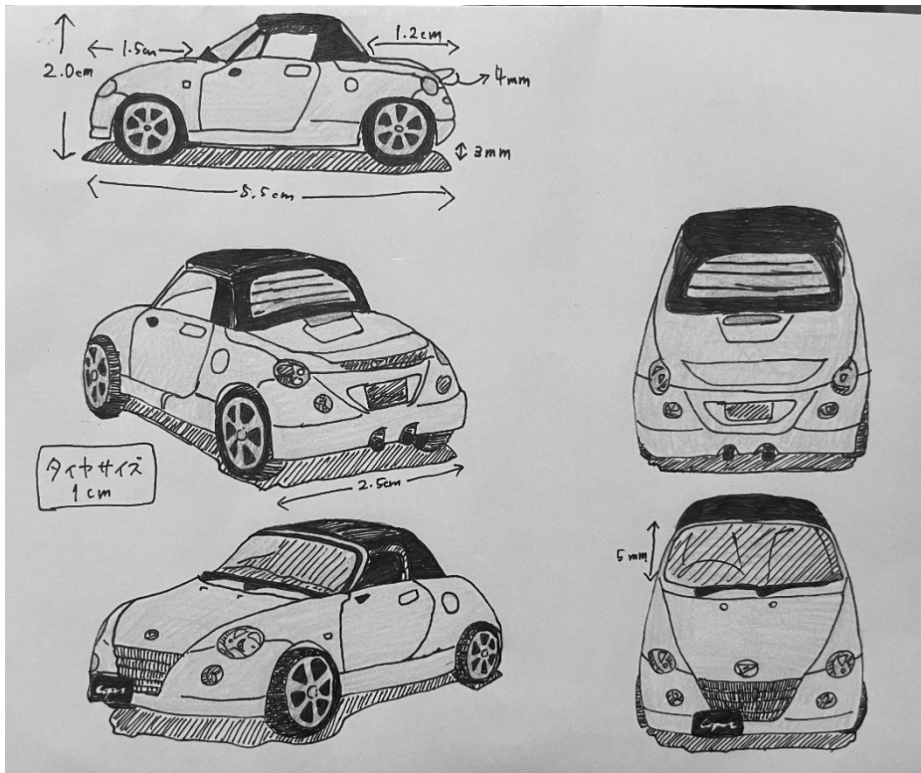
意>には製品の一部に尖った部分があること、可動部(タイヤの部分)に指を入れたり髪の毛を巻き込まないようにすること、製品が小さいため子どもが誤って口に入れられないよう子どもの手の届かない場所に保管すること、変形、変質や火災の原因となる直射日光のあたる場所や高温多湿な場所に置いたり、火気に近づけないことが記されている。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

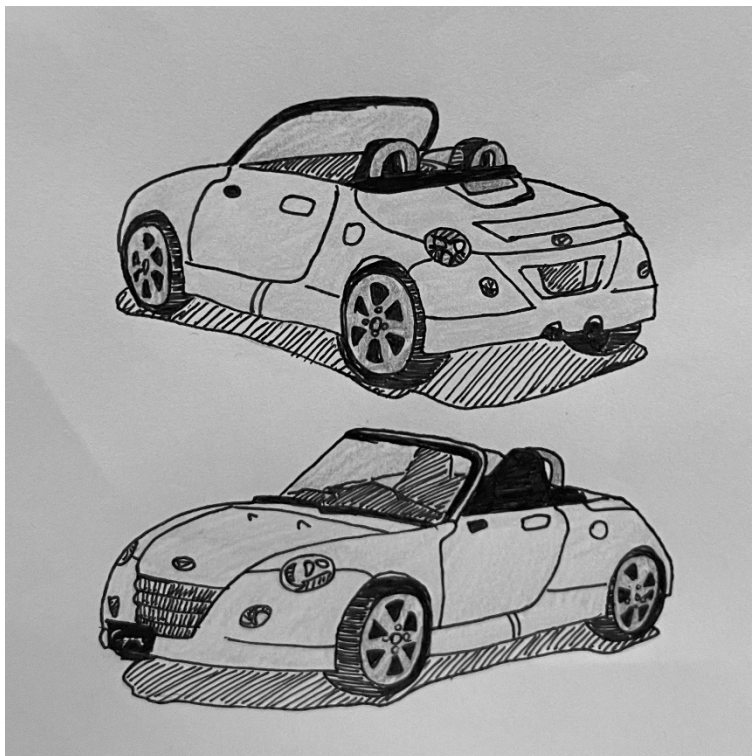
この資料は、所有者である飯田ゆき乃が、2022年12月23日に同じく車好きの友人とビックカメラ札幌店4階のおもちゃ売り場のガチャガチャコーナーを訪れた際に見つけ、迷わず購入したものである。所有者となったこの日、そのおもちゃ売り場には戦隊ものや仮面ライダーもの、プリキュアものや車のおもちゃ、そしてゲーム機などを抱えた大人たちがレジの前に長蛇の列をなしていた。おそらく時期的にも、子どもへのクリスマスプレゼントであろう。子どもの喜ぶ姿を心待ちにした大人たちの、大きなおもちゃを抱えて誘導員付きの長蛇の列に挑む姿はまるで勇者のようであった。当初は、この数日前に発売された売り切れ確実のホンダシビック・タイプRのトミカの初回限定盤を探し求めにビックカメラを訪れたのだが、お目当てのトミカは売り切れていた。なにかレアなトミカは無いかと売り場内を物色した末に、トミカコーナーからは少し離れた場所でのこの資料を見つけた。所有者はこの資料を1秒も迷うことなく購入。その理由は、所有者の憧れの車のミニカーだったからである。免許を取得した約1年前から、所有者は現行型ではなくまさにこの資料である初期型のLA-L880Kに乗ることを夢見ていた。しかし、10~20年前の車両で維持が容易ではないこと、このモデルは生産が終了しているため台数も限られ、状態の良い個体は値が張ることなどを受け、現実的に乗ることが難しいと判断して大学生の間はこの夢を諦めざるを得なくなったという。この車のオーナーになる夢はいったんは諦めたものの、街でこの車両を見かけると憧れの気持ちが強く湧いてくるほど、愛する車であった。

資料の関連情報として、この車両の魅力を紹介する。コペン LA-L880Kは発売から20年が経過したにもかかわらず、状態の良い個体だと150万円~200万円はする人気車種となっている。平成を代表する軽スポーツカーとして一世を風靡したABCトリオ(マツダ・AZ-1、ホンダ・ビート、スズキ・カプチーノ)に次ぐ形で登場した車である。軽自動車なのでパワーは当然普通車よりは劣るが、一般的な軽自動車(タントやNbox、ラパンなど)と比べると馬力(お馬さんの数)は1.5倍ほど、トルク(そのお馬さん1匹の持つ力)は2倍ほどの数値であり、軽自動車とは思えないスペックを擁している。またエンジンも、現在の軽自動車には珍しいターボエンジンを積んでいる。愛くるしい見た目からは想像ができないような、軽自動車にしては驚異的なスペックを持っている。また、当時非常に珍しかったフルオープン軽スポーツカーでもあり、発売から20年が経過してもなお根強いファンが多く存在する車である。

イラストレーション (Illustration)



《ルーフトップを装着している状態》



《ルーフトップを収納している状態》



《車内のインテリア》

コンディション・レポート (Condition Report)

購入からの日数が浅く、また所有者は本資料を直射日光の当たらない棚に飾っているため、新品同様の状態を保っている。ただし、[Object Description Report - 1]で記したような後付けの付属品(ルーフトップ、サイドミラー、前後ナンバープレート)の一部を紛失し、現在は前部分のナンバープレートのみが車両本体に取り付けられている。その点で考えると、資料を完全体として扱うことはできない。

資料への傷は見られない。塗装に関しても色あせ、色落ち、はみ出し等はみられない。おそらく、有色部分には元から着色された材質を使用していると思われる。ただし、右ドア部分の右下部分に2ミリほどの糸くずのようなものが付着している。これは、おそらくツヤ出し塗装の際に巻き込んでしまったものとみられ、爪で軽く引っ搔いても取り除くことはできない。気になる点はこのひとつのみであり、付属品の一部を紛失し完全体として保管できていない点を除けば状態はかなり良好である。サイズは非常に小さいが車内インテリアやホイールといった細かい部分まで忠実に再現されている。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

本資料は繊細な細かいパーツで組み立てられているため、外的な力が加わると容易に破損しやすい。よって、人の手に触れないケースの中などに保管するのが望ましい。

資料の色が変色してしまう恐れがあるため、光が直接に当たる場所では保存しない。

本資料はプラスチックで作られているため、高温になる場所に保管すると変形してしまう恐れがある。

また、タイヤによって動いてしまうため、完全に平らな場所に保管する必要がある。ほかのものよりも動きやすいことを考慮すると、地震などの対策として収納ケース内で固定する方法も検討しなければならない。

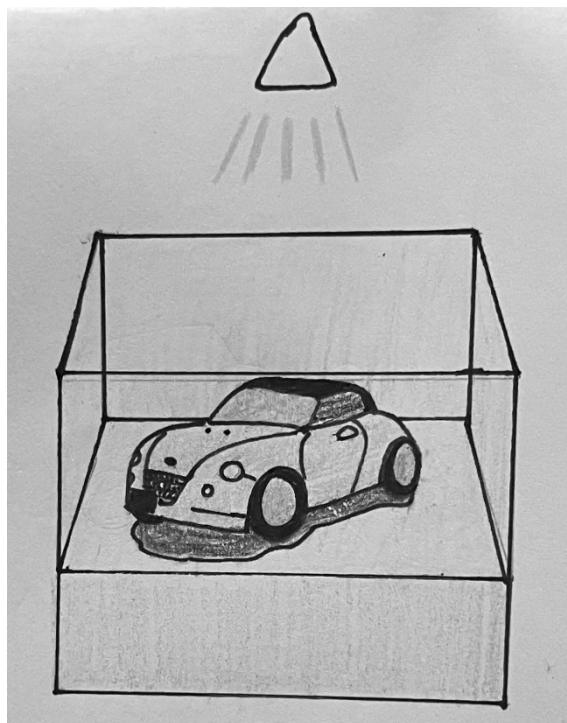
ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

付属品は非常に小さいため紛失しやすい場所での付属品の取り外しはせず、付属品の安全が確保される場所で取り外しを行う。前述の付属品も含め本資料はサイズが非常に小さく、また尖った部分もある。また、ルーフトップに関しては、取り付けた状態も取り外した状態もどちらも資料として扱うことができるため、特に取り外した際の保管には細心の注意を払う。取り付け/取り外しの際に力かけると割れたりしてしまうため、優しくつまんで扱う。資料の細部、とくに車内インテリアを細かく観察しようとしても、資料自体のサイズの小ささから細かく観察することは困難である。観察を行う際にはあらかじめ写真を撮影し、それを拡大するという方法も有効であると考えられる。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

本資料は非常に精巧に作られているため、その精巧さを強調するように上から照明を当て、なおかつガラスケースに入れて高級感を演出する。

資料の特性上、ルーフトップあり/なしの状態を同時に見せることは出来ないが、ルーフトップも資料の一部であるため、基本的には図のように取り付けた状態での展示を主とする。ふたつの顔をもつ資料であることを伝える必要があるため、展示室内の同エリアには、ルーフトップありの状態の画像と、ルーフトップなしの状態(オープン)の画像のパネルを設置する。



レーベル (Label)

当初は大人向けのみと考えていたが、乗り物好きである子どもが多いため、子ども向けも作成。さらに、車好きの来館者に向けたスペック説明のレーベルも作成。少々マニアックな内容ではあるが、この資料を見た人々の多様なバックグラウンドに的確に対応するためである。

レーベルのデザインのポイントは、サーキットなどでのカーレースに用いられるチェッカーフラッグを背景とすることで、資料より先にレーベルが視界に入った場合でも「車関係の資料」と一目で判別できることを可能にした。文字は、見出しにおいては3種類とも「HGP 創英角ポップ体」で、サイズは大人向けと子ども向けで16ポイント、車好き向けでは18ポイント。見出しは、文字の背景を着色することで目立たせ、かつ見やすく工夫している。また本文においては、大人向けと車好き向けは「BIZ UDP ゴシック」の9ポイント、子ども向けは「HG 丸ゴシック M-PRO」の10.5ポイント。本文は、読みやすくするためにすべて太字加工。本文の内容も工夫している。大人向けと子ども向けでは、車に興味がある人はもちろん、ない人にも興味を持っていただけるよう、本資料の実車の魅力を記載した。車好き向けのスペックは、[Object Description Report - 1]で記載した情報に新たな情報を加えて記載。そして、所有者がなぜこの資料を紹介するのか、理由を記さずともそれが伝わるような文章、レイアウトを心がけた。

「Copen LA-880K ティタッチャズルトツプ」

当時非常に珍しかった軽オープンスポーツカーとして
2002年に登場し、2012年に生産を終えた
ダイハツ・コペン LA-L880K(初期型)のミニカーです。
外装はもちろん、車内インテリアまで精巧に再現されています。
可愛い見目に開放感溢れるフルオープン。
それでいて実際の車両のパワーは一般的な軽自動車の約2倍。
そんなコペン LA-L880Kのミニカーをお楽しみください。

《大人向け》

「Copen LA-880K ティタッチャズルトツプ」

いまから20ねんまえに どうしようした
ダイハツ コペン LA-L880K の、おもちゃのくるま。
ほんもののくるま とおなじようにつくられているよ。
ころころ ころがすことができるよ。
このくるまを、どうろで みたことはあるかな？
このくるまは、オープンカーにもなるし、
パワーも、とてもつよいんだ！

《子ども向け》

〈補足〉スペックについて

・生産国	日本
・サイズ	3395×1475×1245mm [本資料:55×25×20mm]
・乗車定員	2人
・ボディ	2ドア オープンクーペ
・駆動方式	FF(前輪駆動)
・排気量	659cc
・馬力、トルク	64ps/6000rpm、110N・m/3200rpm

《車好き向け - 資料の実車のスペック》

博物館資料ドキュメント 『桜のミラー付きキーホルダー』

人文学部日本文化学科 1 年 小本 若奈

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

この資料は、「桜のミラー付きキーホルダー」である。この資料は 2012 年に所有者である小本若奈が入手したものである。製造国は不明。材質はプラスチック、鏡、金属の部品、ナイロン製の紐である。

この資料は、ストラップとしてカバンなどに付けて持ち運ぶことのできる鏡である。カバーと鏡の二枚構造になっており、カバーを左右にスライドさせて開けることで、内側にある鏡を見ることが出来るものである。

資料は全長：13.0cm、ストラップ部分：6.5cm、本体：6.5cm、本体の横幅：6.5cm、厚さ：0.7cm、鏡：直径 3.0cm である。

この資料は桜の花びらの形をかたどっている。カバーの表面には、ラメと青色と黄色のダイヤ型のビーズ（直径：0.4cm）が施され、光が当たるとキラキラ光るデザインになっている。中心には桜の花びらの形の穴（縦：1.5cm）が 5 つ空いていて、中の鏡が見えるようなデザインになっている。鏡の台座部分もカバーと同じ桜の形をしていて、中央には円形（直径 3.0cm）の鏡がついている。

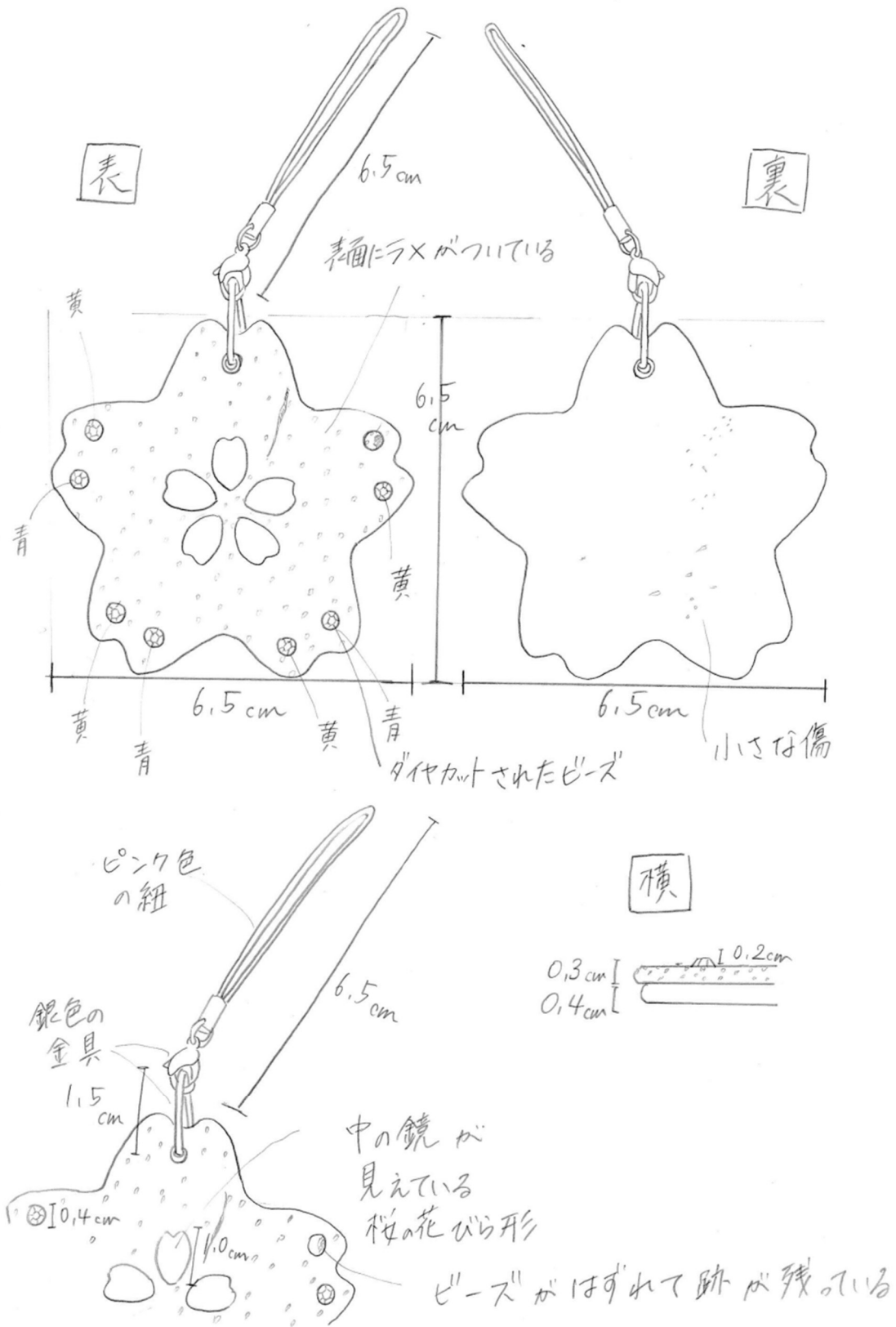
この資料は、五稜郭タワーのお土産売り場で購入したものである。五稜郭公園とは、函館にある「五稜郭跡」と呼ばれる星形の史跡である。現在は復元された奉行所があり、有名な観光地である。五稜郭公園のすぐ隣には、五稜郭タワーと呼ばれる展望台があり最上階からは五稜郭公園を見渡すことが出来る場所だ。また、五稜郭公園には桜の木が植えられており、春になると桜の名所として有名であるため、この資料は五稜郭公園の桜をイメージして作られたお土産品であると考えられる。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

この資料は 2012 年に所有者である小本若奈のもとに、当時函館に単身赴任をしていた所有者の父から手紙と一緒に届いた物である。購入先は、五稜郭タワーのお土産売り場である。購入者である父によると、春になると桜の名所である五稜郭で販売されている様々な桜関連のグッズの中から選び、購入したとのことである。所有者の妹も同じ物を所有していることから、大量生産されたお土産品であると考えられ、資料その物の希少価値は低いことがわかる。しかし、所有者にとっては思い出のある大切な品である。

約 10 年間所有しているため、使用中に落としてダイヤ型の青色のビーズが外れて紛失している。入手当初は筆箱に付けて持ち歩いていたが、近年は直射日光の当たらない机の引き出しにしまっていたため、深刻な色あせの問題は見当たらない。

イラストレーション (Illustration)



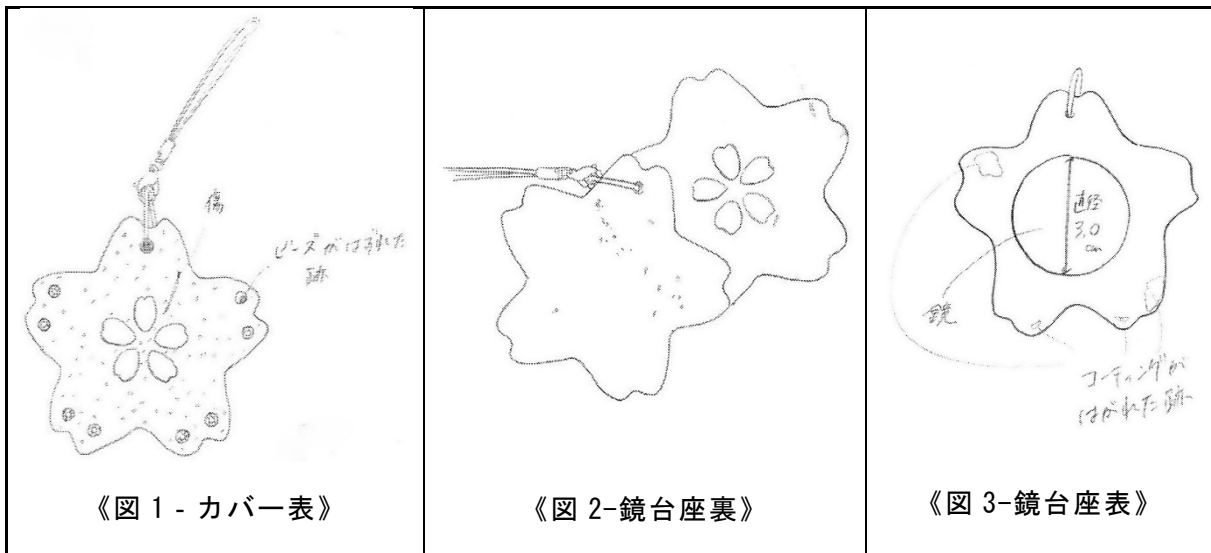
コンディション・レポート (Condition Report)

カバーの部分の表面についていたダイヤ型の青色のビーズが取れて茶色の跡が残っている。ビーズは紛失したため残っていない。表面には傷がついており、使用時に落としたためであると考えられる。(図 1)

カバーの裏面はボールペンの汚れがあり、赤いインクが付いている箇所がある。(図 2) 所有者が筆箱に付けて持ち歩いていたため、誤ってボールペンの先と資料がぶつかってできた汚れであると考えられる。

鏡の台座の裏面には点のように小さな傷がたくさんついている。(図 2)

鏡の台座の表面についていたコーティングがはがれ、傷がついている部分が見られる。カバーをスライドさせて開くため、開閉時にこすれて傷がついたと考えられる。(図 3)



リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

ダイヤ型のビーズが1つとれていることからわかるように、ダイヤ型のビーズは非常に取れやすく強い衝撃に対して耐久性がない。落とす、ぶつけるなどの衝撃を受けるとビーズが外れる可能性がある。

カバーを開けると鏡になっているため強い衝撃を与えないこと。机の端などのとがった部分にぶつけてしまうと傷がつき、割れる可能性もあるため、安定した場所に保管することが大切である。また、鏡の表面には小さなほこりが付きやすいため、定期的にはこりを取り除くなどの対策をとる必要がある。

資料の大部分がプラスチックでできているため、保存の際には素材に適した湿度や温度の管理に気を付けなければならない。また、金属製の金具部分に対する温度や湿度の管理についても注意が必要である。

直射日光は色あせの原因となるため、日光が当たらない部屋に保存する必要がある。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

鏡の表面はほこりや指紋などの汚れが付きやすいため、触れないようにすること。やむを得ず鏡の表面を触る際は、時計やブレスレットなどのアクセサリ類をはずし、爪を切って整えたあと、手を洗うか清潔な手袋を着用し、資料に指紋や傷を付けないように注意を払う必要がある。

状態の確認や展示のためにカバーをスライドさせて開けるときは、鏡の周りの台座にあるコーティングのはがれが悪化しないように慎重に開ける必要がある。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

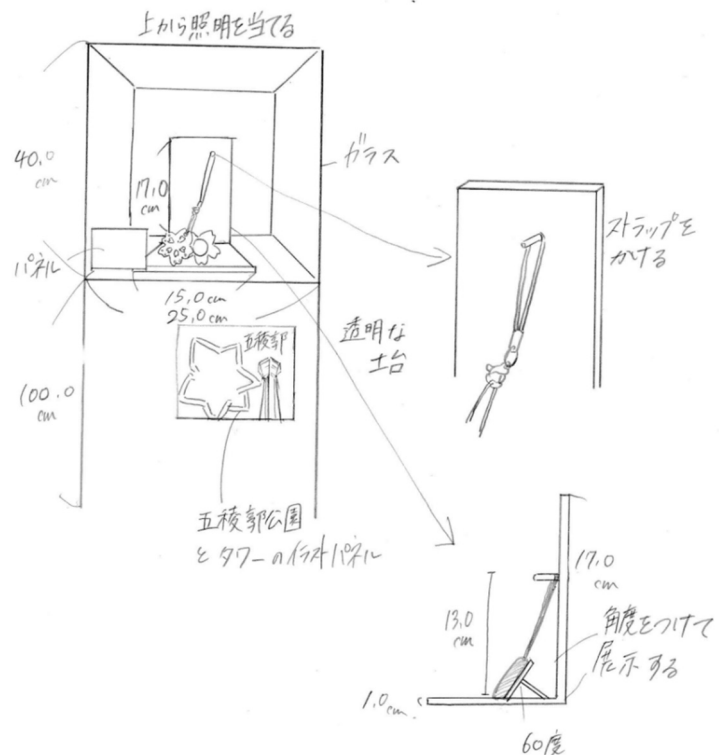
展示のテーマは、「お土産のミラー付きキーホルダー」とし、全国各地のお土産屋さんで販売されている「ミラー付きキーホルダー」を展示する。

資料は鏡であることがわかるように開いた状態で展示をする。この資料は支えなしでは自立出来ない。また、ストラップの紐でつるすと不安定で左右に揺れてしまい、金属の金具部分とストラップ部分の劣化が進んでしまう恐れがある。そのため、傾斜（傾き：60度）の土台を作り、その台に乗せて展示をする。ストラップは動かないように固定（下からの高さ：13cm）し、キーホルダーであることがわかるようにする。

展示台は床から100cmの高さに設定し、触れることのできないようにガラスのケースで覆い、床からガラスケースを含む高さを140cmとする。資料は前後左右どこからでも見ることが出来るように、土台は透明な素材のものを選ぶ。

照明は上からライトを当てることで鏡の反射を防ぎ、カバーにラメが施されていることがわかるようにする。

また、資料がどこの地域のお土産なのかがわかるように購入場所がわかる写真やイラスト付きのパネルを取り付ける。資料の説明パネルは展示ケースの正面に来館者が見やすい高さに取り付ける。



レーベル (Label)

デザインは見やすさを重視し、目立ちすぎないようにした。外枠の色は資料の色に似ているローズを使用し、文章は販売場所と資料の特徴についての情報を短くまとめて載せた。

フォントは読みやすく、優しい雰囲気を感じる MS ゴシックを使用した。資料名の文字の大きさは 16、説明文の文字の大きさは 10.5 とし、資料名は文字の太さと大きさを変えて目立たせた。

説明文は、難しい漢字にルビを入れることによって子供でも読めるようにした。

桜のミラー付きキーホルダー

2012 年に五稜郭タワー内のお土産売り場で販売されていた「ミラー付きキーホルダー」である。

カバーを左右にスライドさせて使用する鏡で、デザインは五稜郭公園に植えられている桜がモチーフになっている。カバーにはラメやビーズの装飾が施されているところが特徴である。

(寄贈：2023 年)

博物館資料ドキュメント 『アイヌの女性の木彫りのキーホルダー』

人文学部日本文化学科 1年 田口 真帆

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

この資料はアイヌの女性の横顔の木彫りが付いているキーホルダーである。このキーホルダーは金属製のキーリング、木製の木彫り（木の種類は不明）、革が使用されて、作られている。製造者、製造日はそれぞれ不明である。

キーホルダー上部には大きいキーリングが1つ、それにつながった3つの小さいキーリングが付いている。大きいキーリングの直径は3 cm、小さいキーリングの直径は1.5 cmとなっている。大きいキーリングの色は金色に近い色で小さいキーリングの色は茶色となっている。

全体としての大きさは13 cmであり、木彫りは6.7 cm、革の部分は11.5 cmとなっており、全体の質量は26 gである。木彫りの厚さは一番厚い部分で0.9 cmである。

木彫りについては、女性の頭から肩あたりまでの左側が彫られている。女性の髪は肩下まで伸ばされている。しかし、肩下までしか彫られていないため、この女性の髪がどこまで伸びているのかは不明である。頭にはハチマキのようなものを巻いており、そのハチマキには刺繍が施されている。このハチマキはマタンプシと呼ばれるものであると考えられる。刺繍はハチマキ全体にされているのではなく、中央に2つ同じモチーフがつながっているように施されている。また、女性の表情は少し微笑んでいるように思われる。頬が膨らむように彫られており、凹凸がはっきりとしている。全体の色は焦げ茶色であるが、膨らんだ頬と前頭部部分は白くなっている。

革の部分は一枚の革を半分に折ってその間にキーリングを通し、土台を作ったと思われる。革は何を用いて接着されたかは不明であるが、刺繍糸だけでなく接着剤のような他のもので接着されたようである。革の切断面は切りっぱなしになっており、所々で細かい革の断片が見られる。革の上端2.1 cmのところの木彫りが付けられており、下は2.5 cmの革が余っている。そして、革の上端から1.5 cmのところと下から0.8 cmのところ赤い刺繍糸が縫い付けられている。縫われている部分は0.3 cmである。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

この資料は現所有者である田口真帆（当時18歳）が2022年4月29日に白老を訪れた時、「しらおいチャレンジショップ」のひとつであるpon epere(ポンエペレ)という店で購入した。このお店はアイヌに関する工芸品や雑貨などを販売している。このキーホルダーと同じ種類、革の色が黒ではなく茶色のキーホルダーもあったのだが、女性の表情が明るく見られるものを選別して購入した。現所有者が購入したアイヌの女性の横顔をモチーフ

とした作品はたくさん存在しており、私の母が祖母から受け継いだ鏡の裏側にも同じ女性の横顔が彫られている。そのお店の店長に話を伺ったところ、作家が減少しており、一つずつが手作りであるため、徐々に作品自体も少なくなっていき、入手が困難になるだろうということであった。また、このキーホルダーも手作りであるということはわかっているが、いつ、誰が作ったのかは前述したように不明である。

コンディション・レポート (Condition Report)

このキーホルダーを購入してからキーホルダーとして使用しておらず、観賞用で部屋にモチーフとして飾っていたため、ほとんど傷がなく、購入した当時のままである。現在は、黒の革の上下に縫われている赤色の糸が少し切れている、木彫りの女性のハチマキの部分にごく小さな茶色の汚れがある、革の下部分にいくつかしわができていたといった状態である。いずれもいつどこで汚れやしわが付いたのかは不明である。少なくとも、現所有者が購入する前にできたものであると考えられる。

木彫りの断面はやすりなどで削られており、とがっている部分に触れても怪我をしないように施されている。また、革の断面は切りっぱなしで使用されているため、粗さが見られる。これによって、革が細かく飛び出しているところがある。金属製のキーリングには傷などが一切見られず、劣化がないと思われる。小さいキーリングは大きいキーリングと色が異なり錆びているような茶色に近い色であるが、実際は錆びていないと思われる。このままの現状維持が望ましいと考えられる。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

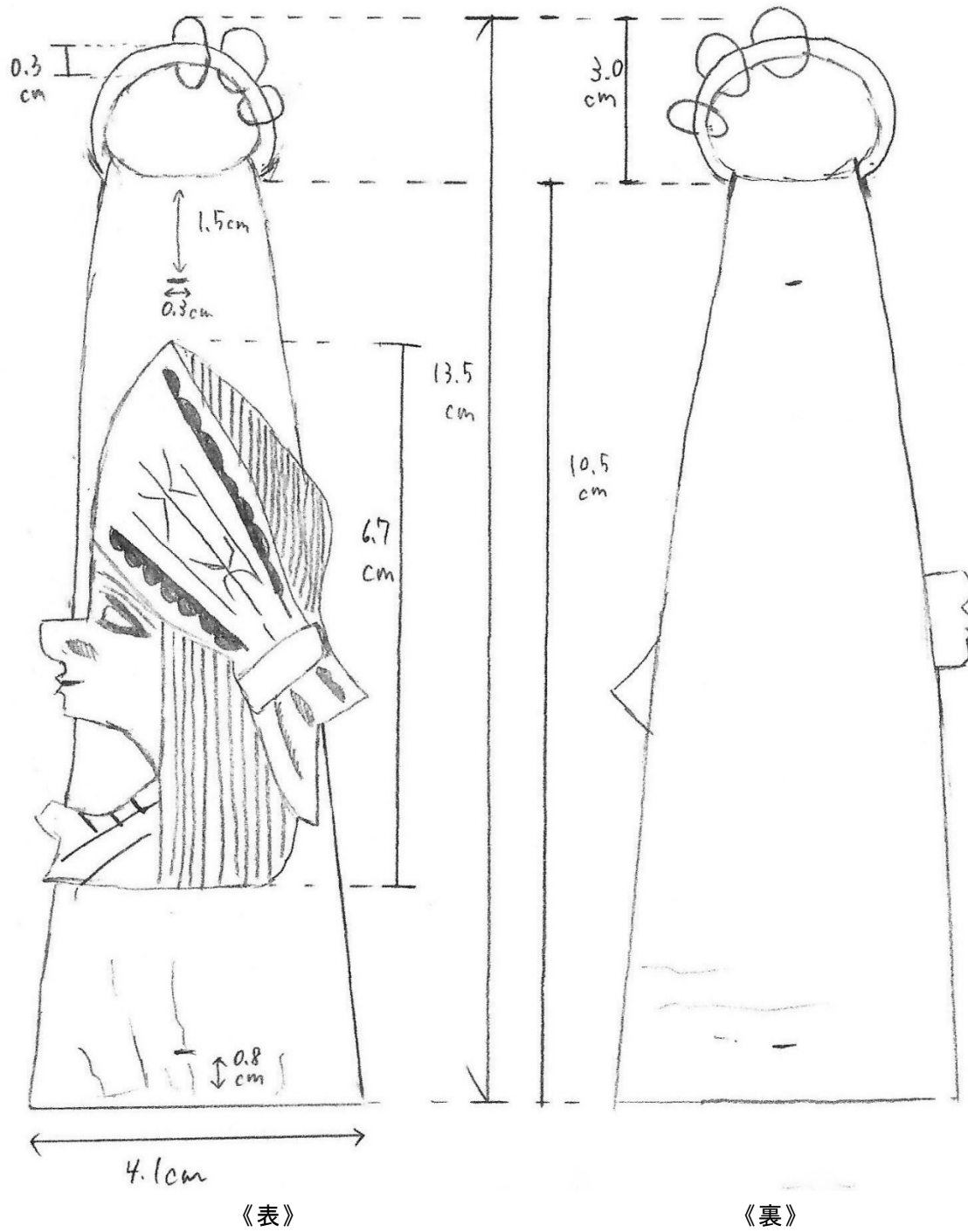
この資料は金属製のキーリング、木製の木彫り、革が使用されている。金属製のキーリングは水分を含む場所では錆びてしまい、劣化を促進することになる。そして、磁石に反応するため、鉄が含まれていると考えられる。金属製品を保存するうえで湿度管理は重要である。また、金属は熱に弱いので、高温すぎる場所での保管はあまり望ましくない。

次に、木製の木彫りについて、木は水分を含む場所ではカビが発生し、水分を吸収したり放出したりすることで割れることがある。また、直射日光などの強い光は、変色、乾燥などの影響を及ぼし、反りやひび割れの原因となる。

そして革も水分が多い場所では、カビが発生し現在の状態に影響を及ぼす。革の性質は傷つきやすく、変形しやすいことを考慮したうえで、丁寧に扱い、ケースで保管することが望ましいと思われる。また、直射日光などの強い光の下では、乾燥、変色などが見られることからそのような状況下で保存することは望ましいとは言えない。例外で、日光に当てることを推奨している革もあるのだが、この素材には当てはまらないと考えられる。

以上の理由からこの資料を保存するときは、水分を含まない場所、つまり湿気の少ない通気性の良い場所で保存する必要がある。そして、照明が必要であれば、直射日光などの強い光ではなく、あまり強くない光を当てることが望ましいと考えられる。

イラストレーション (Illustration)



- ◆縮倍率：100%（原寸）
- ◆小さいキーリングの直径：1.5 cm
- ◆木彫りの厚さ：最も厚い箇所でも0.9 cm
- ◆キーホルダーの革部分下部にいくつかの皺がみられる

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

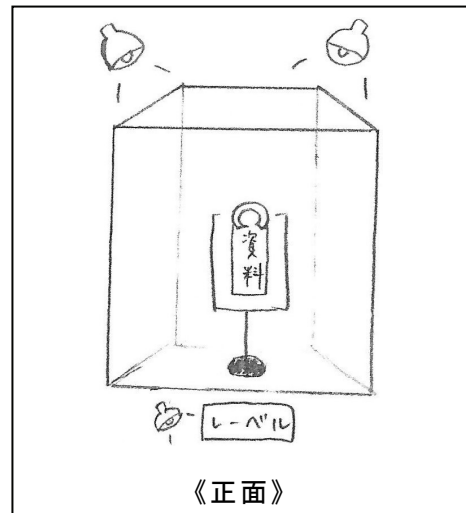
この資料を手にとるとき、人の汗や皮脂は革に影響を及ぼすため、素手では触らず手袋を着用し、革の部分に影響を与えないことが必要であると考えられる。人間の手の皮脂は少なく付着することはあまりないと思われるが、手袋を着用するか、素手で触れた時は乾いた布で拭くなど念のための対策で革に負担がかからないようにするべきであろう。

また、木、金属、革はどれも水分に弱いため、この資料を扱う前は水分に触れないことが必要である。もし、水分に触れた後にこの資料を扱うのであれば、水分をしっかりと拭きとってから資料を扱うのが望ましい。万が一、資料に水分が付着してしまった場合、乾いた布で拭きとることが必要になる。木彫りに水分が付着した場合、水分をしっかりと拭きとった後、あまり強くない光の下で、乾燥させることが重要である。付着した水分を拭きとらないとカビや錆の原因となる。持ち運ぶ際は手袋を着用し、箱やケースなど閉じることのできるものに入れて運べば周りの環境の影響も受けることなく、充分であると思われる。そして、資料の落下を防ぐため、キーリング部分に指を通し持ち運ぶことなどで対策を講じることができる。

また、木彫りと革は接着剤のようなもので接着しているため、両側から強い力で引っ張ると剥がれてしまう可能性がある。そして、木彫りの破損、ひび割れにもつながることから、強い力が加わらないように注意することも必要である。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

- ◆この資料を透明ケースに入れ展示する。
- ◆大人と子供の視点に考慮し、床から 80 cm の台の上に展示ケースを設置する。
- ◆説明ラベルは、展示ケースの前面につける。
- ◆展示ケース内の資料は、表と裏の両面を見せるため、傾斜のある透明な素材のボードの上に設置する。
- ◆ケース内は湿度が極端に高くなったり低くなったりしないように設定する。
- ◆館内での展示場所は、直射日光が当たらない場所とする。
- ◆資料には上部 2 か所の照明から光を当てるが、照明は強すぎないように調整し、資料が見える程度の光とする。
- ◆説明ラベルには別の照明で光を当てる。



レーベル (Label)

これはアイヌ女性の木彫りのキーホルダーのラベルである。タイトル、本文ともに文字が見えやすく、威圧感のないHG丸ゴシック M-PROを使用した。タイトルは18ポイントで本文は12ポイントの大きさとし、タイトルは目を引く赤色に設定した。本文は読みやすさを重視し、白色を背景とし、文字を黒色とした。

説明文は、アイヌ文化を知らない人でも理解できるようにアイヌ民族についての説明をし、この作品についての説明を行った。

アイヌ女性の木彫りのキーホルダー

アイヌ民族とは日本列島の北部周辺で暮らしていた先住民族である。

彼らは豊かな自然とともに生き、独自の文化を築いていた。そんなアイヌ民族をモデルとした作品が多く存在している。

このような作品は手作りで作られることが多く、
作品ごとに異なる点が見られる。

このような作品や工芸品でアイヌ文化は今もなお
伝えられ続けているのである。

博物館資料ドキュメント
『卓球ラケット ～VICTAS 社 Koji Matsushita～』

人文学部日本文化学科 1 年 遠田 穂香

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

全長：27.0 cm

幅：楕円形部分 15.5 cm、 持ち手部分 約 3.0 cm、

厚さ：ラバーを含む 1.1 cm、 持ち手部分 2.1 cm

サイドテープ：45.0 cm ラケット：木製 ラバー：ゴム製

本資料は、卓球をする際に卓球ボールを打つための道具である。「卓球ラケット」と呼ばれる木製の板に、「卓球ラバー」と呼ばれるゴム製のシートを両面に張り付けて使用する。ラケットには、シェークハンドラケット、日本式ペンホルダーラケット、中国式ラケットの三種類が存在するが、本資料はシェークハンドラケットである。これは握手するように握ることから名付けられたもので、両面で打球することで、攻守のバランスに長けたプレーが可能となることが特徴のラケットである。本資料のラケットは VICTAS 社「Koji Matsushita」が使用されている。木製の持ち手部分は直線的で、底部分には「VICTAS」と書かれた金属製のラベルが張られており、その下には「J. T. T. A. A.」の文字が彫られている。そして、ラケットの側面にはラケットの保護を目的としたサイドテープが張られており、本資料では「TSP カラーサイドテープ」の赤色が使用されている。また、ラケットの両面に張り付けるラバーにも多数の種類が存在しており、本資料には、裏ソフトラバーと粒高ラバーが使用されている。そして、卓球ラバーは、一方が黒色でもう一方を赤色にしなければいけないという公式の規定があるが、本資料の裏ソフトラバーは黒色で、粒高ラバーは赤色となっている。

裏ソフトラバーの表面は平らでつるつるしているのが特徴で、ボールのコントロール性や回転のかけやすさに優れ、多くの選手が使用している。このラバーには多様な種類が存在しており本資料で使用しているのは VICTAS 社「VS-401」である。これは、世界を代表するカットマンである松下浩二がテストを重ねて開発したもので、攻守どちらも安定してプレーできるという点で、カットマン(卓球のプレースタイル)に適したラバーだと言える。次に、粒高ラバーは、表面が高さのある粒で覆われているのが特徴で、対戦相手に変化球を返球できることや、攻撃の衝撃を吸収しやすいため守りに優れている。本資料で使用しているのは TSP 社「CURL P-4」である。これは、先述した「VS-401」と同様に松下浩二が開発に携わっており、カットマンに適したラバーとなっている。しかし、「CURL P-4」は既に終売しており、現在ではこれに変わる VICTAS 社「CURL P4V」が販売されている。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

所有者である遠田穂香は、中学生の3年間卓球部に所属しており、本資料はその当時の顧問から結果として譲り受けたものである。2017年夏頃、中学2年生であった所有者は、カットマンとして試合で勝つために使用するラケットをそれまで使っていたものから変更しようと考えていた。そこで、顧問に相談したところ、顧問は卓球用具専門店「スポーツショップ キタザト」から購入してきたものを所有者に貸し出した。そして、試用期間が終了し、ラケットが手に馴染んだため購入しようとして顧問に掛け合ったところ、そのまま譲り受けることになった。また、Object Description Report - 1で記述した「TSP カラーサイドテープ」に関しては、所有者自身が選んで購入し、張り付けた。以上が、本資料の入手経路である。

本資料のラケットである VICTAS 社「Koji Matsushita」の価格が 7,700 円、裏ソフトラバーの VICTAS 社「VS-401」の価格が 5,390 円、粒高ラバーの「CURL P-4」の価格が 3,850 円、サイドテープの「TSP カラーサイドテープ」の価格が 275 円となっている。そして、全て合わせた価格は 17,210 円となっている。この4つの部品のうち「Koji Matsushita」「VS-401」「TSP カラーサイドテープ」は現在公式からの販売は終了されている。

本資料は所有者が卓球を始めてから手にする3本目のラケットで、2017年から部活動を引退するまで使用した。様々な大会や試合もこのラケットと共に戦ってきたため、このラケットに対する思い入れは非常に強いものとなっている。資料の状態については後述の Condition Report で詳しく説明するが、ラバーに破れがあり、下のスポンジ部分が露出している箇所が見られる。これは所有者が試合に出る際、緊張から人差し指でラバーを伸ばす行為が重なり、最終的に欠損した。

また、卓球のラケットには大きさの規定がないため、本資料も通常より大きくなっている。カットマンという戦型は相手の攻撃した球を安定して返球することが大半であるため、球が当たりやすいように大きめに設定されている。

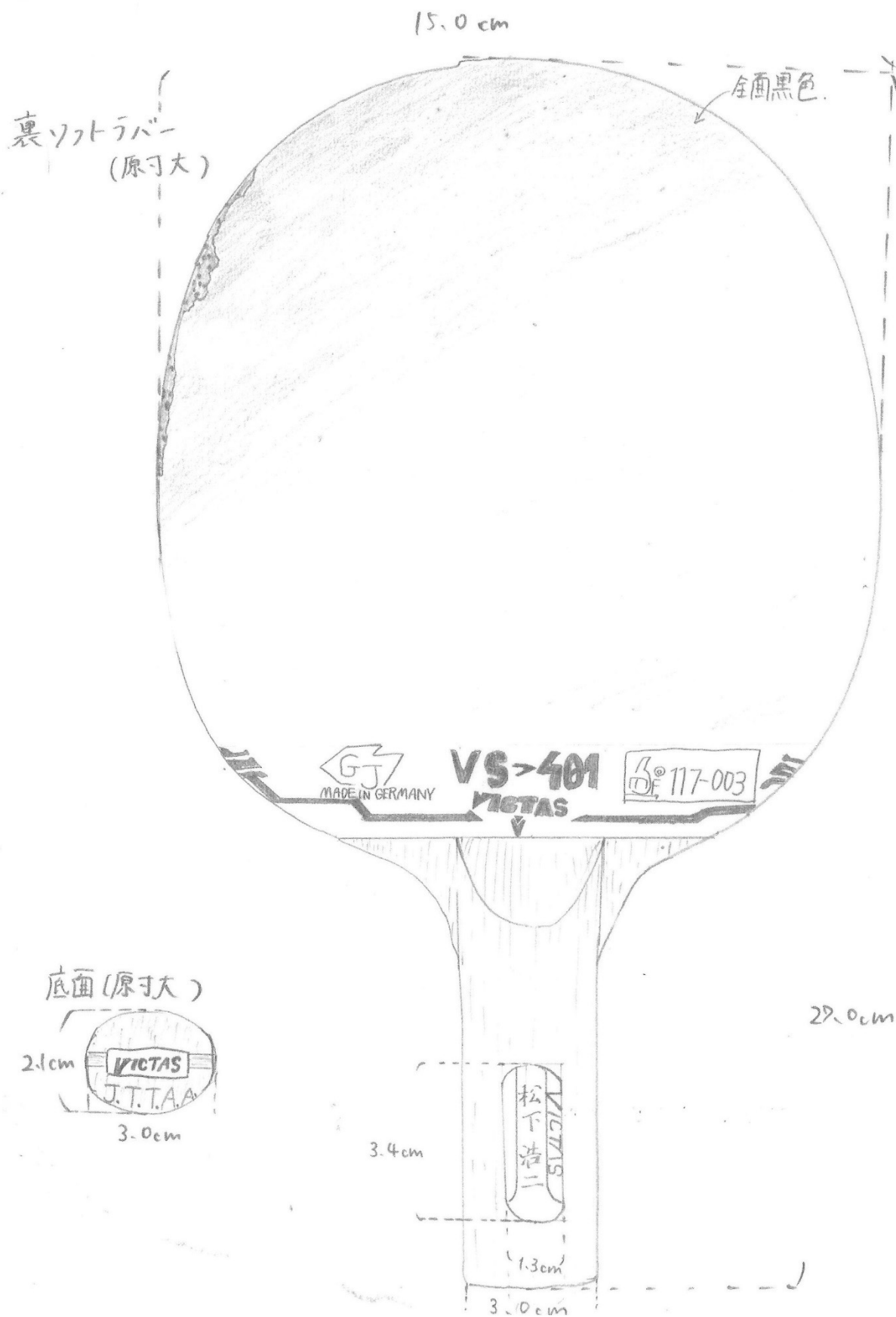
ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

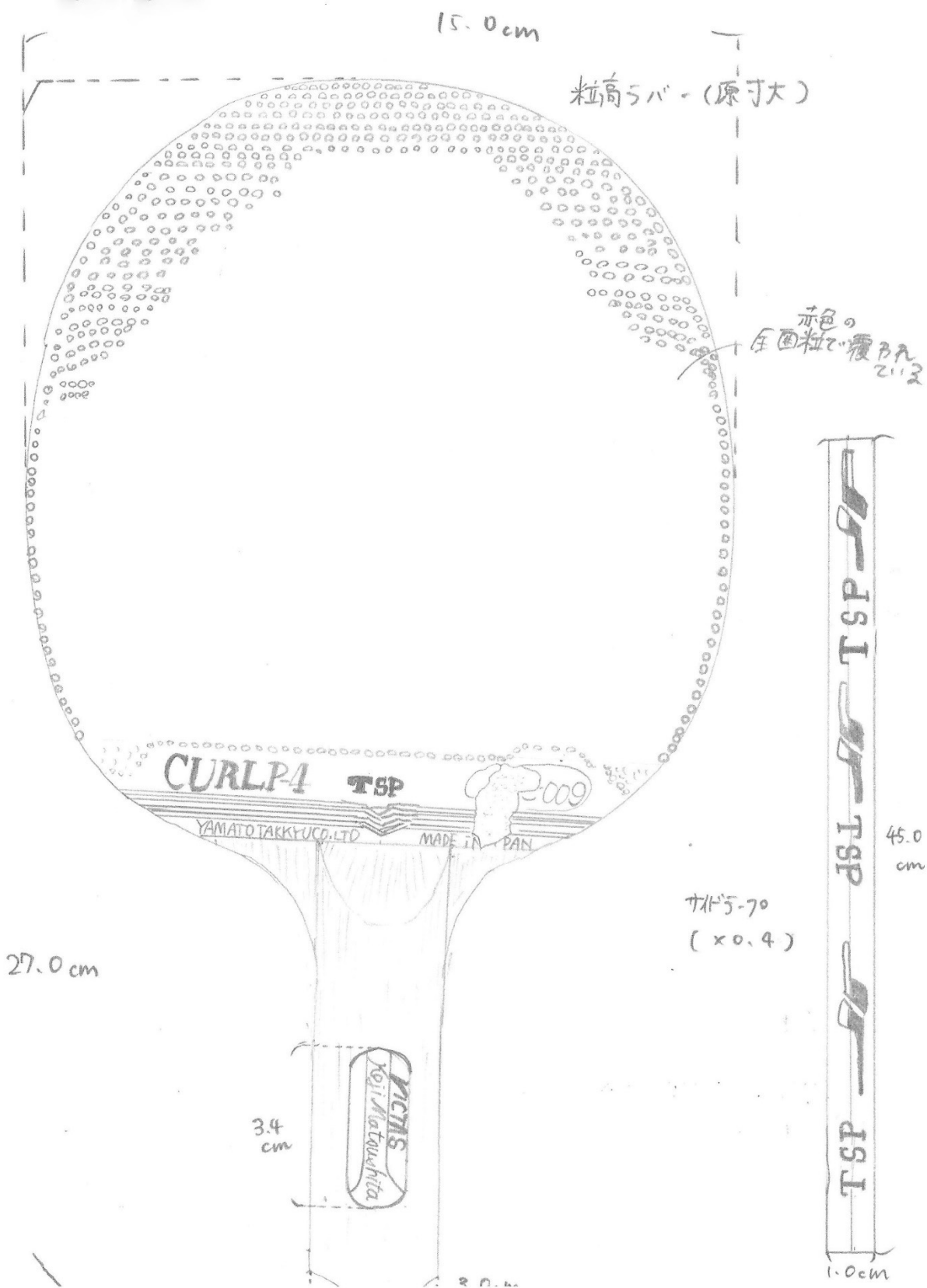
本資料の表面はゴム製であり、丸いボールや広い面で受ける衝撃に対しては耐性があるが、一方で先の尖ったものや1点に集中して力が加わるものに対しては耐性が弱い。ラバーに亀裂が入ったり欠けてしまったりする可能性があるため、アクセサリを外し、爪も短く整えて注意を払う必要がある。

ラバーの表面に素手で直接接触すると指紋や汚れが付くため、それを防ぐために布製ではなくゴム製の手袋を着用して扱う必要がある。布製ではなくゴム製であるのはラバーの表面に布の糸くずなどが付かないようにするためである。

また、ゴムとラケットの木製の部分は繊細な素材であるため、適切な温度/湿度の設定を怠ってはならない。ラバーの劣化を防ぐため直接日光も避ける。

イラストレーション (Illustration)





コンディション・レポート (Condition Report)

本資料は4つの部品で構成されているため、1つずつ分けて記述する。

まず、ラケット本体だが、持ち手の部分と木の板が露出している部分に黒ずみが見られる。そして、持ち手の底部分の右上に何かにぶつかって削られたような傷跡が2ヶ所ある。周囲も角が削られて丸みを帯びている。

次に裏ソフトラバーだが、全体的に表面に細かい傷とほこりが付いている。正面からみて左側の淵にはラバーが欠損して無くなり、露呈しているスポンジを黒色に塗りつぶしている跡が見られる。文字が書いてある凹凸部分にはほこりや汚れがたまっている。

次に粒高ラバーだが、粒の欠損は無く、概ね綺麗な状態だが全体的に黒ずんでいる。持ち手に近い部分には破れているところが2ヶ所あり、1つは小さな切り傷だが、もう1つは大きく破れている。そのためゴムの下にある白いスポンジ部分が露出しており、そこに書いてある文字が分からない状態だ。大きな破れの周囲も他の箇所より黒ずみが強い。

最後にサイドテープだが、裏ソフトラバーを正面として考えると左右の端がどちらも角から剥がれかかっている。その粘着部分にはほこりなどの汚れが付着している。また、左側面はラバーとラケットの断面が見られるほど色が抜け落ちており、穴が開いている箇所が3ヶ所ある。一方で右側面は購入時とほぼ状態が変わっておらず、傷や色の抜け落ち、傷などは見られない。このような差が生じたのは、プレーする際に左側が下になり、卓球台に頻繁に当たるため起こった損傷だと考える。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

特に気を付けなければいけないのはプレーに直接関係するラバーの部分で、本資料は裏ソフトラバーと粒高ラバーといった性質の異なるものを使用していることである。ラバーは柔らかく傷つきやすいため、劣化させない工夫や保護が必要不可欠となる。

裏ソフトラバーは表面の汚れや傷跡が無いように保存することが重要である。

粒高ラバーは粒と粒の間にほこりや汚れが溜まって質の低下を防ぐためにこれらを取り除くことが必要である。

卓球のラバーはゴム製であるため極度な高低温/高低湿を避け、直接日光の当たらない場所に保管することが重要である。

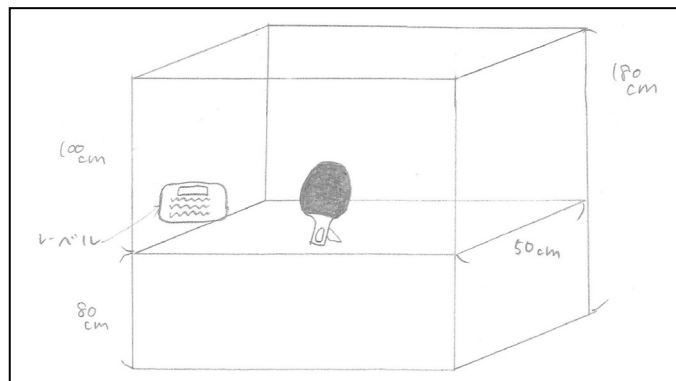
本体の木製の部分は湿度が高すぎると木が腐ってしまったりカビなどが発生する可能性があり、湿度が低すぎるとひび割れなどが懸念される。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

本資料は両面それぞれに異なった特徴があるため、展示ケースは360度、すべての方向から見るように設置する。資料の両面が見えるように、寝かせて置くのではなく、支えを用いて立たせるようにして展示する。子どもでも見るように、

展示台の高さは 80 cm に設定する。

説明文は透明の展示ケースに貼り付けるが、ケース内の資料と重なって鑑賞を妨げない位置に付ける。



レーベル (Label)

タイトルは本資料の使い込んだ感じが出るように「HGP 行書体」という書体を用いて周囲より大きな 20 ポイントで目立たせるようにした。説明文には読みやすさを考えて「HGP ゴシック E」という書体を用いて 13 ポイントとした。

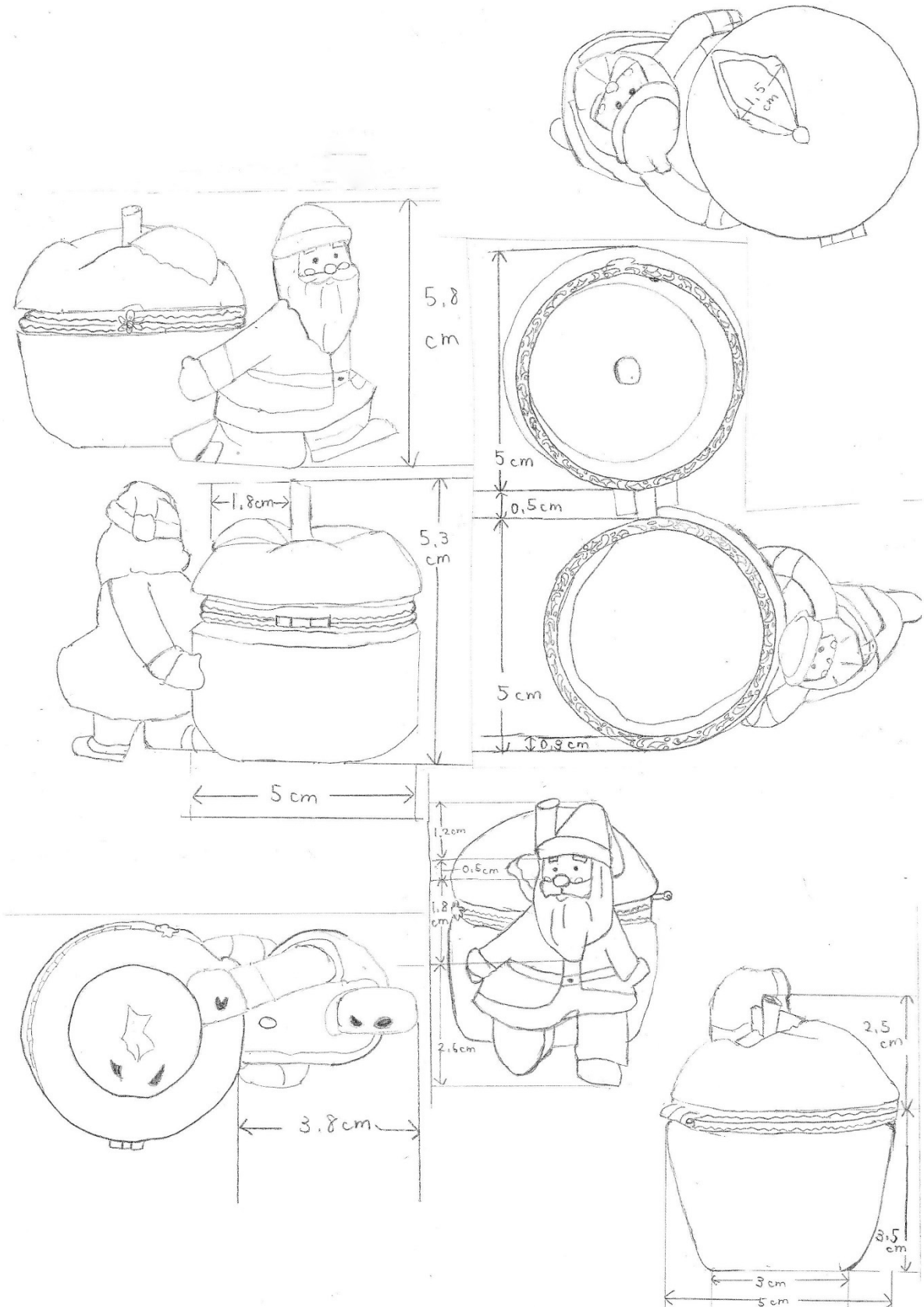
レーベルの枠線には落ち着いた感じを出せるように深い赤色を使用し、枠内には枠線と同様の暖色で統一感を図り、読みやすいように枠線より明度の高い黄色を採用した。タイトルは一目見て何の資料か分かるように周囲の色と異なる白色を使用し、黒色の枠線で囲った。説明文は読みやすさを第一に考え、奇をてらわずに黒色を使用した。

説明文は、ラケットそのものの説明と、このラケットにどんなエピソードがあるのかをバランスよく簡潔に表現した。

卓球ラケット

卓球の際に使用する道具であり、所有者である遠田穂香氏が中学生の頃に約1年半の間使用していたものだ。使用されているラバーやラケットは全てカットマン(卓球のプレースタイル)に適したもので攻守のバランスに優れた組み合わせと言える。また、ラケット自体も通常のものよりひと回り大きいのが特徴だ。1年半もの間ほぼ毎日使用していたことからラバーの劣化や欠損が見られるが遠田氏の思い出に残る品となっている。

イラストレーション (Illustration)



オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

このヒンジボックスは、2022年12月8日、さっぽろ地下街オーロラタウン内の雑貨屋「私の部屋」にて所有者が770円で購入したものである。所有者はこの店舗を訪れる直前に、大通西二丁目で2022年11月22日～12月25日の期間に開催されていた「第21回ミューベン・クリスマス市」にて、クリスマスツリーデザインのヒンジボックスを購入していた。それと並べて飾ることができるような雑貨が欲しいと考えた所有者は、オーロラタウン内にある様々な店舗を見て回った。そこで見つけたのが本資料のサンタとリンゴのヒンジボックスである。購入理由は主に二点ある。一点目は、すでに購入していたクリスマスツリーのヒンジボックスがセラミック製であり、それと同じ素材の雑貨を隣に並べて飾ることで統一感が生まれるのではないかと考えたからである。二点目は、にこりと微笑むサンタが片膝をついて自分の体よりも大きいリンゴを背中で担ごうとするそのデザインに惹かれたためである。所有者は本資料を小物入れとして使用しておらず、インテリアとしてテーブルの上に飾っていた。また、クリスマスが過ぎてからは、購入時の箱に入れて保管していた。

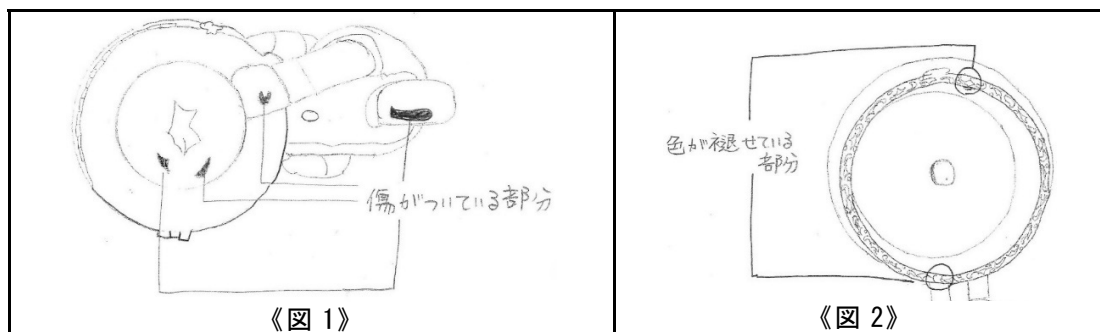
所有者は本資料の購入時、クリスマスとリンゴの関係性については無知であった。しかし、本資料を購入したことにより、それについての興味が高まった。調べたところ、リンゴはアダムとイブが食べた禁断の果実を象徴する果物で、クリスマスには永遠の命と生きる喜びの意味を込めてクリスマスツリーに飾られることを知った。なお、旧約聖書の『創世記』には、禁断の果実と呼ばれる善悪の知識の木になる実が「リンゴ」であるという記述はない。

コンディション・レポート (Condition Report)

購入して間もないため、全体的に見て傷は少ない。しかし、傷は何点かある。

図1は本体を下から見た図である。擦られたような傷が合計4箇所ついている。所有者宅のテーブルに置かれていたため、テーブルと本体との接地面に傷がついている。このことから、本体を移動させた時についた傷であることがわかる。

図2は本資料の蓋の裏の図である。開閉部分の淵の金色が褪せている。色が褪せているのは、観察者から見て右上と左下で、蓋を開ける際の摩擦による傷だと推察される。



蓋は190度ほど開くが、90度程まで開くと「キィ」とヒンジの接合部が擦れる音がある。所有者が購入した当初からこのような状態だったため、所有者は対処を何もしていないが、異音はさらに悪化するようであれば、どのような処置を施すか専門家と検討することも視野に入れるべきである。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

この資料の大部分はセラミックであり、その特徴として、脆く、衝撃に弱いことが挙げられる。そのため、資料に衝撃が伝わらないよう保存することが望ましい。購入した際についてきた箱とは別のアシッド・フリー素材の収納ボックスで保存する。資料はアシッド・フリーのペーパーで包み、収納ボックス内の隙間にもアシッド・フリーのペーパーを詰める。購入した際に資料が収められていた箱も、資料の一部として保存する。

カビの発生が懸念されるため、収蔵庫内の湿度は高湿度を避けた設定とする。

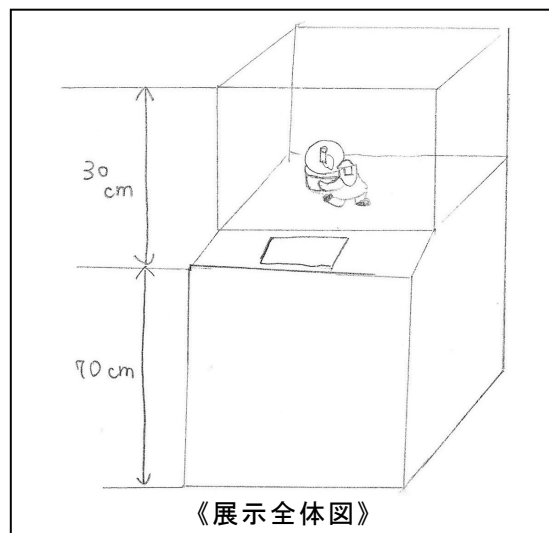
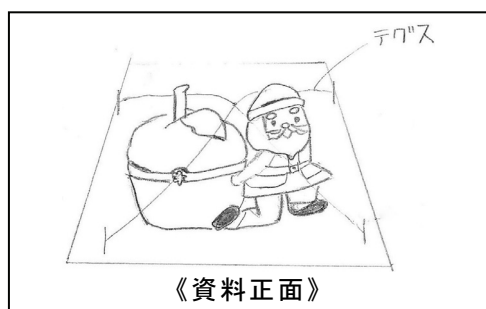
本資料は焼付塗装で仕上げられていると考えられるため、蛍光灯の光や日光による日焼けの進行は遅いと思われるが、経年劣化を防止するため、暗所で保存することが望ましい。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

素手で取り扱おうと爪による傷がついたり、皮脂が付着する可能性があるため、手袋を着用して取り扱うことが望ましい。また、資料を移動させる際には、傷をつけないよう、できる限り静かに置く必要がある。[コンディション・レポート]内でも言及しているが、ヒンジ部分から「キィ」という異音が発生するため、不必要なボックスの開閉は避けるべきである。吸水性があるため、湿度設定に気を遣うのは当然であるが、資料の近くでは水を扱うことや、水分補給などは控えるべきである。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

- ◆蓋を閉じて展示する
- ◆資料の後ろ側のヒンジが見えるよう、展示ケースは壁に接しないように設置する。
- ◆ケース内の資料はテグスで固定する



レーベル (Label)

ヒンジボックスという名称の小物入れであるということに着目したものである説明文である。文字サイズは、読みやすさを意識し、資料名は 20 ポイント、説明文は 16 ポイントである。書体は、読みやすさと本資料のセラミックの硬さを意識し、游明朝を使用した。

ヒンジボックス (サンタとリンゴ)

ヒンジボックスとは、蓋にヒンジと呼ばれる部品が付いた小物入れである。ヒンジによって繰り返しの開閉が可能になる。小物入れとして使用せず、インテリアとして収集し、飾る人も多い。

この資料の材質はセラミックで、リンゴとサンタクロースのデザインである

現所有者：松川 千恵

博物館資料ドキュメント 『ブックカバー』

経済学部経済学科 3年 榊原 大輝

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

この資料はブックカバーである。色は赤色であるが、厳密には紅色に近い色をしている。またこの資料はブックカバーという役割がある為、表と裏が存在する。重量は13グラム、大きさは縦が16.0cm、横幅が30.8cm(資料本体から見て右に、うち7.0cmは本の表・裏表紙の見返し(効き紙)と呼ばれる箇所を覆う様に折り返す構造になっている)、厚さは2mmとなるが、資料本体の折り目に従って折重ねると3mmであり、最も厚い箇所では8mmになる。また本の表紙を折り返す箇所を固定するベルト部が資料本体から見て右9.9mmに存在し、それぞれの大きさは縦16.3cm、横幅2.0cm、厚さ3mmである。資料本体から見て右3.5cmには表紙を固定するポケットがあり、縦16.0cm、横幅(深さ)3.5cm、厚さ3.0cmである。なお、ベルトとポケットは同一面に存在しており、この面は本と接触する裏側である。

資料本体は「SIWA 紙和」と呼ばれ、株式会社大直と工業デザイナーである深澤直人氏によって開発された製品である。本資料は「SIWA ブックカバー 文庫サイズ レッド」であると思われる。素材は木材パルプとポリオレフィン繊維を原料とするソフトナオロンであり、紙の独特な風合いを出しつつ、高い耐久性及び耐水性という特徴を有している。ポリオレフィンとはポリエチレンとポリプロピレンの化合物である。なお、この資料に用いられている素材「ソフトナオロン」とは株式会社大直が独自開発したオリジナル素材となり、生産国は日本である。素材はソフトナオロンが大部分を占めているが、ブックカバーという形状を作り出す為、糸で縫われていると思われる。

素材の性質上、紙の特徴も内包されており、使用する程に資料本体に皺や擦り傷、折れ目、色の薄れが目立つ。光の加減によって表面の毛羽立ちが視認でき、感触によってもその繊細さを確認する事ができる。ここで述べた特徴は表側のものである。裏側に関しては本と接触する面である為、表側ほどの目立った外傷は見られないが、折り目や皺などの紙においても裏表関係なく生じてしまう傷は確認できる。毛羽立ちも視認することはできるが、やはり表側ほどの外傷は見られない。感触は表側より滑らかであり、色の薄れも折れ目と皺の部分以外には見受けられない。

対応する本に関しては縦14.8cm、横幅10.5cm、厚さ3.0cm程の文庫本であり、これはA6判と呼ばれる文庫本サイズである。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

この資料の関連情報として、まず入手経路について述べ、次にエピソードについて述べる。

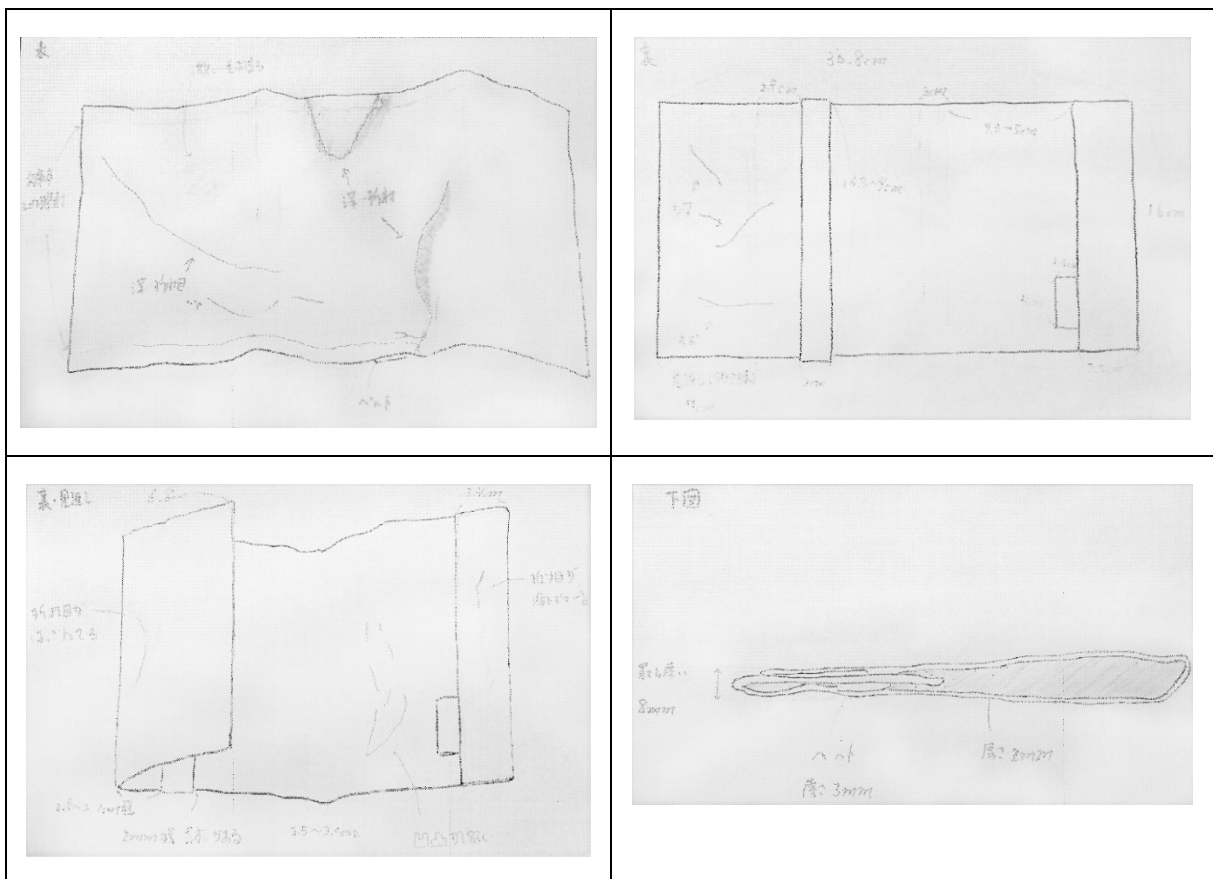
この資料は所有者及び本稿の筆者である榊原（以下「所有者」または「筆者」）が 2021 年 4 月 1 日、仙台駅付近に位置しているエスパル仙台の東館 3 階にある「カネイリス タードストア・エスパル 仙台店」にて購入した。

筆者は当時(2021 年 3 月半ば時点)居住地である北海道を離れ、友人 K 氏と共に合宿免許を目的に山形県にある自動車学校へ訪れた。免許を取得した後、北海道行きの飛行機を待つ為、仙台駅周辺のホテルにて宿泊した。予定よりも早く宿泊場所に到着したので K 氏と周辺の商業施設を散策しているところ、文房具を専門的に取り扱っている店を発見し、その店舗にてこの資料を購入した。

筆者は本の汚れやキズに常日頃から気にかけており、携帯することに諦めかけていた。しかし、筆者は高い耐久性・耐水性に加えて使用する程に所有者の癖や特徴が現れる性質を有するこのブックカバーに惹かれて購入するまでに至った。

イラストレーション (Illustration)

全体的に皺が目立つ。折れ目や凹凸、毛羽立ちに関してはイラストでの表現は困難かつ再現がないと判断した為、特に深いものや他のものとは一線を画したものに限定して表現している。また裏側のイラストにみられる縦 4.0cm、横幅 1.5cm の四角形は製品ラベルであり「WASI 和紙」と記載されている。



コンディション・レポート (Condition Report)

本資料を購入した時点で既に折り目や皺のようなものは確認できていたが、あくまでそれもデザインの範疇にあったと思われる。また販売形式上、麻の紐で結ばれており、実際に裏側を確認することは不可能であった。購入する参考資料としてサンプルが置かれており、参考資料としてそのサンプルを手にとって確認するという形式であった。購入する際に一度裏側を確認する事ができるが、それ以外では不可能であった為、裏側にあった傷などはその製品の特徴であると考えられる。現時点（2023年1月）における資料の状態は更に深く折り目や皺が刻まれており、表側ではそれが顕著に表れている。表側の上下には使用した際についてと思われる文庫本の跡が一直線についている。また本に装着した際に現れる角や折り目部分には摩擦によって生じたと思われる毛羽立ちと摩耗からくる色褪せが見られる。実際に外部との物理的接触が多かった為か全体的に毛羽立ちがある。裏側では中央部分に本を装着する際についてと思われる跡が見られる。本来挟めるように穴が空くところを素材の性質上、柔らかく撓った為に押すようにした折り目だと思われる。他に見返し部分に重なる箇所が本の角によって直線の傷がついている。毛羽立ちは表側と比較すると極めて少なく、一定の規則に則っているような均一感が感じられる。ベルト部分に関しても特記すべき傷などは見られない。本資料全体を通して言える事だが、基本的にどこが本来の傷で、どこが元からの傷なのかは非常に判別が困難であり、明らかに人為的なものだと判断できるもののみ、言及可能である。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

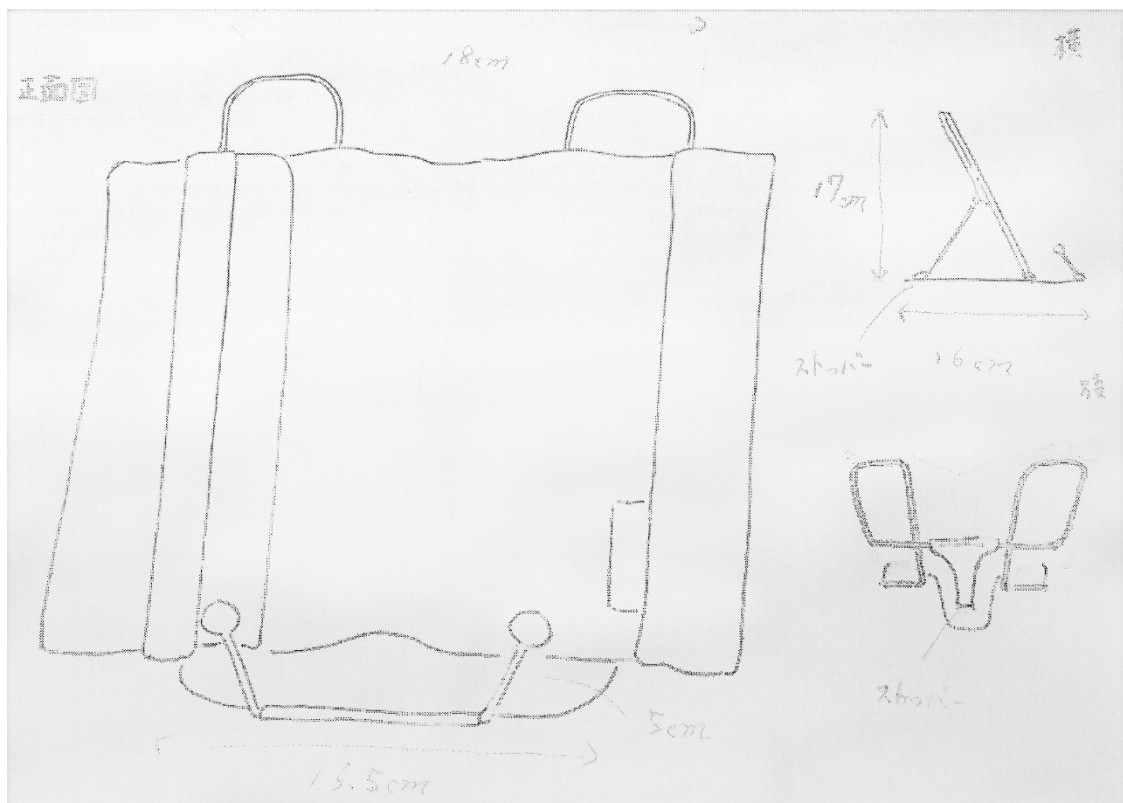
本資料の素材はソフトナオロンという新たなものであるが、大部分は紙である為、管理下における環境設定は紙資料と同様だと考えて差し支えない。一般的に紙を保存しておく湿度・温度としては湿度 60° 前後、温度 20° 前後である。またこの湿度と温度は常に一定である事が望まれ、この環境がカビ対策の一役を担う。本資料に堆積した埃や手垢がさらなるカビの温床の原因となる為、定期的に汚れを払うことが好ましい。また本などの文献とは異なり、本資料では視覚から伝達される色も一つの重要な特徴である為、光などの変色・劣化を最小限に留めておきたい。展示における光源が原因となる変色や劣化は紫外線や赤外線の影響が関係している。その為、従来のハロゲンランプや蛍光灯より放射量の少ない白色 LED での照射が望ましい。展示の予定がなく長期間保存をする際には無酸素状態を作り出す方法が虫や空気による劣化に対して有効である。形が変形しない様に箱型のケースに入れた後に密封できる袋を光の当たらない場所で保管する事が本資料の長期間にわたる保存方法として好ましい。またその際、本資料を入れるケースに資料本体から放出されるガスを吸収する機能・加工がなされているのが理想的である。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

前の節でも述べたように本資料は紙資料と扱いは同様である。しかし、耐久性に関しては本などの紙資料よりも高いと思われる。通常の紙資料と異なるのは摩擦が生じることによって本資料から見て取れる所有者の癖や特徴が損なわれてしまう点である。本資料に接触する際はフッ素繊維など摩擦を極力軽減できる素材で作られた手袋を装着することが望ましい。また本資料は強く掴むなどの物理的圧力によっても折れ目がつく事があるのでその点においても配慮するべきである。仮に水滴など紙資料にとって望ましくない傷が本資料についてしまった際には摩擦による更なる資料へのダメージとなり得る為、決して擦らずに自然乾燥か水分を吸収しやすい綿などの素材で水分の除去を試みるのが望ましい。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

本資料の質感を視覚のみで最大限に引き出す為に透明のブックスタンドを使用する。レーベルでも表と裏の質感の違いについて説明しており、大小様々な傷が見られるように色は透明を選択した。また展示の際には見返しをベルトに挟んでいるが、これは観察する人からの視点を意識している為であり、図のように展示する事でこういった時に資料にある傷がついたのかを考えてもらう目的がある。



レーベル (Label)

レーベルでは「ほのか新明朝」を使用した。ワードの基本フォントにはない様な絶妙な日本語の柔らかさと暖かさを表現しつつ、扱う資料の世界観も崩さない最適なフォントであると判断した。特に資料であるブックカバーのサイズでは小説が大部分を占める大きさである為、堅苦しい印象よりも文庫本のように持ち運べる気軽な印象を植え付けたいという思惑をフォントで表現した。その為レーベルでは説明文としての役割を果たしつつも「いかに小説寄りにするか」という事に重きをおいた。レーベルのデザインに関してはあまり華美になりすぎない様に抑えつつも、展示品と同様に暖色を用いた二重線を使用する事でシンプルかつ暖かみのある印象を与える効果を意識した。フォントのサイズに関して1m離れていても読めるサイズを意識し、小学生でも読めるようにルビを振ったが、すべてに振ったわけではなく、一度出た漢字の読みについては前の文章から再度探してもらう形式にした。すべてにルビが入っているとレーベルのサイズが大きくなってしまふ点と文章が読みづらくなってしまふ点を考慮した結果である。また「あらわれる」という表現を漢字

で使い分けているのは「表れる」というのは目に見えないものや事象を示し、「現れる」というのは実際に目で視認できることを示していると感じたためである。この違いはレーベルを読む人の中でも気づく人はあまりいないと思われるが、このような表現の違いを文章内で提示する事によって、より本に関連させやすくする意図がある。

わし 和紙のブックカバー

所有者：榊原大輝

おお 大きさ	おも 重さ
たて 縦：16cm	よこはば 横幅：30.8cm
あつ 厚さ2mm	16g

このブックカバーは「和紙」で作られています。普通の和紙とは異なって、高い耐久性と耐水性が兼ね備えられている為、非常に丈夫なブックカバーです。実は確認できる皺や折り目、傷の一つ一つが使用者の癖や特徴を表しているのです。紙の風合いを残しつつ、長期間使用することを目的に作られた和紙には「ソフトナオロン」という素材が使用され、和紙の可能性を引き出します。

ぜひ表面の毛羽立ちなどの細部まで観察してみてください。

表と裏では何が違うのか、どんな傷が多いのか、何でそんな傷がついたのかを考えてみてください。仮にあなたがこのブックカバーを使用するなら、どの様な傷が癖として現れるでしょうか。

編集後記

本学では、5つの課程（教職・図書館学・社会教育主事・学芸員・日本語教員養成）を開講しているが、各課程の内容を知る機会も限られている。そこで、各課程について紹介する動画を制作し、各課程の概要や魅力について伝えることを新たな試みとして今年からスタートすることになった。また、この動画は入学前の新入生に向けて、「新入生特設サイト内で2月24日より配信をしている（参照：下記URL）。

(<https://www.youtube.com/watch?v=yd12wbZaslw>)

学芸員課程紹介動画の場合は、2年生男子と3年生女子へのインタビューが、実際に授業が行われる学芸員課程実習室と本学所蔵コレクションが保管されている附属図書館地階にある北駕文庫内を使って実施され、学芸員課程教育の魅力を余すところなく伝えてくれている。これにより新入生が学芸員に対し従来に比べ、はるかに具体的なイメージを作りやすくなっている。協力してくれた2人の学生にはこの場をかりて感謝したい。

昨年（令和4年2月22日付け）、博物館法の一部を改正する法律案が閣議決定され、その後の通常国会でこの法律が成立した。注目すべき点として、博物館の事業に、博物館資料のデジタル・アーカイブ化が追加され、他の博物館の事業等との連携や、地域の多様な主体との連携・協力による文化観光等の活動を活性化し、地域の活力向上に資することを努力義務としている（第3条）。本号の「2022年度博物館資料論講評」で水崎禎先生がいみじくも述べておられるように、以前のアーカイブは公文書的な性質が強かったが、デジタル化により活用の可能性が急速に広がり、公文書的な性質から歴史資料としての性質をより強く帯びるようになってきている。今後ますます、「資料」に付随する単なる「資料についての情報」という考え方から、「情報という資料」という「実物資料」に対しても対等な価値を有していることを前提とする考え方への大胆な発想の転換が求められるようになっていくであろう。

学生課外活動報告で取り上げた3本のレポートは、本学の学芸員課程で初めて実現した斜里町立知床博物館における学生の自主的な活動の紹介である。この企画をご紹介くださり、博物館で学生たちを終始丁寧な指導された宇仁義和さんに、この場を借りて篤くお礼申し上げたい。